

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2016年度 事業報告書



Asama Yatsugatake Panorama Trail
—Mimakigahara



「自然とのふれあいが

子どもたちの創造力を豊かにする」

公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団

理事長 安藤 宏基

公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団は、創設者安藤百福が掲げた「食とスポーツは健康を支える両輪である」の理念のもとに、青少年の健全育成と食文化向上のための事業を行っています。陸上競技の支援事業、独創的な基礎研究、食品開発、ベンチャーなどを支援する食創会「安藤百福賞」表彰事業、発明記念館の運営（大阪府池田市と横浜みなとみらいの2ヶ所）のほか、1983年の財団設立当初から、自然体験活動の普及に取り組んでいます。

「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」では、「自然体験は子どもたちの体力、創造力、チャレンジ精神を育む」との考えに基づき、全国の学校や団体から自然体験活動の企画案を公募、その実施を支援し、優秀な活動団体を表彰しています。また、子どもたちの自然体験活動を推進するための人材育成や、アウトドア活動を普及することを目的として、2010年5月に「安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター」（略称:安藤百福センター）を長野県小諸市に設立しました。

この2つの事業に加え、子どもたちの自然体験の活動場所は、山、海、川や身近な森林が中心で、どのフィールドでも「歩くこと」が基本であると考え、NPO 法人日本ロングトレイル協会と連携し、ロングトレイルの普及・振興のためのお手伝いを行っています。

2016年から、新たな国民の祝日として「山の日」（8月11日）が制定・施行されました。私も微力ながら「全国山の日協議会」（谷垣禎一会長）の副会長として活動に参加させていただいておりますが、「山の日」の施行が自然体験やロングトレイルのより一層の普及に繋がることを期待しています。

今後とも引き続き、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

安藤百福記念
自然体験活動指導者養成センター

2016年度 事業報告書



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

2016年度 事業報告書

CONTENTS

特集「ロングトレイルは次のステージへ」

ロングトレイルと歩く文化の創造	中村 達	4
人間は考える脚である	節田 重節	12
第4回ロングトレイルシンポジウム		14
ご挨拶	中村 達	14
安藤財団がロングトレイルを支援する理由	安藤 宏基	16
信仰の道と現代のロングトレイルを語る		
藤波 源信、小山 邦武、節田 重節、神長 幹雄		19
環境省が取り組む長距離自然歩道(ロングトレイル)	奥田 直久	34
ダイヤモンドトレールを軸にした地域の連携と魅力発信	赤井 俊夫	42
国内初開催！ワールドトレイルズカンファレンスの報告	高務 裕子	47
ご挨拶	佐伯 雅視	54
各地のトレイル紹介① 広島湾岸トレイル		55
各地のトレイル紹介② 山陰海岸ジオパークトレイル		59
新たなステージを迎える浅間・八ヶ岳パノラマトレイル		62
ロングトレイルハイカー入門講座		64

小諸 Tree House Project

76

事業報告

自然系ビジネス・コミュニケーションセミナー	79
自然系ビジネス・スタートアップセミナー	82
みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！	84
みんなでパール浅間を見に行こう！	85

橋谷晃さんと歩くトレッキング講座	87
第6回浅間大学院生セミナー	93
自然ガイドステージⅠ 登山ガイドステージⅡ スキーガイドステージⅠ 安全管理技術研修	96
安藤百福センター事務局スタッフ紹介	102
事務局コラム	103

巻末資料

新聞掲載記事	106
安藤百福センター運営組織	110
2016年度実施事業	111
2016年度研修利用状況表	112
編集後記	116



ロングトレイルは次のステージへ

ロングトレイルと歩く文化の創造

中村 達 (安藤百福センター・センター長)

先日、ある山岳雑誌の編集長からメールが入った。「ロングトレイルという言葉は、すっかり定着しましたね」

ロングトレイルという言葉が国内で知られるようになったのは、せいぜい10年ほどだろうか。定着したといっても、意味が完全に理解されているかどうか自信はない。メディアでは「長距離自然歩道」と解説しているところも多いが、ややニュアンスが異なるように思う。

直訳して「長い道」といっても、それはどのぐらいの長さなのか。踏破するのに必要な日数は、と問われても答えに困るのが実際だ。そこで、踏破するのに最低でも数日はかかり、距離にして40~50kmというところだろうか、と答えている。これは日本ロングトレイル協会に加盟しているトレイルで、最も短いトレイルの長さである。



日本ロングトレイル協会加盟トレイル

私の知る限り、世界のトレイルで「ロング」を冠しているトレイルはほとんどない。つまり「ロング」と称さなくとも、トレイルは「それなりの距離」があるのが常識なのだろう。したがって、国内のロングトレイルとは概念であって、歩く人、つまり「ハイカー」がイメージしやすい便宜的なもの、と考えるとわかりやすい。

とはいえ、ロングトレイルを普及・振興するにあたって、気にかかることがあった。ロングトレイルという単語が、第三者によって商標権が取られ、使用するのに制限がかけられるのではないか。名称の使用に制限がかかると、ロングトレイルを広めるのは難しい。しかし、名称の商標権取得にはそれなりの費用がかかり、手続きも素人には煩雑だ。そこで、安藤財団と日清食品 HD に無理をお願いして、商標権を取得いただいた。ただし、これは名称使用の占有権というより、ロングトレイルを普及させるために、誰がどのように使用しても構わない、制限をかけないということが狙いである。お願いしておいて条件を付けるのは失礼な話ではあるが、この無理を聞いていただいた。

その結果、ロングトレイルという単語は、何の制限もなく自由に、誰もが使えるようになった。そのこともあって、言葉として定着しつつあると考えている。

アウトドアの基本は「歩く」

さて、日本における自然体験とは、読書から登山や探検まで、その範囲を広く解釈しているところがある。これではよくわからない。英語の **outdoors** を教育的視点も加味して翻訳すると、自然体験になるらしい。では、自然体験を英訳すると **natural experience**。これを再び日本語に翻訳すると、「自然な体験」である (**excite** 翻訳)。ややニュアンスが違ってくる。本来は **outdoors** であって、自然体験という言葉は日本語独特の言い回しのように思う。やはりその本質は **outdoors** そのものだろう。

このアウトドアズの原点は「歩く」ことであると考えている。運動の基本も「歩く」であり、すべてここから始まる。この国の地勢は、山岳丘陵地帯と海岸線で占められていると言っても過言ではない。日本列島は縦に長く、亜熱帯から亜寒帯までの気候が分布して、多雨、高温、豪雪、寒冷などによって動物・植物、中でも植生は非常に豊かである。山間部は急峻で、3000mを超える山脈と深い峡谷で構成されている。

歩くとこの地勢と豊かな植生を肌で感じるができる。風の音、鳥のさえずる声、時には遠雷も。雲の流れや形状の変化も多彩で、高度を上げると、その変化は一段と増す。

そんな山岳地帯を友達や兄弟と助け合って登り、歩くことで、お互いの信頼感が増し、友情も深まることを経験的に学ぶはずである。

苦しい急峻な山道を、トレイルを、一步一步、前に足を踏み出して足跡をつけていくのだ。山頂に立てば、トレイルのゴールに至れば、得も言われぬ感動と達成感が待っている。山頂から大地を俯瞰できる展望の素晴らしさは、一生涯忘れることはないであろう。

う。

2017年(平成29年)5月6日(土曜日) 夕刊 青森新聞 発行 青森

ロングトレイルで歩く旅

登山道や古道 市街地を走らない長距離の遊歩道。ロングトレイルの人気が高まっている。国内に初めてコースができる今年で10年。現在は15所あり、さらなる所整備が進む。健康増進や意志のトレーニングのながりが豊かであるとみられ、新たな観光資源としても期待されている。

国内に18コース

登山道や古道つなぎ観光資源に

「活動範囲が広がり、楽しみが増える」と期待されている。国内に初めてコースができる今年で10年。現在は15所あり、さらなる所整備が進む。健康増進や意志のトレーニングのながりが豊かであるとみられ、新たな観光資源としても期待されている。

「活動範囲が広がり、楽しみが増える」と期待されている。国内に初めてコースができる今年で10年。現在は15所あり、さらなる所整備が進む。健康増進や意志のトレーニングのながりが豊かであるとみられ、新たな観光資源としても期待されている。

「活動範囲が広がり、楽しみが増える」と期待されている。国内に初めてコースができる今年で10年。現在は15所あり、さらなる所整備が進む。健康増進や意志のトレーニングのながりが豊かであるとみられ、新たな観光資源としても期待されている。

コース名	全長(km)
1 北信濃ラフウェイ	71.4
2 北信濃ロングトレイル	100
3 奥州縦断トレイル	117
4 奥州縦断トレイル	80
5 奥州縦断トレイル	80
6 奥州縦断トレイル	80
7 ハッポウ山スーパートレイル	200
8 奥州縦断トレイル	120
9 奥州縦断トレイル	120
10 金沢トレイル	70
11 奥州縦断トレイル	80
12 奥州縦断トレイル	40.7
13 奥州縦断トレイル	289.1
14 奥州縦断トレイル	124
15 奥州縦断トレイル	45
16 奥州縦断トレイル	100
17 奥州縦断トレイル	70
18 奥州縦断トレイル	100

「活動範囲が広がり、楽しみが増える」と期待されている。国内に初めてコースができる今年で10年。現在は15所あり、さらなる所整備が進む。健康増進や意志のトレーニングのながりが豊かであるとみられ、新たな観光資源としても期待されている。

読売新聞 (2017. 5. 6)

一方で、例えば自然を歩くには、読図などの基礎知識が必要だ。また、事前の下調べや学習も大切で、目的とする山の、トレイルの情報を入手しておくことも忘れてはならない。装備や携行する食料・燃料などの重量や消費量も計算して用意する。これらの準備は、近郊のハイキングであっても、厳冬期の登山であっても、量や質の違いはあれ、ストラテジーは変わらない。

つまり、山を登る、トレイルを歩くというのは、テクニックや体力だけでなく、基礎知識とともに、経験に裏打ちされた総合力が求められるわけだ。ただ、この総合力の獲得は、終わりのない永遠の学習でもある。

自然体験は「歩く」から始まる

「人は旅に出ると学者になる……」と言われる。街中や職場ではただのオヤジが、旅に出ると、目に映る風景を前に眠っていた好奇心を呼び覚まされ、「あの山の名前は……」「この川はどこへ続く……」「この木の名前は……」「この花は……」と、学者のように疑問や不思議に対して、好奇心旺盛な振る舞いが見られる。小諸市の懐古園で、島崎藤

村の句碑を見れば、学生時代に読んだ『千曲川のスケッチ』や『破壊』を思い出し、帰宅したらもう一度読んでみようと、その場では思うことだろう。

中根津町市街地一帯子根町美
留和を結ぶロングトレイル（長
距離自然歩道）「北根室ラン
ウェイ」を舞台とした北の強歩
遠征が9日行われ、義務教育学
校・町立計根別学園（水谷隆夫
校長）1～9年生約130人が、
新緑の大地を踏破した。随筆家
の佐佐木謙さん（60）ら有志が、
北根室ランウェイの整備に著
手し10余年、目標の一つだった
学校教育での利用が実現。五感
で自然を感じ、地域を学ぶ「歩
く教育」が、今後も広がりを見
せそうだ。（原田未央）



計根別学園1～9年生130人歩く

初の強歩遠征
学校教育利用実現

北根室
ランウェイ

北根室ランウェイは、
奥平山脈の北根室山脈に全
長約10キロメートルの自然
歩道が整備されている。随
筆家佐佐木謙さん（60）ら
有志が、北根室ランウェイ
の整備に著手し10余年、
目標の一つだった教育
での利用が実現。五感
で自然を感じ、地域を
学ぶ「歩く教育」が、
今後も広がりを見せて
そうだ。

計根別学園1～9年生130人
が、9日、北根室ランウェイ
の整備に著手し10余年、
目標の一つだった教育
での利用が実現。五感
で自然を感じ、地域を
学ぶ「歩く教育」が、
今後も広がりを見せて
そうだ。

一本橋で渡る小川は自然のアトラクション

計根別学園1～9年生130人
が、9日、北根室ランウェイ
の整備に著手し10余年、
目標の一つだった教育
での利用が実現。五感
で自然を感じ、地域を
学ぶ「歩く教育」が、
今後も広がりを見せて
そうだ。

学校のトレイル活用も始まった 釧路新聞（2017.5.9）

が、子どもたちにとって自然はさらなる不思議に満ち溢れ、発見と感動が連続してやってくる。教室や校庭、あるいは施設内だけでは得られない体験が、自然の中には必ずある。

日本の地勢は山岳丘陵地帯が約 70%を占める。歩けば山や丘に突き当たるのが特徴だ。極論すれば、好き嫌いは別にして、アウトドアのフィールドは大半が山岳地帯である。ロングトレイルも古道も、ほとんどの山岳地帯にある。海岸沿いのトレイルも、山地が直接海に落ち込んでいるところが多く、上り下りの急峻な地形となっている。

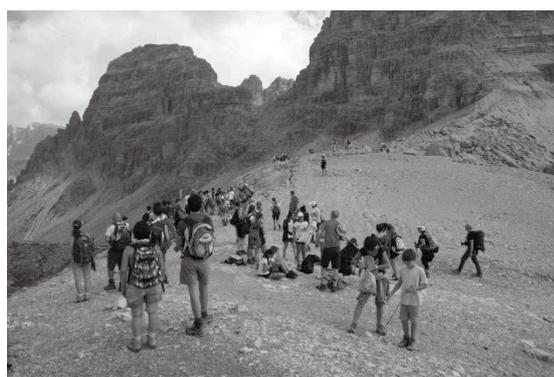
したがって、山岳部であれ海岸部であれ、そこを通るトレイルを長時間歩くにはそれなりの準備が必要となる。特に、トレイルの多くは山地に設けられているので、常に危険が存在する。そのため、子どもたちや集団には、指導者による適切なガイディングが要求される。また、万が一に備えてのレスキュー態勢の整備も、トレイル運営団体や地

元関係者に求められる。

現在、トレイルも含めたガイドングには、(公社) 日本山岳ガイド協会の認定ガイド(山岳ガイド、登山ガイド、自然ガイドなど)が代表的な公的資格となっている。この制度に基づいた、さらなるガイドの育成と資質の向上が課題である。特に、インバウンドに対応できるガイドは非常に少なく、早急な人材育成が課題であり、この分野についても安藤百福センターの役割は大きいと考える。



米国アパラチアン・トレイル近くの森で



イタリア・ドロミテ山中で学校のハイキング

インバウンドとロングトレイル

現在、訪日外国人が急増している。観光庁によると東京オリンピック開催年には4,000万人が目標だが、達成は十分可能とされている。外国人観光客は東京や京都から地方の中核都市へと向かい、いまでは地方都市、そして自然豊かな田舎などへ足を向け始めた。中でも欧米の旅行者はバックパックを背負い、山岳地帯を歩いている人も多い。上高地などからのトレイルでは、そんな外国人バックパッカーやハイカーが、かなり目立つようになった。

また、北アルプスの稜線でも欧米からのハイカーが増えてきた。「こんな美しい風景は見たことがない」と感嘆の声が聞かれた。

同様に、各地のロングトレイルも、多くの外国人が歩き始めている。明治の初め、宣教師ウェストンが槍ヶ岳などを登り、日本の山々を絶賛した。鉱山技師で冶金学者でもあったガウランドは、「日本アルプス」と命名した。また、女性旅行家のイザベラ・バードは東北地方を旅して、日本の美しさと、日本人の素晴らしさを『日本奥地紀行』に著した。

このように、外国人に逆輸入されたかのように日本の自然を称賛されると、改めて私たちはその素晴らしさを再認識し、自然に足を向けるのでは、と期待する。

外国人ハイカーがバックパックを背負い、ロングトレイルを旅してくれれば、日本の風景も違って見えることになるだろう。

アウトドア・データの検証

ロングトレイルがブームだと言われているが、私はブームでロングトレイルができるものではないと考えている。なぜなら、ロングトレイルの開設は構想を練り、地域社会の合意形成を図り、実際に整備と運用を行うまでには、最低でも5年程度の年月が必要だからだ。その間、ブームに頼って作業を行っても、持続するのは難しい。

また、トレイルを整備するには、利用（参加）人口や潜在需要としてのアウトドア人口を把握しておく必要がある。このトレイル利用人口とも呼べるものが、どの程度のマーケットになるのか予測しておくことも重要である。

一方で、現在は空前のアウトドア・ブームとも言われている。周囲のモノを見ても、デイパックは、当たり前のように老若男女を問わず肩に掛けている（ストラップスの長さは別にして……）。ダウンウェアは、かつては高価なもので、ヒマラヤ登山隊や極地探検隊だけに着用が許されたような装備品だったが、いまや誰でも1つや2つは持つ日常着となっている。防水透湿素材が採用されたパーカーなどは、スーパーでも売られているし、レインウェアとしても非常にリーズナブルな商品となった。

また、アウトドア・ファッションなどというジャンルもできて、ファッション誌でも特集が組まれている。

一方で、健康志向を背景にしたウォーキング・ブームでは、ウォーキング・シューズがよく売れている。ウォーキング・シューズやトレッキング・シューズを履いて、バックパックの中には、リーズナブルになった防水透湿素材のパーカーが入っている。また、昨今ではストックを使ったノルディック・ウォーキングや、ダブル・ストックのウォーカーも街角で見かけるようになった。

では、これらの参加人口はどの程度なのだろう。日本百名山登山が人気で、全山踏破を目指して登っている「登山者」も数多く存在する。しかし「登山」とはどのようなアクティビティなのかの定義さえ、いまだ定まっているようには思えない。夏の富士「登山」と厳冬期の「登山」は、全くの別物である。高尾山は関東地域では人気の山だが、登山ではなく、事実上はハイキングだろう。もっとも、高尾山登山の方が、語呂はいい。ただ、これら参加人口を一括りにして「登山人口」と称しているのが、果たして正しい実態を表しているか、疑問である。このことが、正確な参加人口を分かりにくくしている要因だと思う。

唯一「レジャー白書」のデータがよりどころだが、散歩、ピクニック、ハイキング、トレッキング、登山などの定義は判然としない。ましてトレイル人口などの推計は、いまだなされていない。

米国では「outdoors は国是」とも言われているように、アウトドア・データは詳細に分析されており、アクティビティの定義と参加人口などが的確に分類されている。例えば、登山はClimbingに分類され、Traditional, Ice, Mountaineeringと補足している。

ちなみに参加人口は約 160 万人。Backpacking は約 700 万人で、Hiking が約 3,450 万人である。日本で知られている登山人口はおよそ 800 万人で、米国よりはるかに大きい。これは登山とは何か、ハイキングとは……などの定義がなされないまま、今日に至ったからであろう。

日本のアウトドアはようやく社会に広がり、日常性を持ち始めたと考える。これまでは、一部の特殊なアクティビティと認識され、この分野のマーケットにさほど関心は示されなかったように見える。ありていに言えば、さほど魅力のあるマーケットには見えなかったということだろう。

そんな中で、ファスト・ファッションをはじめとする様々な産業が、アウトドア・レジャー分野へのエントリーを模索し始め、「アーバン・アウトドアライフ」にもリアリティが見えてきた。アウトドアズのトレンド、若者たちのアウトドア動向などは、特にこの分野に参入しようとする産業にとっても、大変有用なデータになると思う。

そして何よりも、アウトドアズや自然とともにある暮らしを、私たちのライフスタイルの一つにしたり、子どもたちの自然体験活動を促進するには、確かなデータに裏打ちされた展開が必要である。「歩く文化の創造」への道程には、絶対条件であろう。

日本のロングトレイルから世界のロングトレイルへ

昨年 10 月、鳥取県で WTC (World Trails Conference) が開催された。わが国では初めてのトレイルの国際会議で、世界 19 ヶ国・地域から約 200 名の参加があった。欧米の主要トレイルはもちろん、南アフリカ、パナマ、香港、トルコ、ギリシャなど各地で多くのロングトレイルが整備されていて、そのプレゼンテーションが行われた。多くのトレイルは、整備されて 10 年そこそこと、国内の多くのトレイルと大きな違いはなかった。整備の目的は大半が観光であり、地域の活性化であった。同時に子どもたちの体験の場というのも、目的の一つにしていた。

また、誘客のための「マーケティング」が共通の課題であり、その戦略をいかに行うかに高い関心が集まった。国内のトレイルでもマーケティングは話題にはなるが、これほど盛り上がることはないと言っていいだろう。

インバウンドを想定したロングトレイル・マーケティングは、国内のトレイルでも大きな課題になる。国際的な視点でロングトレイルの誘客とサービス・システムをどう構築するか、その考察は安藤百福センターでも必要な作業である。



国内には日本ロングトレイル協会加盟の18のロングトレイルがあり、未加盟や現在構想中のものなどを合わせると、40～50トレイルになると推計している。これらのトレイルの利用が進み、子どもたちの自然体験のステージとして、さらにはインバウンドの受け入れ先として機能することが求められよう。

ロングトレイルは単に一本の「長い道」ではなく、その道に多様な自然と歴史、そしてそこに住む人々の暮らしがある。自然、教育、癒し、健康、アクティビティ、冒険、調査、踏破、登頂、食べる、寝る、など多彩なコンテンツが存在する。そのコンテンツが、歩く人それぞれの物語として記憶されることを願ってやまない。

「山道は、思えば不可思議な道である。人の心が、なにをこれに求めようとしたのか、臍気ながら解るように思われる。そうした不思議さを意識せずとも、山の道を辿る時、人の心は、この不思議な力に強く支配されているに違いない。」

浦松 佐美太郎『たった一人の山』より

「人間は考える脚である」

節田 重節（日本ロングトレイル協会会長）

歩くことにより「何か」が見えてくる

近年、全国的にトレイル・ウォーキングが盛んである。

さらに、「第4次登山ブーム」とも言われており、これらトレイル・ハイカーたちを含め、特に登山人口の底辺が大きく拡大している。人々の「自然志向」や「健康志向」の表れであり、歩くことの大切さ、面白さを人々が改めて実感したということであろう。真に好ましい傾向で、永年、アウトドアズマンたちが提唱してきたこのようなライフスタイルがやっと浸透してきたか、と感慨深いものがある。

「歩く」という行為は人間にとって最も基本的で、プリミティブな行動であるが、単調な割には奥が深い。機械的な移動手段に頼らないで歩くスピードは、物を見て、感じ、味わうのに最適なペースと言えるのではないだろうか。また、「無心で歩く」などというものの、実際には、人間は歩きながら何かしら考えている。すなわち、頭だけでなく、脚でも考えているのである。

京都・東山の麓にある琵琶湖疎水沿いの小道を「哲学の道」と言う。四季を通じて人気の散歩道で、京都学派の哲学者・西田幾太郎や田邊元らが好んで散策し、思索を巡らせたと言われることから命名されたものである。哲学的な思索とは言わないまでも、例えば登山者が山を歩いているとき、一步一步山道を踏みしめながら、苦しい息遣いの中で、それでも「何か」を考えている。どれぐらい歩いたのだろうか、このぐらいのペースで山小屋に着けるだろうか、皆の体調はどうだろうか、雲が厚くなり風が出てきたが、天気は持つだろうか、この花は、この木は何という名前だろうか等々……。

一方この国は、経済的成長や暮らしの便利さを求めて、ひたすら上を目指してきた。ところが、そのような表面的な豊かさや便利さを享受できる反面、内面的には何かを失ったような、物足りなさを感じている人々が多いのではなかろうか。

このような状況の中、10年ほど前から「ロングトレイル・ウォーク」が注目されている。古来、「四国八十八ヶ所遍路」や「お伊勢参り」を持ち出すまでもなく、日本には「歩く文化」が連綿と生きてきた。もちろん、交通手段が未発達という時代的背景もあるが、「歩く、見る、聞く、食べる」旅の中で、人々はいろいろな体験をし、大いに楽しんできたことであろう。その歴史的延長線上に「東海自然歩道」があり、そのようなDNAが近年のロングトレイルの誕生に繋がっていると思う。

私たち日本ロングトレイル協会には現在、北は北海道・北根室から南は九州・国東半島まで、18トレイルが加盟している。そのほか、事情により未加盟だが既存のトレイ

ルがいくつかあり、さらに計画・準備中のトレイルも加えると、40～50 トレイルになるのではなからうか。これら各トレイル間の交流や情報交換の場として協会が機能しており、安藤スポーツ・食文化振興財団のご厚意により、2015年からその事務局を長野県小諸市の当センターに置かせていただいている。

ロングトレイル・ハイカーの聖地に

当センターは創設7年目になる本年、センター長の交代とともに、これまでの事業方針を全面的に見直している。「アウトドアを通じた豊かなライフスタイルの構築」を旗印に、国内で唯一のアウトドア総合センターを目指していくことになった。従来の自然体験活動における指導者の養成を含めて、アウトドア全般にウイングを広げ、この分野の振興・教育・啓蒙活動を行い、センターの利用促進を図るといふ。

その中でメインテーマとなるのがロングトレイルの振興である。当センターと日本ロングトレイル協会が連動し、「ロングトレイルハイカー入門講座」などのイベントを通じて、ロングトレイルの普及促進を図ると同時に、青少年教育や国民の健康づくりに繋がる「歩く文化」や「歩く旅の文化」の醸成を推進していく方針である。また、2020年の東京オリンピックを念頭に、インバウンド対応や安全対策にも力を入れていく心積もりである。そのため、例年2月に開かれている「第5回ロングトレイルシンポジウム」はグローバルな内容とし、海外からもトレイル関係者を招請する予定である。

言うまでもなく、アウトドアの基本は歩くことである。登山を中心として、自然の中で遊ぶということは、あえて「インコンビニエンス（不便）な空間と時間に身を置く」ということであろう。その世界における移動手段は、基本的には「歩き」である。アウトドア全般にウイングを広げた当センターの活動の中に、「歩く文化」を啓蒙するロングトレイルをメインテーマとして据えた所以は、そこにあると言える。

作家・新田次郎の次男で、数学者である藤原正彦氏の講演を聞いたことがある。言うまでもなく、藤原さんは『若き数学者のアメリカ』でデビューし、『国家の品格』というベストセラーを生んだ人物である。

その藤原さんが「小学生のときは、算数や理科は後回しでいい。ましてや英語を授業に採り入れるなんて、ナンセンスだ。まずは国語をきっちり学ばせなさい。算数や理科の問題を解くにも、日本語が理解できなかったら問題外だから」とお話しされた。アメリカやイギリスに留学したこともある数学者の藤原さんが、である。すなわち、すべてのアウトドア活動の基本は「歩くこと」であり、この基本的な運動をしっかりマスターしない限り次の展開はない、という話に通じるエピソードである。

リスタート・ラインに立った7年目の当センターが、日本のアウトドアの中心となり、ロングトレイル・ハイカーが全国から集まってくる「聖地」となっていく日が近いことを期待したい。

第4回ロングトレイルシンポジウム

- 【主催】 特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会
【共催】 公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団（略称：安藤財団）
安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター（略称：安藤百福センター）
【後援】 環境省、観光庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、小諸市教育委員会
一般財団法人 全国山の日協議会
【特別協賛】 ミズノ株式会社
【日時】 2017年2月25日（土）13:30～17:30
【会場】 安藤百福センター

司会：木村 宏（日本ロングトレイル協会常務理事、信越トレイルクラブ理事、
北海道大学特任教授）

進行：村田 浩道（日本ロングトレイル協会理事・事務局長、
高島トレイルクラブ代表理事）

■ご挨拶

中村 達（日本ロングトレイル協会代表理事、
安藤百福センター・センター長、
全国山の日協議会常務理事ほか）



ようこそ、安藤百福センターにおいでいただきました。ここは安藤スポーツ・食文化振興財団がお造りになった建物です。アウトドアや自然体験全般を日本に普及させていきたいと思います。ここで、造っていただきました。その中で、アウトドア文化をしっかりと根付かせていこうということで、ロングトレイルに多大なるご支援をいただいております。日本ロングトレイル協会は、バックパッカーで作家の故加藤則芳氏と私が、トレイル仲間のクラブを作ったらいよいよね、と言ってできたのが2011年でございます。一昨年、NPO法人になりまして、安藤財団さんをお願いして事務局を移し、日本のトレイルの情報発信・集約の場所にしようということで、活動しております。

本日は長野県の阿部知事、伊那市の白鳥市長、小諸市の小泉市長、それから全国から多数の方に参加をいただいております。ロングトレイル協会の活動の一つが、こうしたシンポジウムです。今年で4回目になります。それから全国の各トレイルでフォーラムを行っており、15回を数えるまでになりました。昨年は鳥取県の山陰海岸ジオパークトレイル、北海道の北根室ランチウェイ、金沢トレイルでも行いました。そこでも多数

の方に参加いただきまして、市民の方が、あるいは地域の方が、ロングトレイルとは何かということを理解してもらうために開催しています。

では、ロングトレイルはどうなっていくのだろう、どうしたらいいのか、ということをご一緒に考えましょうというのが、このシンポジウムでございます。

今回はそういう趣旨ですが、安藤財団さんの方から多大な資金をいただいておりますので、いつも聞かれるんです。ロングトレイルとチキンラーメンってどう関係があるの、と言われるんです。いや、そういうことでやっているのではないので、それではこの際、安藤財団の理事長にしっかり説明してもらうのが分かりやすいよね、となりまして、もう一度皆さんにご理解いただきたいということでございます。

それから日本のトレイルは、どちらかと言いますと海外のトレイルを参考にしています。アメリカのトレイル、ヨーロッパのトレイル、あるいはアフリカのトレイル、中南米のトレイルとか、そういったものがどうもイメージにある。でも日本には、考えてみれば1200年以上のトレイル、歩く道の歴史があるんですね。信仰の道です。そうすると、これは修行者、修験者に直接聞いた方がいいだろうということで、比叡山延暦寺の大僧正にご連絡しました。そうしたら「私より阿闍梨さんの方がいいよ」「えっ、阿闍梨さんって生き仏さんじゃないですか、来てもらえるんですか」「行ってまいります」と。去年の暮れに比叡山の坂本の塔頭で、今日おいでいただきます藤波源信さんをお願いして、快くお引き受けいただきました。ありがとうございました。それで信仰の道とはなんだろうと、少し考えてみたい。おそらく、トレイルをテーマにしたシンポジウムとかフォーラムの中で、こういう機会は多分、日本で初めてではないかなと思います。

それに、日本で初めてロングトレイルを作られた信越トレイルクラブ代表の小山さんに来ていただいて、そこに私どもの会長の節田と一緒に加わる。そのコーディネーターを山と溪谷社（以下、ヤマケイ）編集者の神長さんをお願いしました。それから、全国には自然歩道がたくさんあります。これを繋ぐと結構長くなるんです。整備されているのは環境省です。その担当課長に今日おいでいただきました。さらに、大阪には長さ40kmぐらいなんです、ダイヤモンドトレールがあるんです。100万人が歩くトレイルらしいです。大阪からその室長においでいただきました。もう1つが去年、鳥取県でWTC（ワールドトレイルズカンファレンス）がありました。鳥取県って砂丘と大山だいせんしかないんじゃないかと思っていたんですけども、ロングトレイルをやります、と。カンファレンスには世界中の19の国と地域から、ざっと200人がお越しになりました。あの鳥取県に世界中からトレイルの関係者が集まって、正直びっくりしました。半信半疑で行ったんですけど、すごいまともなシンポジウムでございました。その担当の方においでいただきました。

こうした構成で第4回のシンポジウムを始めていきたいと思っております。最後までどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

■記念講演「安藤財団がロングトレイルを支援する理由」

安藤 宏基（公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団理事長、
日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役
社長・CEO）



安藤財団の理事長を務めております安藤と申します。日清食品創業者である安藤百福が、今から34年前に財団を設立しました。特に自然体験につきまして、創業者は大変興味を持っておりまして、それを私が引き継ぐということで行っております。

財団ではいくつかの活動を行っていますが、まず陸上競技の支援がございます。小学生陸上競技交流大会といいまして、都道府県の予選を勝ち抜いた小学5年生と6年生が集まって全国大会を行うということで、全国の小学生16万人が参加している競技大会です。次に支援しているクロスカントリー研修大会は、トラックと違ってちょっとしたアップダウンがあるところで行います。それから新たに「グローバルチャレンジプロジェクト」を始めました。選手が初めてオリンピックの中で外国人選手と交じって戦うのでは、心の準備ができていないので、びびってしまうこともあるんですね。そのために海外へ武者修行に行かせるということで、このチャレンジプロジェクトを行っております。その他に、松岡修造さんが指導する、テニスの男子トップジュニア育成の後援も行っていきます。

そして、自然体験活動支援事業。これに今一番力を入れていきます。「トム・ソーヤースクール企画コンテスト」は、全応募から50団体を選考して表彰するというコンテストです。10万円という小さな金額ですけれども、支援金を贈呈させていただきます。その中から最優秀賞として、文部科学大臣賞あるいは安藤百福賞というような表彰をさせていただきます。このコンテストは2002年から始まりましたので、15年を経て、なかなかいいプログラムが出てきております。これまでの応募総数は2,360団体で、支援団体が670団体という形で年々応募が広がってきております。

自然体験活動には、無人島体験というものがございます。私はこれが大好きでして、自活力を養うには無人島が一番ということで、日清食品の社員研修で実施しております。自活できるということを自分で確認できるというのは、大変重要なんです。ですから有事のとき、問題が起きたときに慌てないという点でも、やはり自然の中で自分だけでも生きていけるという体験をするというのは、大変貴重なことだと私も感じており、社員にも体験させております。

次に、安藤百福センターの指導者養成ですが、これは実際のところ思うようにいっていないというのが現状でございます。大変難しい問題でございます。指導者を育成することはできますが、指導者がちゃんとビジネスとして食べていけるかという、難しい世界です。旅行の添乗員や山岳ガイドの方が、ビジネスとして現実引く手数多のところ

もあろうかと思うんですが、自然体験だけで、というのはちょっと難しい。どうするかということを検討しているところでございます。

ここの場所に短いコースですけれども、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを作っております。またその延伸も考えております。こういう中で、ロングトレイルシンポジウムにつきましては、もう第4回目の開催で、今やはりロングトレイルが一番トレンドだと思います。これは自然に接することについての願望が非常に多くあるからです。ロングトレイルは非常にいいものだ、と私は思っております。

その中で中村代表理事は、将来、日本に総距離延べ 5,000km のトレイルを計画したいと言っておられます。現状では 2,000km の距離だそうです。日本中にきめ細かいネットワークができるということで、日本人がどこでも好きなところに歩いて行けるということですね。それも安全に。どこの国でも危ないところだらけで、行けない国が多いんです。日本自体が今、世界の中で最も安心して旅行することができる国になっている。但し、地震と津波は本当に恐ろしいですね。地震は起きるという前提で建築基準も厳しいし、そういう中で地震が起きたときに、最もミニマイズする方法を我々は考えてきております。ですから、建物にしても耐震用の建物では日本は世界一。個人住宅まで徹底してできているという、こんな国は他にないと思うんですね。津波につきましても、大変なことが起きましたけれども、これからこれだけの被害にならないように、経験の中から対策を講じていくことによって、もし防ぐことができるとするなら、日本ほど安心な国はないなと思っております。そういう日本で、どこに行っても問題にならないようにするというので、皆さま方はロングトレイルを造ることに大変な苦勞をしておられると思います。私はその中で、安全性をどう確保していくかということ、裏方でコツコツやっつけていこうと考えているわけです。

その中で、これまで私どもが協力させていただいたことを申し上げます。まずはホームページです。皆さん方の情報をファイリングしていく役割が、この安藤百福センターであるということ。それからロングトレイルに関する商標登録や協会のロゴの作成。これは皆さん方が自由に使っていただけるマークでございます。ただ、変なところに使われたら困るので、商標登録だけは財団の方でさせていただいております。本当に自由に、無償で使っていただくということが基本でございます。

今後は、安全性を考えまして、ロングトレイルの中の道標を「スマート道標」という形で組み込んでいきたいと思っております。この仕組みは通過型オートマティックアクセスという、ETC と同じで、スマホ対応の道標のところを通過したときに情報が自動的に入ります。通ったときに入山・下山の記録を自動的に残すことができる仕組みです。今この制度を進めております。これを私どもだけで考えるのはちょっと無理でございまして、監督官庁と相談しながら導入していくことが、最も安全につながるのではないかと進めております。スカパーJSATさんの山岳Wi-fiなどいろいろありますけれども、そういうところのご協力も得なければいけないと思っております。

そういう中、日本中で皆さん方がお造りになってるトレイルの道標をうまく設置し、いろいろ自分の身を守らなければいかんというときには、有料ということもあり得るということもお考えになるのもいいと思います。もちろんここには、トイレやホテルといった設備も、皆さん方の中にいくつもあると思います。そういう情報をスマホの中に出せるという方法を今後とも考えていけば、自らアクセスしなくても、逆に通ったときに出てくるというのは大変便利だと思っております。そういう仕組みをいろいろと、インフカムの今社長と詰めている最中がございます。もちろん、監督官庁にもご協力いただきまして、皆さん方と一緒に進めていきたいと思っております。どうぞ、これからご利用いただければありがたいと思っております。

それから先ほど申し上げましたとおり、私が一番考えておりますのは「歩く文化」の醸成というもののお手伝いをしたい、ということです。なぜそうなのかと言えば、創業者は食ばかりではなく、重要なのはスポーツだと、歩くことだということをしごく言っておりました。ともかくその当時、財団を創ったときというのは非行少年がいっぱいまして、食べるだけで、テレビゲームばかりやっていたんですね。あんまりいいこと考えなくて、非行少年化していったのを見てきましたね。やはりスポーツせにやいかんと、もう歩け歩けということでもうさく言っておりました。

これは「歩育」ということです。その前に「食育」というのもありました。創業者は食育もうさく言っておりましたけれども、その後には歩育だと。「保育」園だと僕は間違えていました。それをコツコツと実行させていただいております。

そういう中で「歩く文化」の醸成というのをぜひともやっていきたい。日本は最も安心・安全な国なのだということを、どうしても創り上げたいと思っております。安倍総理ももちろんそうでしょうけれど、長野県阿部知事もそうだと思うんです。やはり一番安全な国なんだ、と。どこに行っても大丈夫なんだ、と。低体温症とかですね、死亡事故に繋がってしまうことはありますけれども、そういうのも情報化の中でなんとか防いでいくことができるでしょうしね。あらゆる災害についても、どういうことが起きる可能性があるのかを発信できれば、安心・安全なトレイルができると私は思っております。逆に考えますと、世界中で安全な国はどこかと考えたら、私は日本だと思うんですね。日本が一番それに近いところにある、と思っております。大変素晴らしい国において、こういうようなことを下支えできればということで、私は一歩一歩させていただくつもりでございます。

各々のトレイルのPRもすごいでしょうし、パンフレットはますます分厚くなるのでしょうけれども、やはり情報化の時代ですから、これはアピール合戦で一番いいところが一番多くの人を集めるということでいいと思います。そういう点で、小諸に安藤百福センターを構えておりまして、情報のセンターとして皆さん方にご利用いただければ、大変ありがたいと思っております。

■鼎談 「信仰の道と現代のロングトレイルを語る」

藤波 源信（比叡山延暦寺 大行満 比叡山千日回峰行者 大阿闍梨）

小山 邦武（信越トレイルクラブ代表理事、元長野県飯山市長）

節田 重節（日本ロングトレイル協会会長、元日本山岳会副会長、
明治大学山岳部 OB 会会長、植村記念財団理事ほか）

コーディネーター 神長 幹雄（編集者、元『山と溪谷』編集長）



○神長：皆さん、こんにちは。山と溪谷社の神長と申します。よろしくお願いします。「信仰の道と現代のロングトレイル」ということで、鼎談を始めさせていただきます。

かなり大きなテーマですので、信仰の道と現代のロングトレイルというと考えちゃうんですけども、やはり今日は藤波さんがいらっしゃっていますので、ある面では中心に伺いながら、歩くということがどんなに素晴らしいことなのか、もしくは現代の信仰の道とどういうふうに繋がってくるのか、ということを含めて、お話を伺ってきたいと思います。

それでは、自己紹介を兼ねて簡単に自分のやられてきたことからお話をさせていただきますと思います。早速ですけど藤波さんに、千日回峰満行とはどういうことなのか、それから歩くということとどういうふうに繋がってくるのか、お話いただけたらと思います。

○藤波：こんにちは。滋賀県の比叡山からお招きいただきました藤波源信と申します。このたび依頼を受けたのは、修行のことを話してくれと言われてまして、こちらまでお招きいただいたわけでございます。修行というのは、皆さんには苛酷とか辛いとかいう思いがあるかもしれませんが、実際修行をしているとか、歩いている人間にとってはそう苛酷という思いで歩いているわけではありません。なぜかと言うと、苛酷だったら長く

続かないからです。大体修行というのは、1000 年以上前から比叡山で行われていて、それが脈々と伝わり現在に至っているわけでございます。もしそれが苛酷というのであれば、もう途絶えているかなと思っております。本人にとっては、毎日歩くのを楽しみながら行っておりますので続いているわけですし、終わった後も、やはり歩くことは忘れずにいるわけでございます。

この千日行は大変歴史がございまして、それが続いている所以が、やはり歩くことの楽しみを見出したからこそ続いているのかなと思っております。太古の昔から皆さん歩いているわけですので、それにこのような「トレイル」という名前を付けたのかなと、昔の人としては、何事かなという思いがあるかと思えます。歩くことが生活ですし、生きるということですので。歩くということ、ただ修行に体系化したのが比叡山の回峰行ということになるのかなと思えます。

回峰行というのはどういうものか。メディアで存じている方もおられますし、また初めて聞くという方もおられると思えます。歴史としては宗教の修行の1つとして始められまして、これが体系化されたものでございます。昔は多分千日行という名前はなかったと思えます。それがいつの間にか続けるということで、千日行と呼ばれたのではないかと考えております。そして、この修行は今ほとんど確立されておまして、千日行というのをよく皆さん3年で修行が終わると思われがちですが、そうじゃなくて、7年間で修行を終えなさいと、現在はなっております。それぞれ7年間といいますと、じゃあ、どういうふうになっているのか。1年目、2年目、3年目は年間100日の歩き。4年目になりますと200日間、5年目になりますと200日間、6年目が100日間、最後に7年目が200日間というふうに、年間ずっと歩くのではなくて、100日または200日歩く行でございます。そして、7年目に初めて千日行を満行したという、ひとくくりがついておるわけです。そして、やはり修行ですので、だんだんとそれぞれの修行のレベルも変わっていくわけです。最初から最後まで同じじゃなくって、徐々に修行の厳しさが増していく。なんで修行の厳しさが増すかという、最初のうちは20kmちょっと歩いているわけですが、次には20kmで100日間、そして、また次に4年目になりますと20kmが200日間と、長い時間を歩かなければいけない。そして、次に6年目になりますと、また距離が延びまして大体40km歩かなくてはならない。そして、最後に7年目のときには、1日60km以上歩かなくてはならない。距離を歩かなくてはならないと大変かなと思えますが、体力も徐々に付いているわけですよ。皆さん最初歩いたときと現在歩けると、やはり体力的にも変わっていると思えます。この修行も徐々に体力が増して行って、長い距離が歩けるというわけでございます。皆さんが考えているものとは相当違うものだと思っております。

そして、7年目に終わるわけですが、比叡山の修行の特徴の1つとして面白いのが、千日と書いてありますが、千日実際歩いていないわけです。最後の25日を歩かずに、975日しか歩かないんです。それでは、25日歩いていないから千日行というのはおか

しいんじゃないかと思われませんが、そこがこの修行の奥深いところで、後の 25 日は一生かけて歩くこと、修行することを持続なさいということで、この千日行は面白いな、と現在も感じているわけです。

○神長：ありがとうございます。続きまして小山邦武さん。信越トレイルクラブの代表理事ということで、そもそも立ち上げから現在のような形まで創り上げた方です。長野県の飯山市長をやられていまして、北海道大学の卒業生でもあります。それでは、小山さんの方から自己紹介を兼ねて、その思いをお話しいただけたらと思います。

○小山：皆さん、こんにちは。飯山から来ました小山と申します。私の生まれは小諸でして、今も私どもの生まれた家は事業をやっておりますので、私もその手伝いをやりながら飯山に住んで、山歩きを少し楽しんでいっているところでございます。私は、藤波さんのお話だけで今日終わればいいな、と思っているぐらい興味のあるお話でした。その中で、私のは大変俗っぽい話が出てくるかと思いますが、若干お聞きいただければ、と思います。

私は小諸で生まれて、動物が大変好きだったものですから、北海道に行って畜産を学びました。しばらく大学で教えていたんですけども、小さいときからの夢を捨てがたく、飯山へ酪農業を営むために I ターンをしたということで、今も飯山に住んでおります。22 年間酪農をやっております、その間、牛の放牧をしておりますと、裏山が関田の山なんですね。この 1000m ぐらいの山並みを何か活かさせればいいな、と思いながら牛の放牧をしていたということでございます。

ひょんなことから飯山市長にということで、行政に関わるようになったわけですが、私が行政の長になって一番大事だと思ったのは、飯山はあまり荒れていない地域なんですね。昔のものがずっとそのまま残っている。このままじゃいけないんじゃないか、という意見もたくさんあるんですけども、このままがまた評価される時代も必ずくる、というような思いで今に至っております。ただ、非常に矛盾するようなことなんですけれども、先輩たちがなんとか新幹線を飯山の駅に停めようという思いで運動を続けてこられたものを引き継いで、「飯山に新幹線を」という旗印を掲げているのも事実でした。ですから、非常に超スピードと超スローで歩くと、これは相反するようなことなんですけれども、今の時代にあっては、そういうことも許されるのかなと思っております。幸いに今、飯山に新幹線が来ております。

私がかつて市長のときに夢見たこのトレイル。「トレイル」なんて言葉は知らなかったんですね。なんとか活かしたいなと思ひまして、そんな私が退任する 2 年ほど前、当時、建設省から広域的な事業は何かないだろうかという相談を受けました。私が自分で温めていたこの関田の山を活かせれば、新潟県と長野県の広域的な事業になるなということで、その準備の委員会を立ち上げたわけでありまして。ちょうど 2000 年ごろでした。今思い返してみても、私どものトレイルが今も持続して皆さんに大変利用されているというのは、最初の 2 年間ぐらい事業をせずに、むしろ自然の調査を緻密にいたしました。

このことがベースになっておりまして、基本的には、途中から加藤則芳さんの精神を活かしていこう、と。「自然に負荷をかけないトレイルならば俺は手伝うぞ」と加藤さんがおっしゃってくださいましたから、それを守らなくちゃいけないということで、重機は一切使わないで、使っても鉋とチェーンソーぐらいでした。いろいろな行政の方のお力もいただいて、特に林野庁の営林署の力が大変大きかったわけですが、そういうお手伝いをいただきながら地域の皆さんと手を取り合って創ったのが、信越トレイルでありました。最初の2年間のこの調査というものが大変有効だったというのは、オープンになりましてから毎年、どの程度自然状況が変わったか、また調査をしてそれを検討委員会にかけて「これはちょっとまずいぞ。この道は使わないで、もうちょっと遠回りした方がいいよ」というような指導をいただきながら維持してきたということであり

ます。今思い返してみますと、やはり私はただ旗を振っただけで、一生懸命汗を流してくれた木村宏君がそうなんですけれども、その人材を得たことで、今日があるなという思いであります。ですから、やはり仕事をするなら、何でもそうなんですけれども、人を得るというのは大変大事だな、とっております。

それからもう1つは、信越トレイルにNPOをつくるときに、どういう精神でトレイルをつくるかということを中心に、ルールづくりだとかトレイルの憲章みたいなことをまとめました。それを守り、はみ出すようなことはしないでいこうということで、あくまでも自然と人間が持続的に関わっていけるようにしていきたいな、ということが基本にございます。

○神長：ありがとうございます。小山さんにもまた後でゆっくりいろいろな想いをお聞かせいただけたらと思います。では、3番目なんですけれども節田重節さん。ヤマケイの大先輩です。節田さんは日本ロングトレイル協会の会長でもありますし、明治大学山岳部のOB会の会長でもございます。植村記念財団の理事もやってらっしゃいますので、ぜひ、ご自分のそもそもロングトレイルとの関わりを含めて、お話しいただければと思います。

○節田：皆さん、こんにちは。今日はたくさんの方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。会長として御礼申し上げます。自己紹介を改めてするのはちょっと照れくさいんですが、明治大学に入りまして、一応法学部卒業なのんですが、ほとんど授業には出ておりません。自慢ではありませんが、年間120日は山で「修行」しておりました。そんな状態で4年間過ごしましたので、就職できたのはヤマケイしかなかったかと思えます。1966年ですから、ちょうど50年前に入社しております。

たまたま最初に配属されたのが『HIKER』という雑誌の編集部でした。ハイカーとは、要するにハイキングをする人ですね。ヤマケイの姉妹誌みたいな形で、ハイキングとか歩く旅を特集するような雑誌でした。そのころ、今日、環境省さんがいらっしゃってますが、1969年に東海自然歩道の構想が発表されました。これは当時、厚生省の国

立公園部に大井道夫さんという方がいらっしやいまして、私どももよく原稿を書いていたいたりしていたんですが、その方がアメリカのアパラチアン・トレイルにヒントを得て、日本にも本格的な自然歩道が欲しいということで発案されたんですね。それを発表されたんですが、これはすごく面白いアイデアだということで、構想段階だがすべてまずは現地調査をしようということで、確か10ブロックぐらいに分けて、実際に社員とかフリーのカメラマンとかに歩いてもらいました。でき上がったのは73年ですから、道はもちろんないんですけども、多分この辺を通るんだよということで、実際どういう環境を通るのか調査してもらいまして、『HIKER』の誌面上で発表したんです。それが、いわば私にとってのロングトレイルとの出会いではないかと思います。もちろん当時、「ロングトレイル」なんて言葉はなく、役所らしい言葉で「長距離自然歩道」という名前でした。これは今でも残っているようですが……。私が担当したのは、鈴鹿峠から室生山地、山の辺の道を通して大津まで歩きました。

そんなことがありまして、ヤマケイには40年間おりまして、山の本を中心に、いろいろな本とかビデオを作っていたんですけども、在職中から中村さんたちにいろいろお知恵をいただきまして、言ってみれば「アウトドアによる地域おこし」をサポートできるようなことをいろいろとやっておりました。サンシャインシティでアウトドアのイベントを行ったり、各地に自然学校をつくることをお手伝いさせていただいたりしておりまして、そのためのNPOをつくりました。そのNPO活動のメインテーマが徐々にこのロングトレイルに収斂されていきまして、先ほど代表理事からもありましたように、2011年に日本ロングトレイル協議会という形で設立いたしました。これは任意団体で、最初は5団体でした。それから10団体に増えまして、現在は18団体になっております。一昨年、2015年に長野県からNPO法人の認可をいただきまして、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会ということで、正式にスタートさせていただいたところ です。

○神長：ありがとうございました。それぞれ3人の方からご自分の活動の概略や経歴をお話いただきました。では、やはりもう1回藤波さんにお話をさせていただきたいんですけども、そもそも一番最初のときに、修行というのは苛酷なものであるというイメージが強過ぎるのではないかとおっしゃっていましたが、我々が考えてもとても大変だなと思います。そのことに関して一番重要なのは、これから修行を始めるといふ最初の一歩みたいなときに、どういう気持ちを抱いて修行を始められたのか、その辺から話をさせていただければ、と思います。

○藤波：私の場合は、千日行という1つの体系の中で、修行では一応こうしなければいけない、ああしなければいけないという決まり事があるわけなんです。それ以前に見習い期間というのがございまして、何をするかというと、千日回峰をする修行僧のお手伝いをするところから始めたわけです。何をするかというと、とりあえず修行のタイムスケジュールで、何時にこれをする、何時にこれをする、というふうにですね、決まった

時間割がございまして、それをずっと 100 日間しなければいけないわけです。そのタイムスケジュールの管理で助けたり、山を歩くときには一緒に歩いたりすることもございまして、そういうところから始めたわけです。

では、自分が本格的にしようとしたときに、最初的一步はセレモニーという感じになっておりまして、これから歩くぞ、という気合いとかそういうのはあまりなかったんですよ。第一歩のセレモニーは、ちゃんとしなければいけないという思いがございまして。出発するときには大勢の方も見えておりましたので、それが 1 日目だったんです。2 日目になりましたら誰も人がいなくて、これで本格的な修行の始まりかな、と思っておりました。やはり続けなければいけないという思いもありましたので、歩けるわけがございまして。もともと私、暗い山道を歩くのにあまり怖さがございませんでした。ほかの人に聞くと、山道が暗いと怖くありませんか、とよく聞かれるんですけども、山道はあまり怖くないんですよ。深夜の 1 時にお寺を出発して、ずっと山を歩く。ただただ歩くというのではなくて、ちゃんと定められた、お参りする地点があるわけです。それを一つ一つクリアしていくわけです。ただ点々と一つ一つお参りしていくと、山を一周したことになったというのがこの回峰行というものでございまして。ですから、自由に歩けるのではなくて、決められたところをずっと歩かなくてはいけない。それを繰り返しているわけがございまして。

季節もあります。大体始まりますのが 3 月の下旬ですから、まだまだ比叡山の方では寒い時期です。それから歩き始めますので、朝寒いところから始まり、そして季節を感じながら歩いて最初の 100 日は 7 月の 5 日ぐらいに終わります。ちょうど梅雨が終わって、これから本格的な夏だなというところで終わりますので、季節感が味わえる。自分が一番感じたのは太陽の動き、また月の動きを身近に感じたことです。毎日歩いていますので、日々太陽の出る時間は変わりますし、月の出る時間も変わりますし、そういうのを体全体に感じて、楽しみながら歩かせていただいたな、と思っております。最初から辛いということは、私の場合はなかったです。

○**神長**：それは珍しいことじゃないかな、という気がしますがけれども……。最初は皆、大変だ大変だと思ってらっしゃいますけれども、あまりそういうふうに思われなかったわけですよ、藤波さんの場合。

○**藤波**：皆さんも、トレイルを歩くときに「これから何 km 歩かなくてはいけないので、大変だ」と思いながら歩く人はいないと思いますけれどもね。「これから何があるのかな」という思いで歩かれるわけです。そして、突発的なことも楽しんじゃわないでしょいかね。分かりきったところを歩くのでしたら、歩く意味がない。「あつ、こんなところにこういうのがある」とか「あつ、こんなところにこういう木があるのか」とか。また、ちょうど春ですので、山菜が芽吹くときなんですよ。そしたら山菜を見たりとか、匂いも感じるわけなんです。そして、山の中というのは人間様がいるだけじゃないですよ。狸もおりますし、狐もおります。熊は比叡山にはほとんどいませんからまだいい

んですけれども、鹿とか猪がおりますので、そういう獣の匂いを感じるというのも、またいいのかなと思っております。

○神長:ありがとうございます。私が少し絡ませていただいた本があるんですけれども、長尾三郎さんという方とは、何冊も本を作らせていただきました。その長尾さんの本の中に『生き仏になった落ちこぼれ』という本がありまして、それもまだ長尾さんが生きていたときに本をいただいて、今回、またちょっと読ませていただきました。私は今、藤波さんがおっしゃられたようなことで、とってもいい箇所があるなと思ったので、ちょっと読ませてください。

「さわやかな日には心が躍った。月の形も変わるし、位置によって光が微妙に変化するのわかる。昨日の景色と今日の景色が違っていることに気がつく。比叡山は動植物の宝庫である」というような箇所がありまして、今、藤波さんがおっしゃられたようなことと、まさに一致するようなお話じゃないかなと思います。

小山さんにちょっとお話を伺いたいですけれども、そういう自然が残っているところをうまく利用して作られたのが信越トレイルじゃないかと思うんですけれども、その自然との関わり、もしくは文化との関わりについてお話しただけなら、と思います。

○小山: 関田の山には峠があります。16 ほどあるんですけれども、自動車時代になってからは、ほとんどその峠は使われなくなった、と。観光で若干車の通るところは少し生きているというぐらいで、車の通らないところは一切使わなくなったというところもありますね。かつては新潟県と長野県との文化の交流とか、いろいろなことがあったと思うんですが、もっとスピード感を持った交流が、車というもので始まっているものから、なかなか山は顧みられなかったということだと思います。

先ほども若干話が出ましたが、学生村というのが当時、飯山にいくつもできました。それで、学生村に学生さんを招くためにいろいろな施設を造ったんですね。その施設が今言えば遊歩道なんですけれども、ほとんど税金で造っております。その税金で造ったものが全然維持管理されていないということ、行政に関わるようになってから知りまして、これはいけない、と。皆さんの地域でもそういうのがあると思うんですね。20 年前に造ったのが維持管理されなくて草ボウボウになった、と。橋も落ちてしまった、と。誰も使わないというのが、いくつもあったと思うんですが、これはもうこういうことをやっちゃいけないなと、私が行政に関わるようになってまず戒めとして動きました。実際にトレイルを造るといえるときに、これはただ税金で造るというのはダメだ、と。地域の皆さんにいろいろ参画いただいて、一緒に汗を流しながら造るという仕組みをつくっていかなくてはいけないな、ということです。私どもに森の家という施設があるんですけれども、その施設のスタッフ、当時は木村君がそこで長をやっておりましたけれども、その皆さんの助けを借りながらボランティアを集めて、多分 20km を造るのに 2,000 人近いボランティアの方の力があつたと思うんですね。もちろんこれには、行政のお手伝いもいただきましたし、資金的なお手伝いもいただきました。また、企業が

らもお手伝いをいただいたところもあり、無手勝流でやったわけではないんですけれども、全部税金で造ってしまったということではない。基本的には文化の交流も記録として残っておりまして、これを活かしながらガイドの育成もしていったということで、お金を使って汗をあんまりかかないで造ってしまうというのでは、後がなかなか続かない、という思いがあります。これから計画を持っておられる皆さん、今日お集まりだと思しますので、なんとか地域の皆さん、あるいは遠く都会の方も、そういうことに大変興味を持っておられる方が大勢いらっしゃるんですね。そういう方にも呼びかけて、汗を一緒に流しながら造っていくというのが、持続可能なトレイルとしては大事なことはないかな、と。それと同時に、先ほど出てきました、かつて長い間続いていたお互いの生活の交流というものも、その中で活かしていければありがたいな、と思っています。

外国の方も入るようになりましたので、外国の皆さんの歩いた後の感想文を見ますと、非常に楽しかったとか、高い評価をいただいております。私どもは、住民の皆さんの足は、決して捨てたもんじゃないという思いでおります。この形がこれからも続いていければ、ありがたいという思いでおります。

○神長：ありがとうございます。今もちょっとお話にありました、外国の方たちが喜んでもらえる道になりつつある、というようなことですが、そこら辺のことを節田さんから、インバウンドの話も含めて、歴史に学ぶということについてのお話をいただけたら、と思います。

○節田：道というのは、人が歩くから道ができるんだと思います。信仰の道にしる歴史の道にしる、それぞれの人々の想いが色濃く染み込んでいるのではないかと思います。だからこそ、現代人もそこを歩いて何か感じるものがある、と。つまり、その道にストーリー性があるからだと思うんです。やはりロングトレイルは、そういうふうな道をうまく活かしながら造られた方がいいかな、と思っています。例えば中山道を歩く人の、確か4分の1は外国人だって言われているんですね。中山道を歩いて良かったことを、今はネット上で報告されますので、それからどんどん派生的に広がってきて、皆さん中山道を歩いていらっしゃるだと思います。彼らにとっては、生きている歴史を実際に自分の目で見、肌で感じたいと、そんな旅の仕方をするからだと思います。その意味で、日本人の遊び方というか観光の形も、徐々に変わっていかねばいけないんじゃないかと思っています。

先ほど山の辺の道の話をちょっとしましたが、これは東海自然歩道にも入っております。奈良県にありますね。日本で最も古い道だと言われておりますが、まさにあそこなんかは信仰や歴史、文学でいいますと万葉集の世界ですね。実際に歩いていただくと非常によく分かるんですけれども、そういう素材が非常にたくさん埋まっているところです。本当に飽きることがない道だと思います。そういう道に代表される、いわば道としての素材というのは、日本にはたくさんあると思いますので、可能性は無限かなと思っ

ております。これはもう車を使っでは無理なこととして、やはり歩くことによって初めて感じられるんじゃないか、とっております。

○**神長**：とても重要なこととお話しされているような気がします。歩くということが、歴史を学ばなければいけないし、それから文化を学ばなければいけないし、肌で感じるものもあるし、自然も非常に感じられるということを含めて、歩くことの重要性というものが高まるんじゃないかと思うんです。

現代のロングトレイルというのは、割と信仰の道から発生しているということもあるのではないかと思います。信仰の道から現代のトレイルに発展的に伸びていくというか、広がっていくこと。例えば藤波さんがやっていたらっしゃる比叡山の回峰道の道もそうだと思いますし、熊野古道や大峰奥駈道、それから四国のお遍路道みたいなものも、そういうことでないかと思うんです。信仰の道と現代のトレイルと違いますか、歩くということに関して、藤波さんがいつも感じられていることとお話しいただけますか。

○**藤波**：このごろはよく御朱印とか納経帳がはやりで、そして、皆さんよく神社仏閣に通われているわけですね。その中で、今でこそ車とか使えますが、昔は歩いて行かれましたんじゃないか、と。そしてもう一つ、巡礼というのは、ただ信仰というのではなくて、僕もちょっとどこかの本で見ましたが、農繁期を終わった後に、楽しみながら小旅行という形で歩かれているのがお遍路さんかな、とっております。やはり私たちは、生活をしなければいけませんので、生活のためには産業的なものをしなければいけない。それ以外に小旅行として、昔の人はお遍路を歩かれたのではないか。または何かの自分の強い思いがあって、神社仏閣を回られたのがこの巡礼でございます。

自分が歩くことによって、景色が変わるんですね。車とか早い物を使ってしまうと、小さい物まで見えなくなってしまう。でも歩いていると、虫に会ったりとか、季節によっていろいろな物が出ているわけです。それを感じながら歩くのが心の癒しになるのかなと、心の調節になっているのかな、とっております。

私も修行中歩いておりますと、いろいろなことがございます。いろいろなことがあるというのは何かというと、心模様が変わっていくわけでございます。日々無心で修行しているかと皆さん思われているかもしれませんが、そんなことは実際ございません。日々いろいろなことを考えております。ほとんど妄想の世界でございます。妄想しながら歩いているわけですが、それがいつの間にか歩いておりますと「あっ、これは間違った妄想なんだ」とか「あっ、これは正しいことだ」と感じさせてくれるのが、景色とかにあたるのかなと思います。そういうのがあるから、人間の精神的な癒しになるのかな、とっております。

ですから、このように修行段階で続いているのだと思いますので、やはり物理的な車とか使わずに、2本の足で歩く、そして感じる、そして頭の中の自然というものの調和を考えるとというのが、歩くことのいいところかな、とっております。そして、歩くことによって体力もつきますし、健康にもなります。やはり今つくづく思うんですけど、

私たちの修行でも、場所場所によって、季節季節によって食べ物が変わってきますと、やはり体力を使うとおいしいのです。そういうのもいいのかな、とっております。

ちょっと余談になりますが、もうこれで1週間以上たちましたけど、修行のために五穀断ちとか塩断ちをしているとですね、ついつい食べ物について執着を持ってしまうんですよね。見る物すべて、ついつい食べ物の方に目が移ってしまう。カップラーメンを見ると、「ああおいしそうだな」と感じてしまうのは、そういう食事制限をしているからかな、と思います。そういう五感を使って歩く修行をするというのが、私にとっての修行じゃないかな、とっております。

○**神長**：小山さん、今藤波さんがお話しされたようなことで、何か想いが通じる場所があるんじゃないですか。

○**小山**：私も歩くということが最近少なくなっているわけですけども、歩くことによっていろいろなことを感じる場合がございます。谷川俊太郎さんの詩の中に「急ぐ」という結構有名な詩があつて、新幹線に乗ってこんなに急いでいいんだろうか、というような詩があります。田植えをしている人の手も見えない、と。先ほど藤波さんもそんなふうな趣旨のことをおっしゃったんですけども、歩くということになると、すべてのいろいろな変化が自分の目にとまって、またそれを考えることができると思います。

それからもう1つ、私の経験で、森の中を歩くことの素晴らしさというのを感じたことがあるので、ご紹介したいと思います。私よりもちょっと先輩の話で、今から7~8年前のことです。その方が東京に住んでおられて、膝が痛くなってバス停1つ歩けなくなったという状況でした。トレイルができたらぜひ一緒に歩こうとお勧めしたんですけど、「ご迷惑かけるから遠慮するよ」ということを言っておられました。「いやあ、歩けなくなったら私も一緒に引き返すから」ということをお話しして、比較的易しいルートを選び、信越トレイルの1区間、多分7~8kmを歩きました。1停留所も歩けなかった方が、休み休みですけども最後まで歩かれた。それから、その方は膝が痛くなくなって、今に至っているという場合がございます。歩くということが、どんなに人間にとって大切なことかということ学びました。

○**神長**：ありがとうございます。藤波さん、今の小山さんのお話をお聞きになられて、何か感じられることがありますか？

○**藤波**：私は「回峰」といって、修行のために山を歩くんですが、どうしても一度、個人的に体験したいという人が出てくるんですね。「ああいいですよ。1人では心もとないので、何名か一緒にこの修行の道を歩きましょうか」と一緒に歩くとかね。数度ありまして、やはり普段歩く道と違いますので、てんでついてこられないんですよ。何でついてこられないかとよく見ますと、足の置き場所が違うんですよ。やはり山歩きの足の置き場所と町で歩く足の置き場所は違うわけです。普段あまりにも整備されているところを歩いていますと、足元を気にせずに歩いている。でも、山道というのはですね、絶えず下を向いてないと、石ころがあつたりとか崖があつたりとか滑りやすいとかある

ので、そこに集中しないと歩けない。でも、集中ばかりしていると、なかなか前へ進めない。そのバランスですよ。でも、これがずっとできないもんですから、初めての人はだんだん遅れていくわけです。まあ比叡山といっても、そう奥深い山でもありませんので、途中でほっとけばいいかなと。「私歩けませんので、先行ってください」と言われてもですね、大変暗い夜中ですから、そうはいかないんです。遭難すると責任問題になりますので。そのときにはやはり「こんなときには、こうした方がいいですよ。こうしましょうね」とか言って、指導というんですかね。私たちのことは先達というんですけどね。そうやって指導してあげると、十分最後まで歩けるようになったわけですから、歩き方とか地形とかいうものは、決まったものではなくて、人間が自然に添わすというんでしょうかね、感じて歩かれた方がいいように思います。慣れている方は、どこまで歩くと疲れるとか、こういうときはこうやってすればいいよ、と知ってるわけですので、やはり人と歩くときには、慣れた方が教えてあげた方がいいように私は思いますし、自然や人に寄り添うということが大切かな、とっております。

○神長：ありがとうございます。先達のお話もちよっとありましたし、人と寄り添う案内、それから一緒になって歩くことの重要性といたしますか、感じるものがやはりいろいろと出てくるのではないかと思います。

節田さんにちょっとお話を伺いたいと思うんですが、そういうものは、どういうところで感じられると思いますか。どこかで、ここまでできた、ここまでできなかったかもしれない、ということが、歩きの中でもあるんじゃないかと思うんです。いろいろな山に登られていると思いますけれども、そういうことを含めて、感じられること、思われること、ここまでだったらこういうやり方ができたということ、歩き方のコツも含めてお話をお聞かせください。

○節田：私の場合、田舎育ちでしたから、個人的な経験で言えばずっと歩いてきたと思います。学生時代はもちろん、卒業後もヤマケイでしょっちゅう山登って、遊びながら給料もらっていたわけですから。考えてみれば、50年近く歩いております。いかに自分のペースをつかむかというのが基本だと思うんですね。当然、体力・経験等に個人差がありますので、皆さんなかなか自分を客観視できないと思うんですけれども、できるだけ自分のペースや体力をしっかりつかんでいただきたい、と。それを経験の中から早くキャッチするのが一番のポイントかな、と思います。

近年、長野県ではなかなか山岳遭難が減らないので、どうしたら減らせられるだろうかということで、私もお手伝いしているんですが、やはり自分の実力と山とがミスマッチなケースで遭難しているのが非常に多いんですね。そういうふうに自分自身の能力・体力をいかに客観視できるか、そういう謙虚さといいますか、スタンスが一番大事かな、とっております。そういうのを理解した上で歩いてもらう、あるいはマイペースで歩いてもらうというのが、特にウォーキングの場合は大切かな、と思います。山登りみたいに、ある程度目標があって進まなければいけない歩き方とは違いますからね。そうい

った意味では、もうちょっと敷居が低いのがウォーキングの世界かな、と思っております。

登山のブーム的な見方からすれば、近年、そういった形で山登りそのものは非常に裾野が広がっております。それによって、こうしたウォーキングの世界に入ってこられる人も非常に多くなったのではないかと、思っております。

○**神長**:ありがとうございます。歩くことの重要性、とても大切なことだと思います。続きまして、少し日本と世界の話に変えていきたいと思っております。小山さんは信越トレイルの話はずっとお話しされてますけれども、少し変わってきたようなところもありますか。外国人が増えてきたということですか……。

○**小山**:私ども信越トレイルを造るときに、加藤さんのお勧めもあって、アパラチアン・トレイルに職員を派遣して、一緒に歩いていただきました。そのことが後の信越トレイルの造り方に、ものすごく影響があったんじゃないかな、と。ですから、外国に学んだということだと思うんですね。違いは何だかというと、先ほど私が申し上げましたように、行政が造った遊歩道は、何年かたつと朽ちていた。ですけど、アメリカではきちっと守られていた。その違いというのは、やはりアメリカの行政がそのことに対しても資金的なサポートをしていますし、それからボランティアの仕組みのつくり方というのも大変参考になりました。そのことを、何とかこれからも信越トレイルに活かしていくためにも、これだけは守っていかなければいけないかと、こんな思いで今はやっております。

○**神長**:日本の道が独特なものというのは、信越トレイルから感じられることはあるのでしょうか。

○**小山**:歩くという行為は、世界中どこに行ってもあまり変わらないと思うんです。日本の場合は、ピークを目指すということが今まであまりなかったんですね。近年になって槍ヶ岳に登るとか上高地に行くとか、そういうことが出てきたんですが、江戸時代はほとんどそういうことではなしに、里山を、あるいは峠を越して次の村に行くというように、いわゆるトレイルだったと思うんですね。その後、日本でもピークを目指すという登山が盛んになったわけですが、そこへ最近、ロングトレイルをつくらうということが各地で立ち上がっております。日本とアメリカの違いというのは、私どもも含めて足りないのは、地域の皆さんとの触れ合いのような、里の皆さんとの交流が少し足りないのかな、ということはあると思います。アパラチアンに行きますと、それが非常に濃いんですね。

○**神長**:ありがとうございます。四国のお遍路なんかでは、かなり人と人との繋がりがうまい具合で出ているんじゃないかと思うんですけども、ちょっと宗派が変わってしまうかもしれませんけれども、藤波さんはその辺どういうふうと考えられますか。

○**藤波**:なぜ四国が続いているかというと、場所によって善根宿とかお接待というのが、地域に根ざしているわけなんですよね。ただ歩くだけだからというのではなくて、場所に行きますとその場所で触れ合ったりとか、また地域の人にも温かく迎え入れて、これど

うぞと食べ物を渡したりする。この触れ合いが何千年と続いているんじゃないかと思えます。比叡山の回峰行のことを言いますと、確かに神社仏閣をずっとお参りをしているんですが、その中の山のお寺さんには、ちゃんと修行しているからとお茶とかお菓子を置いていただいているところがあるんです。ですからそこへ行くと、楽しみでお茶をいただいたりとか、ちょっと食べ物をつまんだりとかできて、これが一つの心の豊かさとか、ちょっと体力が元に戻って、またこれからもう半分歩ける、というふうに繋がっていくわけです。人と人の触れ合いにはちょっとした心遣いが大切だな、と思っております。それがやはり長く続いているわけであります。

あと、個人的なことを言いますと、そういう修行でお茶とかいろいろな食べ物を置いておいてくれるのは大変ありがたいんですが、それが置いてあるということは、必ずそこに行ってお茶を飲んだという印を置いておかなければいけないんですね。もしそこで休んでお茶を飲んだという形跡がなかったら、今日は休みかなとって、それで修行が終わりになっちゃうんですよ。ですから、回峰行には制約もありまして、回っていますとちょっと今日は辛いというときがあるんです。体力的にとか、ちょっと風邪を引いたときには辛い場合もあるんですけれども、休んじやいけない修行ですので、どうしても必ずそこまで行って、ちょっとお茶を飲んだ印をして、そして帰ってこなくてははいけないということで、このお接待も、ときにはいい迷惑だな、という場合もございます(笑)。

日本という国は大変いいところで、あちこちに温泉がありますよね。1日が終わったときには温泉に入れるというトレイルであれば、大勢の人がまたたくさん歩くような気がします。

○神長：ありがとうございます。おもしろいお話を伺いました。それが1つプレッシャーになるということもあると思うんですけれども、そのプレッシャーをどうやって跳ね返すかということも、やはり修行のうちの1つだということで理解しています。ありがとうございます。

そろそろ時間が迫ってきたんですけれども、旅の仕方が最近少し変わってきてるんじゃないか、と。歩くということによって旅自体も変わりつつあるんじゃないか、と。その辺の分析を節田さんにお願ひできますか。

○節田：登壇者というよりは藤波さんのお話を聞く側に回っておりまして、まとめるのがうまくいきそうもありませんが、旧来の、いわゆる名所旧跡を巡る旅と申しますか、いわゆる観光旅行ですね、特に交通手段を使つての旅の形から、徐々にもうちょっと体験型・滞在型へ、あるいは歩くスピードでもっとしっかり触れ合ったり、触ったり食べたり味わったりというふうな旅の方へシフトしているのではないかと申します。そういった意味で、トレイルウォークも皆さんの注目を浴びているんじゃないかと申しますけれども、例えば飛騨の高山が、かなり早くから4ヶ国語ぐらいの対応で外国人に大人気になっているんですね。京都なんかよりもちょっとスケールが小さく、手ごろな街だからと思うんですが。さらに三之町なんかの古い街並みだけじゃなくて、すぐ隣の

飛弾古川で、里山をサイクリングで回るといのが大人気なんですね。これは、それなりの仕掛けをされた方がいるんですけれども……。そういったふうに、外国人の楽しみ方というのは、歴史や文化が生きているところを実際に自分たちの眼で見たいというような形をとるのが、彼ら流の旅だと思います。おそらく日本でも、そういうふうな形へと徐々に変わっていくのではないかと思いますし、かつてはそういう旅の文化がありました。山登りにしても、「山旅」という言葉が明治時代の山の本にはしょっちゅう出てくるんですが、ウェストンにしろ木暮理太郎にしろ田部重治にしろ、皆必ずしもピークだけを目指して旅をしていたわけじゃなくて、ピークを目指すんですが、繋がりとして峠越えがあったり、点だけじゃなくて線の旅が必ずあったと思います。さらには線上の面を楽しむ。旅の広がりといいますか、奥深さというのがあったんじゃないかと思えます。その辺をロングトレイルみたいなものを通じて復活できればいいんじゃないかな、と思っております。

○**神長**：うまくまとめていただいてありがとうございます。最後に1点だけ、ちょっと藤波さんにお尋ねしたいんですけれども、今まではずっと歩くということでの修行と、歩くこととの関連性をお話しされていましたが、「堂入り」というのもあると思うんですけれども、それはまた別のものになるのか、もしくはその修行の中の一環としてあるわけでしょうか。その堂入りがいかに大変かということもあると思うので、少しお話を聞かせていただければ、と思います。

○**藤波**：堂入りというのは通称の言葉で、「参籠」といって、お堂に籠るというわけです。お堂にただ籠るだけではなくて9日間、断食・断水・不眠・不臥といまして、食べちゃいけません、飲んじゃいけません、横になっちゃいけません、そして、寝ちゃいけませんということをしなさい。それ以外にお作法がございまして、お経は読まなきゃいけませんし、真言と言いまして仏様の言葉をたくさん読まなきゃいけません、となるわけです。それを9日間行うわけです。「わぁ大変だな」と皆さんはよくおっしゃられますが、新聞を読んでおりますとですね、よく遭難とかございますよね。山での遭難、海での遭難でございます。その中で助かる人というのはどういう方かという、仮死状態になるというんでしょうかね、心を落ち着けてじーっとしている人が10日以上も生き抜いたという例があるので、この回峰行の9日間だけが大変じゃないように私は思います。ただ、心のあり方なんですよね。大切な心のあり方。心の安堵感さえ維持しておけば、9日間過ごせるわけですし、人間っていうのは、未知なるエネルギーを持っていると思うんです。最近ではテレビを見ていると、よくサプリメントはこういうのを飲みましょう、健康になりますからあれしましょう、というのが多くございます。確かにそれもいいのかもしれませんが、人間が持っている本能というのがあるので、それを蘇らせようというのがこの9日間の修行かな、と。要するに、初めて人間をリセットするというんでしょうかね、体をリセットするというので、9日間の修行があるのかなと思います。

ですから、最初入るときは皆さん辛いかなと思うんですけども、そうじゃなくて、最初から最後までどうなるかという、皆さんお腹が減るだろうというわけですが、お腹が空いたということとはございません。周りにたくさんの手伝ってくれる僧侶もおりますし、心の安心感があるわけです。横についている僧が何を食べたか分かるくらいに、鼻も利くようになります。そういうことはありますけど、別に食べたいという気は起こらないわけです。

そして、水が飲みたい。やはりこのごろは水を補給しなさいと提唱していますが、確かになぜ水を飲むかという、喉が渇くわけですね。では、その9日間、喉が渇かないようにするにはどうしたらいいかという、その人間の体を改造していけばいいわけです。どうすればいいかという、この修行をするのは大体10月なんです。10月に始まりますので、その年の3月ごろから体を調節していく。調節していくというのはどうするかという、塩分を控えめにしておく。食べ物で調節をしておきますと9日間十分いけますし、人間必ず塩分を摂らないといけないとお思いますが、さほど塩分を摂らなくても何とかいけます。水分も摂らなくていいかという、人間の体は上手にできておりますので、空気中からでも皮膚から水分が吸えるように体が変わってくるように思います。人間の体というのは未知なる力がありますので、それを十分活かせばこの9日間は過ごせますし、苦しいのは1日目ぐらいでしょうかね。緊張感とかなんかです。それがだんだんと過ぎますと、最後、7日とか8日後になるとどうかといいますと、あんまり頭の方にエネルギーがいきませんので、思考能力はありません。多分、数学の計算をしろと言われてたら、できないと思います。記憶力もだんだん薄れていくんじゃないかと思います。誰かがいるというのは分かるんですよ。お話はこうやってできるんですが、だんだんと栄養がいかなくなって、この9日間じゃなくずっといるとどうなるかという、自然な形で亡くなっていくのかな、という感じはございます。ですから、痛みも苦しみもなく、自然な形です一つと亡くなっていくように思います。昔から9日間というふうに決まっております、いまだかつて死んだ方はおられませんので……。全くちゃんとした修行でございます。

○神長：ありがとうございます。とても貴重なお話やおもしろい話を伺いました。小山さん、最後に補足すること、もしくは、これはお話ししておかなければいけないことがありましたらお願いします。

○小山：やはり一番大切なのは、道に対してのルールとかを歩く方に分かっていたかどうかということ。それとガイドを付けますので、そのガイドさんの質を上げていくことは、とても大事じゃないかなと思っております。そのトレイルに対する理念を良く理解するガイドさんを養成する。これがなかなか大変なことで、今私どもにもガイドさんがおられますけれども、だいぶ高齢化してきて、若い人たちがなかなか出てこない。そういうことが大きな悩みになっております。ロングトレイルは、距離が長くなればなるほど、ガイドの重要性というのは大切ではないかな、と思っております。そういう意味で、こ

のセンターが役割を果たしていただければありがたいな、と思います。

○神長：それでは、どうもありがとうございました。今日のテーマであります、現代のロングトレイルと、信仰のお話を伺うことができました。本当にどうもありがとうございました。これで終わりたいと思います。

■講演(1)「環境省が取り組む長距離自然歩道(ロングトレイル)」
奥田 直久(環境省自然環境局自然環境計画課長)



こんにちは、奥田と申します。学生時代は山で、どちらかという
と鳥とか獣を追っかけていて、それが高じて林学に進みました。山
を歩いて給料をもらえる仕事があるということで、それはたぶんヤ
マケイだけじゃなくて、実際、環境省にもそういう技術職の仕事が
あるんですね。環境省の職員の名誉のために言うと、最近の職員は、ちゃんと環境を守
りたいというふうに入ってくるんですけど、私の場合は、山に登って給料をもらえるん
だったらいいだろう、と行って入った口です。そういったこともあって、昭和62年
には晴れて上高地駐在の国立公園管理官をさせていただきました。ただ、やはり現場で山
を登ってばかりいて遊んでいたもので、すぐ呼び戻されました。しかし、東京でも「自然
ふれあい推進室」というところで、こういった自然歩道を歩くことの普及・啓発活動
を行ったり、環境教育を行ったりとか、また、ケニアに行ったり、2008年からは那覇の
自然環境事務所長をして、西表島での縦走路の整備とか、そういったものにも携わって
おります。

ご挨拶も含めてここまでのお話をお聞きして、私が皆さんにお伝えしなきゃいけない
ことってというのは、ほとんどないんじゃないかな、というふうに思いました。ただ、準
備をしてきましたので、今日は4つのポイントでお話しさせていただきたいと思いま
す。まず、ざっと国立公園の話。先ほども節田さんの方からお話がありましたけども、長
距離自然歩道というものを、これが我々のいうロングトレイルなんですけど、その歴史
とか実際の課題とか、それから「みちのく潮風トレイル」の話をして、私の話をまと
めていきたいと思っております。

まず国立公園について。皆さんよくご存じの方も多いかもしれないですけども、や
はりロングトレイルを考える上では外してはいけないと思って、簡単に説明したいと思
います。日本の国立公園は、自然の風景地、傑出した自然の風景地を守るという制度
です。自然を守るというふうに思う方もいらっしゃると思いますが、風景地を守る
というのが第一義的な目的だということです。

これは私の駐在していた上高地の写真です。上高地は昭和9年に指定されています。
国立公園法という法律ができたのが昭和6年で、最初の公園の指定が昭和9年だ
ったんですけども、中部山岳国立公園は2番目の指定だったんですね。今申し上げたように、

風景を守る、景観を守るというのは、同時に適切な利用をする。要するに、保護と利用のバランスを取るとというのが非常に重要で、最近になって目的の中に、生物多様性保全に寄与するといった自然保護の考え方も入ってきています。たぶん皆さんの現場では、いろいろな国立公園があるねとか、都道府県立自然公園とかあるねということで、その違いだけ簡単にお伝えしたいと思います。

もともとの国立公園法は昭和 6 年にできたんですけども、自然公園法という形で新しい制度に組み替えられたのが昭和 32 年です。国立公園は国が指定して国が管理する、国立公園は国が指定するけれども都道府県が管理する、都道府県立自然公園は大本の法律にその規定はあるけれども、条例によって都道府県が指定して管理するといった違いがあります。

先ほどもアメリカのアパラチアン・トレイルがきちっと管理されているという話があったんですけども、実は日本とかイギリスの公園は、土地所有に関わらず指定ができるんです。私有地であっても、国有地でも。国有林は林野庁が持っているので、環境省が何かやろうとすると、いろいろ文句を言われてしまうところなので、非常に難しい部分もあるんですけども。ただ、公用制限を私有地でもかけるという点では、非常に強い法律とも言えます。それから、アメリカの場合とか、オーストラリアとかスイスといったところでは、土地所有権をちゃんと公園当局が持っている、と。警察権まで持つてるところもあるんで、公園専用地とする。だから国が責任を持ってそこも最後まで管理するという、そういう仕組みになっています。ただ、日本の場合は地域制なので、本当に国が指定してても都道府県にいろいろなことをお願いしますし、場合によっては民間の方々、NGO の方々とも協力していかなければやっていけない。アメリカも、だんだん行政はお金も足りなくなってくる部分もあるので、そういうコラボレーションは一生懸命やっていますけども、基本的には政府機関が直営管理する。こういう違いがあるのを頭に入れておいていただけたら、と思います。

これからの国立公園、その大本は昭和 30 年代、もしくは戦前にあったというのは、やはり自然を大規模な開発から守るため、もしくは利用の増進とか非常に大規模なマスツーリズムですね、それを受け入れる場所として考えられていたというふうに一般に言われています。国立公園の管理も、私有地にしたとしても、国のレンジャーがちゃんと現場に行っただんばろうというところまでやってきましたけれども、新しい時代になるに従って、単なる原生的な自然を守る、大規模な開発から守るというだけでなく、人の手の入ったところをどう保全していく、もしくは修復していかなきゃいけないんじゃないか、こんな課題も与えられてきています。それから、マスツーリズムだけじゃなくて、自然と本当に触れ合う、むしろ体験型・滞在型の利用、エコツーリズムと言われているようなものを進めなきゃいけない。さらには、管理そのものも地域の人々や利用者と協働しながら豊かな地域をつくっていく。実際には、現場にレンジャーが行くとですね、戦前のお上至上主義の時代じゃなくて、地域と一緒に地域のことを考えながらや

っていかなきゃいけないっていうのは、我々も分かっていたんですけども。これは国の行政の政策として、きちっと位置付けられてきているというのが最近の動きです。さらには、外国人観光客を誘致しようと、今2,000万人なのが4,000万人になるというので、国立公園でもある程度受け入れられるようにしようというのが、最近の話題としてはあります。

ちょっと前置きが長くなりましたけども、ここから長距離自然歩道の話に移りたいと思います。先ほど節田さんのお話にもありました、東海自然歩道というのが最初のスタートです。まず長距離自然歩道というのは何か。いろいろ書いてあってですね、心身をリフレッシュするとか、自然保護に対する理解を深める。ただ、整備は環境省が計画し、主に自治体の方をお願いをしていることが多いです。今10の長距離自然歩道があります。長々と書いてあったのを整理すると、国土を横断したり縦断したり整備をすることで、多くの人に自然を楽しんでもらおう、と。しかも安全に歩いてもらいたいというのが1つです。もう1つは、優れた自然の風景地、さっき言った国立公園のようなところを楽しんでもらうきっかけをつくりたい。そして、歴史や文化にも触れてもらいたい、と。最後に、そういったことを通じて自然保護の意識を高めようじゃないかというのが、環境省の長距離自然歩道の目指しているところです。

最初が東海自然歩道。昭和45年から整備が始まって、49年にできているものから順次整備して、今整備中なのが、上から3番目にあります東北太平洋岸自然歩道で、「みちのく潮風トレイル」というのを整備しています。長距離自然歩道全体の総延長では約2万7,000kmと、本当にこんなにあるのかなと思いますけれども、計画路線としてはこれだけ整備されています。

それで、先ほど簡単にご紹介した東海自然歩道の構想ですが、『国立公園』という雑誌があるんですけども、1969年の特集号にあります。今回ここから勉強して、少しひも解いてみます。大本はその前年の昭和43年、自然公園制度はどうあるべきかと、審議会でいろいろ意見が出されているんですね。当時、高度経済成長期で、野外レクリエーションでどんどん自然地域に圧力がかかっている、と。それを吸収して、この地域はやはり開発の核になるので、自然公園を立派に造っていきましょう、と。それを繋ぐものとして位置付けられています。

それからもう1つは、イギリスとかアメリカの宣伝に学びましょう、と。昭和43年には、アメリカでもNational Trails System Actという法律が整備されて、たぶんこれがきちっと管理できている大本ではないかな、というふうに思います。簡単に言うと、野外レクリエーションと自然保護を一緒にやりましょう、ということですね。自然公園には、利用と保護という2つの枠組みがある中で、それを繋ぐのが自然歩道です。こういった考え方で東海自然歩道は計画された、というふうに私は理解をしております。

それで、これは1969年、昭和44年に発表されていますけども、ちょうど明治100年ということで、高尾山とか箕面の方で国定公園がこのころ整備されたので、この2つ

を繋ぐ道として整備していこう、と。それで、歩道の付帯施設としていろいろな自然公園設備を造っていきましょう、ということが書いてあるわけですね。このころから、やはり歩道の整備は国だけじゃなく、関係都府県、市町村、民間団体、国民一般で、皆で積極的に参加してもらいましょうということが、昭和44年の段階で書かれていました。

今のはまさに国の政策の側から見た自然歩道ですけども、地域にとってどういう捉え方をさせていただくのがいいかなというので、整理をしてみます。1つはやはり、DMOといった言葉もありますけど、地元でぜひ見せたいもの、見せたいところ、大切なものというのを皆さんに知ってもらおう。そういうコースづくりが大事だろう。それから、やはりこれはたぶん地域で望む、望まないというのはあると思うんで、いろいろ議論していただく必要があると思いますけども、交流人口が増える。そこにやはり来ていただいて、都会の人と地域の人たちが交流し、それでまたリピーターになってもらう。そういったことによって、経済効果とか、その地域でのサービスの向上も期待されています。

それで、先ほど加藤さんの理念のお話がありましたけども、やはり施設は最小限、既存施設を活かしながら、新たな開発というのは、たぶんロングトレイルにとっては望むところではないのかもしれない。これはその場所場所によって変わってくると思います。

続いて、長距離自然歩道の現状と課題。実はいろいろ調べていたら、この九州自然歩道の整備自体はかなり古い時代に行って、再整備をするに当たって加藤則芳さんにアドバイザーとして来ていただいて、いろいろな意味でこの計画作りにお手伝いをいただいたという記録が残っていました。九州自然歩道は、ぐるっと九州を一周するようなルートを取っている自然歩道です。東海自然歩道は、東京から大阪を一本道で繋ぐということなんですけども、ここは全く違う。ネックレスのように、九州全体をぐるっと回れるように繋ぎましょう、というのが計画の1つの特長ですね。それから、単に自然豊かな地域だけではなくて、普通の町みたいなのところも、里山みたいなのところも、集落も含めて通っています。自然だけではなくて、歴史・文化を、温泉とか食についても繋ぐ。そういった自然歩道にしていこうという、魅力の整備がなされています。

具体的には、国が管理する4つの国立公園と、国が指定して都道府県が管理する4つの国定公園、それから、百名山も結構入っているんですね。火山地帯ですから温泉があるのは当然ですし、また、神話のふるさとでもある。古墳も多いし、先ほど話のあった修験道の道も結構あるということです。こういった計画を、再活性化を図るときには見直して、プロットしてみるという作業をした、というふうに聞いております。

少し景色のいい写真を皆さんにお見せしながら、国立公園の宣伝をさせていただきですけども、阿蘇くじゅう国立公園。いろいろな景観要素があるんですけど、1つの特長としては草原景観。これは人為的に管理されていて、肉牛が育つことによって草地を維持する。火入れを行ったりとか、そういうことはしています。ただ最近、そういった肉牛が育たなくなると、こういう景観も守られなくなる。むしろ今、阿蘇ではNPOの方

が、草原景観をどう維持するかというので苦心されています。すなわち、人間の手によって、自然に手を加えることで国立公園の景観が守られているような場所もあるわけです。

雲仙天草国立公園。この普賢岳の噴火というのは、考えてみれば30年近く前の話ですけれども、やはり温泉地帯もしくはそういう被災した場所として、そこからどういふふうに安全を確保していくかというのも大きな課題の公園の1つです。それから霧島錦江湾国立公園。ちょっと前までは霧島屋久ということで、屋久島と一緒に公園だったんですけれども、屋久島を切り離しました。一番最初の指定は霧島国立公園ということで、雲仙天草の雲仙、霧島、瀬戸内海というのが、昭和9年に指定された一番最初の国立公園です。そのうち2つが九州だったんですけれども、ここもやはり火山を中心とした特長のある国立公園として、非常に古く由緒ある公園です。

繰り返しになりますけれども、こういったポイントを繋いでいくということ、すなわち2つの地点を繋ぐということではなくて地域周遊型。それから、さっき申し上げた東海自然歩道は、繋ぐことでその周りに公園をどんどん造っていきこうという形です。当時、まだ公園も少なかった時代ですから、そういうような発想じゃなくて、ここはすでにあるところを繋いでいく、もしくは自然公園に指定されていなくても、普通の集落や地元にある文化みたいなものは、そのまま自然歩道の魅力として位置付けていきこうということです。昔は環境省から出るお金も、自然公園に指定されていないとお金が出なかったんです。それ以外のところについても、国立公園、国定公園以外でも認められるようになった。そういった経緯もあります。

ここからは、まさに現場の皆さんにとって、いろいろご苦労されいてるところではないかなと思うんですけれども、最初の整備というのは、環境省がルートを決定し、環境省の補助を受けて、主に各県もしくは各県からさらに市町村の方にお金が回る場合もあるというふう聞いてますけれども、管理を委託したり、整備というのは自治体の方で主にやっていただいています。再整備は、国立公園の中だと環境省が直轄で行ったり、各県は交付金を利用して整備をしているということです。実は維持管理は、先ほど言ったように自然公園としてきちっとした設備を整備する場所と、歩道を整備していく場所と、実際には普通に生活に使っていたり、一般の国道であったり、そういったものも歩く場所として位置付けて、安全に車と分離できる場所は標識だけを整備します。標識区間というのと歩道区間というふうに分かれます。歩道区間の方はきちっと整備するので維持管理も重要で、その自然公園や、公園内の自然を守る、管理する立場のセクションが大きな役割を果たすことになります。今申し上げた標識区間と歩道区間の割合というのは、やはり都道府県ごとにそれぞれ異なり、例えば長崎県はかなりの割合です。鹿児島県もですけど、標識だけを整備するというので、歩道そのものの整備は進んでなかったりします。たぶん鹿児島とか長崎というのは国立公園も結構多いので、それは既存のものがあるので、さらなる整備が必要ないということもあるのかもしれません。このよ

うな違いがそれぞれあるということです。

国立公園の中では、こういった様々な、きちっとした木道みたいなものが整備されたり、1つには別の予算なんかも使いながら、休憩施設みたいなものが整備されていくということになります。今日、最初の表彰式で、安藤財団さんのおかげで南アルプスの一部の標識が統一されたという話がありましたが、やはり九州でも統一していないのが問題だ、と。これは今、自分たちがどこを歩いているのかって、やはりアイデンティティがなくなるわけですね。これは現場レベルでも、こういった議論というのはなされてきているということです。全く統一性がないというのは、分かると思いますね。維持管理の現状について、市町村レベルでアンケートを採っている中で、それぞれの県ごとに違うんですけども、維持管理の課題としては、施設の老朽化が進んでいるとか、財源がない、予算上難しい、補修できない、といった悩みが多いというのが現状です。実際、現場を歩いていらっしゃる方はよく分かるとおり、洗掘されて、歩道がむき出しになって、ほとんど歩けないような状況になっていたり、せっかく整備した木道が崩れているという状況があらこちらに見られるというのが現状で、多くのところで見られると思います。歩道や標識そのものも、老朽化していたり倒壊しているというような問題があるというのも我々は認識していて、これは何とかしていきたいというふうに思っています。やはり、いろいろな記録を見ると、加藤さんなどからの意見で、国なり何なりがそんなに予算が取れないんだったら、やはり共同型管理をやっていくべきだ、と。九州管内でもいろいろ協議会をやったり、話し合いをしたり、研究を共有することで、例えばエコツアーを実施して、その料金を取ったらどうかというところもあるそうです。

それから清掃協力金。これは、国の関係する団体は、自然公園財団というところが駐車場を管理して、直轄で造ったところに委託を受けて、そこに協力金をもらって、管理をしていていたりする場所もあります。また、任意団体やNPO法人であったり、地域の地域団体に様々な協力をしていただいて、一部は市が負担する、そういったような地域もあるそうです。もう1つの問題は、せっかく施設である程度管理ができたとしても、使ってもらわなきゃいけない、ということがあると思います。これも、どんな情報発信をしているかということですけども、ウェブサイトとかブログなど設置しているものも、数は実はそんなに多くないんですね。さらに、情報整備や情報発信を全然行っていないという県もたくさんある、と。これが一番多いぐらい。市町村レベルでは、こういうのが現状だということです。ですから、やはり歩いてもらわないと、その必要性も認められないし、その課題も見付かりません。やはり予算の裏付けが少ないというのが多くの自治体、地域の方々の悩みだと思います。でも大本は、利用者が少ないからその認識が低くて、経済効果が薄いから予算も付けられないと、こういう悪循環に陥っているのがあったりします。このことは、各県の担当が不熱心だったり、担当者がすごく少なかったりして差が出ます。ですから、一生懸命やる方が来ているところでは、一生懸命整備とか管理が進むけれども、市町村レベルになると、どこが担当かすら分からない、

もしくは自然歩道がどこだか分からないということもあります。

また地図も、その都道府県が分かると統一的ではなくなっていたり、情報もないといったところがあります。やはり、利用者側の視点に立った、利用に関する情報が不足している。そういう意味では、まさにこういうロングトレイル協会みたいな皆さま方の力というのは、こういうところで必要となってくるんじゃないかな、と思います。それから、通行止めとか様々な情報を、全体情報として一括するところもないということ。これは今、各地でもできる限り、こういうような問題を解消するプラットフォームを作ろうというのが進んできています。協同型管理体制を構築するわけですが、コーディネーターを誰がやるんだっていう問題もあります。それから、利用者の視点に立った情報収集や提供、その費用確保、信頼性の保証といった課題はあるんですけども、こういったことをやろうというのは、現在それぞれの地域で話し合われつつあるというのが、私の理解であります。地域における位置付け、魅力というのをきちっと発信していく。地域の関心をいかに高めていくか。もしくは、地域の人々が誇りとして考えられる自然歩道にしていかなければいけない、と。これが我々にとっての課題だというふうに思っております。

最後、簡単になってしまいますけども、みちのく潮風トレイルについてお話をしたいと思います。大本は東日本大震災で被災された地域の方々の復興を支援すべく、グリーン復興という名の下に、審議会で7つぐらいのプロジェクトを立ち上げました。こんなことをやっていこう、新しい大きな国立公園をつくろう、という動きがあるんです。みちのく潮風トレイルというロングトレイルを造って、地域の人たちの元気を取り戻したい、というのが環境省および中央環境審議会から出たアイデアです。非常に長い700kmを想定した、復興のシンボルとなる長距離の自然歩道を造っていこうということで、北は青森県の八戸市から、南は福島県の相馬市までということで、今、順次計画を作って整備を進めているという状況であります。

ごく簡単なイメージ図に直せば、まず景色、絶景。ここは陸中海岸国立公園がもともとあったんですが、今、三陸復興国立公園ということで再編していますけれども、絶景に出会う場所として楽しんでもらう。また、祭りだとかそういった人々の暮らしも感じてもらおう、地域の文化を知ってもらおう、ということですね。さらに、人と出会う。そこで様々な人と人との触れ合いをすることで、都会の人たちにも地域のことを知ってもらえる。逆に都会の人たちも地域の人たちに元気付けられるだろう、と。こういった出会いの場にしたいというのが1つ。さらには、やはり食べるというのは人間が自然と触れ合う基本ですから、こういったものを促進することで、地域経済の活性化にも役立つのではないかと。さらには、大震災という自然の脅威を学ぶ場として、我々の経験というのを将来に受け継いでいきたい。こういった形で自然保護がしたいということで、地域で意見交換会や、いろいろな形でワークショップを開きながら、環境省の職員も入って、議論をして計画を作りました。

さらに、早稲田大学の学生で、後藤さんという方に実際に歩いてもらって、それを計画に反映した。それで、彼自身の意見や考えみたいなものを計画の中に採り入れて、具体的な計画にまとめ上げたというのが、このみちのく潮風トレイルのつくり方だったんですね。細かい部分では、集落とどう組み合わせるかが問題でした。どうしても海岸部分というのは道が通れなかったりするんで、そこは住民との触れ合いというところでテーマを設定するというのが、トレイルづくりでは非常に重要なポイントだと思います。こういったものを活用しながら、こんな考え方で今、整備を進めているところです。

さらには、運営をどうしていくかというのが大きな問題だと思います。また、情報発信をきちっとしていくこと。これは最初の段階から地域の方々と一緒になってつくと、そこに参画する人たちの意識も上がっていく。たぶんそういう考え方で現在、進めているというふうに理解しております。例えば、踏破した人の認定制度を作ろうとか、ですね。実際、東北だけで宣伝や普及活動をしていても仕方がないので、六本木でイベントを行おうということも。東北復興というのは、政府としても非常に重要な課題ですので、こんな取り組みもしています。さらには、ミニフォーラムをしたり、旅行業界なんかとの取り組みも進めているということで、今いくつかの区間がすでに開通して整備が進んでいます。残る区間をどう整備し、さらにきちっと造っていくか、標識に統一性を持たせるとか、普及・啓発活動とか、そういった課題が次々と出てくると思います。

実は、時間があれば、私自身も沖縄に行ったときに、加藤さんと一緒に西表島を紹介しようと思ったんですけど、ちょっと今のロングトレイルとは違う発想で、ややプロっぽい人たちが歩くような場所ではあります。私自身も学生のときに1人でテント担いで行き、そのときは楽勝だったんですけど、調査で一緒に同行したときは、かなり辛かった記憶があるんです。ただ、道が崩れているというのは問題になりました。翌日は石垣島で、加藤さんが募集したトレイルを歩くツアーと一緒に参加して、農地や牧場といったところを歩くということを試しにやってみました。加藤さんやアクティブ・レンジャーたちといろいろ意見交換をして、私も報告会という、ちょっとしたミニフォーラムをやらせてもらって。私もこのとき、いろいろなことを加藤さんから学びました。

最後のまとめとして、加藤さんの遺稿となった最後の本に書いてあったことを紹介しますけれども、「やっとなら日本の自然保護文化の充実、それがロングトレイルというもので達成されるんだ」そういったことを加藤さんは信じていました。私は、そのメッセージを環境省全体として受け止めて、今まで申し上げたいいろいろな課題をこれから乗り越えていきたいと思っております。以上で私の発表を終わらせてもらいます。ご清聴ありがとうございました。

■講演 (2)「ダイヤモンドトレールを軸にした地域の連携と魅力発信」

赤井 俊夫 (大阪府南河内農と緑の総合事務所地域政策室長)



皆さん、こんにちは。大阪府の南河内農と緑の総合事務所の赤井と申します。私の身分をちょっと言いますと、先ほどの奥田様も、農学の林学科ご卒業ということでございましたけども、私も同じ林学科を卒業いたしました。地方公務員なんですけども、地方公務員にも技術職というのがございます。林学職ということで、日々お仕事はぼちぼちやらせていただいています。

まず大阪府ですけども、兵庫、京都、奈良、和歌山と隣接しております。西側は大阪湾ということで、海にも面しているというところがございます。面積が全国で下から2番目の19万haのところ、これは全国で3位ですけども、狭いところに880万人の人が住んでおります。自治体の数ですけども、43市町村ということで、ご覧のとおり1村あります。千早赤阪村という村が、実は大阪府にございます。3年前に過疎の地域指定を受けて、人口1,000人を切るような村でございます。この大阪府ですけども、非常にわずかですが森林がございます。府県境沿いの山系に位置しております、北摂、生駒、金剛、和泉葛城。北摂には明治の森箕面国定公園、生駒、金剛、和泉葛城には、金剛生駒紀泉国定公園というものが指定されております。今日ご紹介するダイヤモンドトレールは、この金剛山系に位置しております。

ダイヤモンドトレールとは金剛山系の長距離自然歩道で、正式名称は金剛葛城自然歩道です。何で「ダイヤモンド」かというところなんですけども、一応、主要な一番高い山が金剛山ということでございます。それから連想されます金剛石がダイヤモンドの和名ということで、名付けてダイヤモンドトレール。こちらはトレールと伸ばします。トレイルじゃなくトレールになっています。区間は奈良県の香芝市から大阪府の和泉市で、全長45km、開設は昭和46年12月です。整備はその前後ですね。大阪府と奈良県で整備をいたしまして、現在の管理も大阪府の中でやっております。年間利用者は約100万人ということで、そのくらいの人数は訪れております。

平成27年9月30日には、「新日本歩く道紀行」の森の道100選に認定していただいております。これはアクセスマップですけども、赤の地区がダイトレ、ダイヤモンドトレールです。近鉄とか南海、JRから非常に便利のいいところに位置しております。2ヶ所、ロープウェイもございます。こちらに金剛山ロープウェイがあるんですけども、昨年、開通50周年を迎えた非常に歴史のあるロープウェイです。ということで、大阪の中心部から30km程度ということで、時間的に90分あれば、ちょっと景色が変わるというようなところでございます。

ダイヤモンドトレール沿いには、大阪府、奈良県で整備いたしましたいろいろな施設がございます。トイレも整備しております。トレールに関する市町村はご覧のとおり

です。左側の白地が大阪府、右の黄色地が奈良県、緑が和歌山県ということです。こういった市町村との付き合いというのは、あんまりなかったのが事実です。大阪府ですと、各市町村に草刈りとか清掃の寄託をお願いしているぐらいで、市町村間のお付き合いも特になかったという状況でした。ということで、せっかくダイトレで繋がっているんで、何でもいいのでやりませんか、というようなことを、私どもから声掛けさせていただきました。2011年が国際森林年でございましたけども、これを契機にちょっと連携して、皆で何かやりませんかということで立ち上げたのが、ダイヤモンドトレール活性化実行委員会です。構成は大阪、奈良、和歌山の沿線市町村の首長さん、市町村長さんが委員になっております。

こちらはキックオフイベントということで、平成23年、第1回のダイヤモンドトレール・サミットということで開催したときの写真です。登壇されている真ん中の方が会長の、先ほど言いました千早赤阪村の村長さんです。左側が奈良県側ですね。右側が大阪府ということで、右から2人目、白い服を着ている方が当時の橋下前知事です。あんまりイベントに出る方ではなかったんですけども、広域連携ということもありまして、初めて山登りに来ていただきました。知事も非常に感動して、就任3年目でございますけれども、「初めて来て、こんなええところがあるとは初めて知った」というようなことも言っていただきました。

活性化実行委員会立ち上げ後の取り組みをご紹介します。まず、両者の利便性向上ということで、平成23年に大阪府の方で、4棟のトイレの整備をさせていただきました。奈良県の方では25年ということで、かなり利便性が向上しております。それと、ダイトレのマップを平成17年から作っております。まず、沿線市町村の紹介、それからQRコードを載せて、情報を取りやすくさせていただいております。図面の地図の面ですけども、奈良、和歌山県と連携しようということもありますので、奈良、和歌山県エリアの表示を拡大いたしまして、アクセスとか観光スポットの情報を充実しております。それともう1つ、位置情報を表示しております。この地図だけでしか使えない、縦横の数字とアルファベットをNコードといいます。これはどこでも使えまして、現場でGPS付きの携帯電話を持って行きますと、自分が今いる位置がNコードで分かるというようなものです。遭難したときに、そのコードが分かれば救助に役立つというような使い方もできます。

その次、利便性の向上ということで、ボランティアさんとの連携をしております。安全・安心な環境づくりを担っていただくボランティア団体さん、個人を、サポーターということで登録させていただいております。今は7団体3個人ということで、任期は3年にしております。左は木材業界からベンチの材料をいただきました。バラバラの状態です。それをサポーターさんに組み立てていただいて、なおかつ現場に据え付けさせていただきました。右側は、灌木とかですね、生い茂っているところの改善ということで、伐採作業をしていただいております。

ここでダイトレの見所をご紹介します。北から順番にいきます。左上、奈良県香芝市の屯鶴峰^{とんづるぼう}というところ。凝灰岩の白い岩肌がむき出しになっている、ちょっと変わった景観です。鶴がたくさん舞い降りているように見えたところから、屯鶴峰という名前が付いております。右側の下、これが二上山という山です。石器に使われましたサヌカイトという石が産出されるというところ。写真は奈良県側から撮った写真です。奈良県側から見ますと西側に位置しますので、右側に雄岳、左側に雌岳が見えます。大阪側から見ますと東側に見えますので、右側が雌岳、左側に雄岳という見え方になります。大阪側から見ますと東側でありますので、日が昇る山と言われております。奈良県側に来ますと日が沈む山と変わり、日が沈む大阪が安住の地ということで、古墳が多いというような説もございます。

次は大和葛城山です。5月の上・中旬になりますと、自生の「一目百万本」と言われるツツジが咲き誇ります。それと右下は最高峰ですけれども、金剛山。冬になりますと、唯一大阪でこういった雪化粧が見られる山となっております。次が秋の岩湧山ということで、こちらはススキの茅場でございます。春に山焼きをしまして、秋にはこういった非常にきれいな景観が見られる、と。この真ん中をダイトレが走っております。

最後、南の起点ということで、槇尾山というところ。こちらには施福寺という由緒あるお寺がございます。こういったダイトレの見所をご紹介します。

次は周辺の見所ということで、歴史とか文化の資源がたくさんございます。葛城修験道と書いてありますけれども、今日、非常にご高名な方がおられる前で説明するのは緊張するんですけども、神社仏閣、資料館、博物館など、いろいろあります。葛城修験道というものは、7世紀末に、先ほど見ていただいたツツジのきれいな葛城山に、役行者さんがおられたということです。この方は法華経を唱えながら、和歌山の友ヶ島から大阪の亀の瀬というところまで修行をされて、二十八の地に法華経の二十八品を一品ずつ納めていったという伝説がございます。のちにこの二十八ヶ所に経塚というものが作られて、そこが修験の場になったということでございます。このダイトレ周辺には、たくさん経塚がございます。それから、役行者さんにまつわるいろいろなスポットが点在しております。神社仏閣につきましても、役行者さんにまつわるお話がたくさんございます。金剛山の山頂ですけども、葛木神社とか転法輪寺、これは役行者さんのお寺と聞いておりますけれども、などもありまして、毎年7月にれんげ祭りも開かれております。そのほか、ダイヤモンドトレール上、もしくはその周辺にいろいろな史跡であったり、国宝級のお寺がたくさんございます。それといろいろな博物館、資料館もあります。二上山博物館、市のホームページによりますと、全国初の石の博物館ということです。その下の相撲館「けはや座」というところなんですけれども、奈良県の葛城市が相撲発祥の地ということで、本物と同じ大きさの土俵がある資料館とか、ちょっと変わったものもございます。

こうしたいろいろな見所を皆さんに歩いていただきたい、見ていただきたいというこ

とで、ダイトレとそのアクセスルートを皆さんにご紹介するというようなことを行っております。アクセスルート上に千早城址という見所もありますよ、とか、下っていったら奈良県には藤岡家住宅という資料館があります、と。こういったルートを10ルートほどお示しさせていただいております。そのルートを実際に歩いていただくという、ワンデーハイキングのイベントなども行っております。このチラシは昨年12月のものですが、実際に歩いていただくというイベントでございました。当日は快晴でした。金剛山を目指して歩いていただきまして、山頂で転法輪寺の住職さんから修験道のお話を聞いたり、ゴールの藤岡家住宅で、俳人の藤岡玉骨という方のお話を聞いて、地元の柿、ミカンをお土産に持って帰っていただく、というイベントも行っております。

次に、いろいろな見所を、ゆっくり自分のスペースに合わせて巡っていただくということで、ダイトレ踏破イベントを行っております。パート1としましては、平成26年にダイヤモンドトレールの5山3峠巡り。ひたすら45km歩いてください、というイベントです。踏破された方には認定証と缶バッジをお渡ししますが、缶バッジは職員の手作りです。このダイトレの実行委員会では、事業の予算はゼロです。普段の事務費の範囲内でできることをやっております。こちらのイベントは新聞に採り上げていただきまして、その効果もあって最終的に455人の認定をさせていただいたということです。

その次、パート2ということで、今度はダイヤモンドトレール上と、先ほどご覧いただいたアクセスルート上の神社仏閣を巡っていただくというイベントにしつらえを変えて行いました。5つのエリアに分けまして、ダイトレ上のポイントとアクセス上のポイントをそれぞれ巡っていただくという内容です。認定証のデザインもちょっと変えました。各市町村のキャラを散りばめて、お祝いするような認定証にしております。最終的には100には届かない、92人という結果でございました。

この2つのイベントに参加いただいたのが、どんな方々だったかということをご紹介します。お住まいは大阪府が7割に近かったです。後は周辺の市町村。少数ですが、東京とか山形からの方もおられました。男女構成比は、男性の方が多く、7対3という割合です。年齢の構成比は、ちょっと若い方があまりおられなかったということです。どこから高齢と言っているのか分からないですが、50歳代、60歳代の方が多いというような状況です。時間がかかるイベントですので、比較的時間に余裕のある方々の参加が多かったということです。

認定の申請をしていただくときに、自由にコメントを書きいただく欄を入れました。1発目の5山3峠巡りにつきましては、これはひたすら45km歩くイベントでしたので、達成感とか目標ができて良かったとか、そういうお声が多かったということです。その次の自然・歴史巡りは、数は全体的に少ないんですけども、5山3峠とは違うコメントをいただいております。今まで知らなかったところに行けたとか、聞いていたけども行ったことなかったとか、そういうところに行けて楽しかった、と。それから、今回行け

なかったところにまた行ってみたい、というようなコメントをいただいております。

このイベントから、複数回、同じ方が申請されるということが出てまいりました。ということで、リピーターを増やすという観点でいきますと、巡りポイントの数の充実とか、地域行事でありますとか、イベントや物を買うところとか、食べるところを増やしたら、楽しみが増えるんじゃないか、と。それとテーマですね。先ほどから皆さんおっしゃっていますけども、自然、歴史、体験、健康、食。こういうテーマ設定が必要ではないかということで、今やっています。

パート3になるんですけども、自然・地域巡りということで、だいぶポイントを増やしました。例えば、左の写真は日帰りの温泉施設です。山に行ってきて、ひと風呂浴びて帰ってくるのはどうかな、というようなところですね。それから、道の駅で地元の物産を買っていただきたいなというところで、こういったところのポイントを設定しております。今のところ、マスコミの採り上げも少ないんですけども、これから広報をしっかり行って、皆さんに参加していただきたいな、と思っております。

話はもうこれで最後ですけども、大切なのは広報ですね。ホームページ等々、情報発信ツールはいろいろあります。やはり効果が一番出るのは新聞です。記者クラブに情報を入れて書いていただければ、もうすぐに効果が出るということが実績としてあります。それと、意外と市町村の広報誌に載せますと、その途端に電話で問い合わせが入るということもあります。テレビとかホームページもいいんですけども、うちで今、実際に歩かれている方というのは、比較的年齢の高い方が多いので、やはり紙ですね。紙で見るとというのが、非常に効果があるようです。若い方はスマホとか、ホームページになるかと思えますけど。

今後についてですけども、2021年、平成33年、東京オリンピックの翌年にダイトレが50周年を迎えます。これを1つの区切りといたしまして、今後さらなる積極的な地域の活性化を進めたいと考えております。初めてダイトレのお話を聞かれた方も多いいと思いますけども、ぜひ来てくださいというのはおこがましいので、大阪のお好み焼きとかタコ焼きを食べるついでに、ちょっとダイトレものぞいていただきたい、と。ちょっと朝9時ぐらいに出れば、夕方4時5時には、またネオンギラギラの街に戻ってこられます。それからビールを飲んでいただくというようなこともできますので、ぜひとも行程に入れていただきたいな、と思います。ご清聴ありがとうございました。

■講演 (3)「国内初開催！ ワールドトレイルズカンファレンスの報告」

高務 裕子（鳥取県中部総合事務所地域振興局ワールドトレイルズカンファレンス室長）



皆さま、こんにちは。職名も長ければ名前も長い。^{たかつかさ}高務という、ちょっと変わった名前なんですけれども、鳥取県からこちらに参加させていただきました。鳥取県といえば、去年10月の地震に始まって、今年1月、2月に大雪で立ち往生ということで、かなりニュースになっておりまして、どれだけつらい街なんだろうかと、皆さまが思っておられるんじゃないかなと思います。けれども今日は、こういった取り組みをしているんだよということで、少しその記憶を皆さまに上書きしていただいて、鳥取県は大山と酒だけじゃないんだよということも、皆さまにご理解いただいております。後30分ほどなんですけれども、お時間をちょうだいしたいと思っております。

まず、このワールドトレイルズカンファレンスの報告ということなんですけれども、一体これは何か、というところからご説明をさせていただきたいと思っております。

このワールドトレイルズカンファレンス、ちょっと長いので、これからWTCという言葉で省略させていただきます。このWTCというのは、歩く旅と自然保護の価値を共有して、トレイルをもっとうまく使っていこうよ、ということをお話するための国際会議でございます。私は行政職員でございます、この鳥取大会、ワールドトレイルズカンファレンス、WTC鳥取大会の事務局を担当しておりました。この実行委員会が民間団体の方、観光団体の方、それから行政が一体となったということで、私が今回は代表してご報告に伺わせていただいております。ですが、そもそもこのWTCというのは、別に行政の会議ではございません。トレイルの関係者の方々が世界中から集まってネットワークを作っていこうよ、という趣旨の会議でございます。

発端は韓国の済州オルレという団体の提唱で始まりました。韓国の済州オルレは、済州島で2010年ごろから立ち上がっています。昔は新婚旅行のメッカだったそうなんですけれども、一気に観光客が減っていった中で、とある人が済州島を一周するようなコースを企画しました。二十数コースに分かれ、長いのが10kmとかいろいろなコースがあるんですけれども、そういったコースを一つ一つ地元の人と協力をしながら造り上げていかれたそうです。自然を大切にしながら、必ず地域、里を通すということ、地域と触れ合うコースを設定するということを念頭に置かれて造られたというふうに伺っております。済州オルレがそういったコースを造って、韓国の女性たちの人気を呼び、かなりの観光客が今、済州島に押し寄せています。観光客が一度歩いてみて、「あっ、これはいいや」と、自分たちが何かしたいということで、この済州オルレのコースのそばに、自分たちで民宿を作ったり、カフェを作ったりして、それが地域おこしになり、定住も増えているということでした。行政の立場からしたら、とてもおもしろい事例か

な、というふうに思います。

この韓国・済州オルレの企画者がなかなかやり手でして、自分たちの中でもそうやって作り上げていって売り込んでいった、と。多分、それを世界に売り込むにはどうしたらいいか、と思われたんじゃないかと思うんです。情報共有して、さらに自分たちのコースを磨き上げたいという思いもあったんだと思います。そして、2010年から世界のいろいろなトレイルの関係者に声をかけて、年に1回、済州島で会議を開催されておりました。これがWTCです。2010年から毎年1回、ずっと韓国・済州島で開催されておりました。5回目が終わったところで、韓国・済州島だけじゃなくて、いろいろなところで行ってはどうかという話になりまして、早速手を上げさせていただいたのが、この日本の鳥取県だったということです。

別に鳥取県職員が参加していたわけではなく、この後説明させていただきますけれども、鳥取県のウォーキング大会を熱心にされておられますNPO法人未来さんが、このWTCの第2回大会からずっと参加しておられまして、その関係で誘致をしてくださったということです。主催は非営利法人ワールドトレイルズネットワークという、スイスのジュネーブに組織があるんですけども、人がいるわけではなくて、世界の緩やかなネットワークの事務局がこのジュネーブにある、と。南アフリカの方が会長を務めておられます。そういった団体が主催者とその開催地で相談しながら、国際会議でどんなことをしていくかを決めていく、そんな世界中のトレイル関係者が集まる会議ということでご理解いただければいいかな、と思います。

ここで、第6回鳥取大会を開催したのはいいんですけど、ここにおられる方が鳥取県ってどこにあるかご存じないんじゃないかなという、若干の不安がありまして、資料を付けさせていただいております。よく話題になるのが、山陰っていうのは鳥取県と島根県なんですけども、どっちがどっちかよく分からないということをよく聞きます。ひと言で言えば、鳥取県は島根県の右です。島根県の位置が分からないと分からないんじゃないか、という突っ込みは、ちょっと心の中に置いておいていただいて、こういう場所にある、と。空港が2つありまして、鳥取コナン空港、米子鬼太郎空港ということで、漫画家、有名な方、出身者がおられますので、その名前が付いております。主な特色として、まず日本遺産が2つあります。三徳山と三朝温泉。ここには投入堂という国宝がございまして、先ほども大阪の赤井さんから役行者の話がありましたけども、ここでも役行者が活躍されておられまして、役行者が法力でこの崖に投げ込んで造られたと言われております。というか、建築方法が全然分からないんです。崖の中にとにかく投げ入れてあって、ここにたどり着くまでが大変危険な道なので、「日本一危ない国宝」というふうに呼ばれております。そこと三朝温泉という温泉がセットになった日本遺産。それからもう1つ、「おおやま」ではなくて「だいせん」と言います。再来年に開山1300年を迎えます。この2つの日本遺産は、自然に満ちあふれたものでございます。併せまして、山陰海岸ユネスコ世界ジオパークということで、鳥取県と兵庫県と京都府をずっ

と繋ぐ海岸線が、日本海形成のときの地形を表したもので、非常に貴重なものと言われています。そこを利用したジオパークトレイルとか、シーカヤックとか、そういったものやっておりますけれども、その海岸一円 140km が世界ジオパークということで、その一画には鳥取砂丘もございます。

鳥取県はとにかく日本一小さい県でして、人口が非常に少なく 57 万人。長野県が 210 万人ぐらいですか。さっき大阪府さんが 880 万人と言っておられましたので、どれぐらい少ないかというのが分かっていたかだと思います。とにかく小さい県なので、知恵で勝負をしようということで、いろいろ頑張っております。特に話題になったのが、日本でスターバックスがなかった唯一の県に、最後の店舗ができるということで、それもなぜか NHK のニュースになったんですけれども。鳥取県知事が「スタバはないけどスナバはある」とか、そういった PR を散々しまして、これでお金は使っていないけど自称 34 億円の経済効果があった、ということです。小さい県なので、工夫して頑張ろうという気風はあるのかな、というふうに思っています。

海外ともかなり繋がってしまっていて、香港と週 2 便、韓国ソウルと週 3 回の定期便が飛んでいます。それに併せて定期貨客船、フェリーなんですけど、荷物と人が積めるものが、鳥取と韓国やロシアのウラジオストクを週 1 回結んでいるということで、外に目を向けて頑張っている、小さな県でございます。

今、説明しているのは、なぜ WTC を誘致したかの背景ですけれども、鳥取県は、さっき申し上げましたように、海外に目を向けており、小さいけどちょっと工夫をして頑張ろうという土壌なんです。さらに田舎なもので、公共交通機関がございません。厚生労働省が以前に調査をした結果なんですけども、1 日に何歩歩くかという全国調査で、鳥取県は男性が最下位、女性は 45 位という素晴らしい結果に終わりました。ちなみに長野県さんは全国 19 位、11 位で、素晴らしい結果であります。これではいけないということで、何とか歩きましょう、と。歩くのは人間の基本だよというのは確かなことでして、一気に最近の平成 22 年の調査なんですけども、ここ数年、鳥取県ではどんどんみんなであらうよ、という熱が加速しております。そんな背景の下、この「SUN-IN 未来ウォーク」というウォーキング大会を、NPO 法人未来さんが開催されております。

日本全国で、日本マーチングリーグという大きなウォーキング大会が開催されています。ここ鳥取県では、6 月の 3~4 日に「SUN-IN 未来ウォーク」というイベントを、NPO 法人未来さんが開催されています。2 日間で約 3,000 人が参加されますが、半分以上は県外の方が来られています。この大会は民間団体主催の、非常に珍しい大会です。全国的には、大体行政が実行委員会にかんできて、かなりお金を出して行っているのが実態なんですけど、鳥取県の場合は、NPO 法人未来さんが頑張っておられる。頑張っておられる、これまで 17 回も開いておられるという、非常に大きな土台があります。この NPO 法人未来さんが、この WTC を誘致してこられた。地域の活性化に繋がるいい機会だということで、誘致してきてくださいました。

ちなみにここ長野県も、飯田やまびこマーチさんが4月に毎年開催されておられると思います。第31回を迎えられるということで、日本のマーチングリーグの中でも2番目に歴史が長い、素晴らしい大会というふうに向っています。その辺が、さっきの長野県の歩く歩数にも関係してきているのかもしれませんが、トレイルが多いということも関係しているのかもしれませんが。WTCは大きなイベントですので、NPO 法人未来さんを中心としながら、県や市町村や観光団体が実行委員会を作りまして、事務局を鳥取県とNPO 法人未来さんが共同で持って、実行委員会として準備をしました。後は海外のメンバーと相談をしながら、去年の10月14日から17日まで4日間開催いたしました。「歩いて癒される」というテーマで、目標人数は4,000人だったんですけど、当日も含めて非常に多くの方にご参加いただきました。内容はいろいろございまして、講演会、各国際会議、それから企画展示、後は並行してウォーキング大会をたくさん開催しております。それからエクスカッションも行いました。

国際会議では19ヶ国58団体ということで、これだけ多くの方が参加してくださっています。これは、南極を除く全大陸が参加してくださったということで、いろいろなトレイルの団体、関係者をご参加いただいた、大きな大会になりました。

実行委員会で準備をするときに、5つの目標を我々の中で掲げておりました。まずは、国際会議とウォーキング大会と両方行うんですけども、ウォーキング大会のコースで、終わった後に個人で回りたくくなるようなコースにしていこうよ、と。それから、旅行商品として使える仕組みをきちんと作ろうよ、と。後は地域の魅力と歩くことのコラボをきちっとしていこうよ、と。さらに、大会を契機として鳥取県の魅力を発信していこう、と。これを共通の目標として準備を進めていました。

4日間の中で、最初は総会とかがございまして、国際会議、ウォーキング大会、エクスカッションがあり、後は併催ということになっています。オープニング・イベント、記念講演には三浦雄一郎さんに来ていただいて、歩くことについて語っていただきました。後は世界のトレイル最前線ということで、いろいろな国の方からお話をいただきました。また、分科会ⅠからⅡ、それからⅢからⅣということで、いろいろなテーマを持って分科会を開催しました。日曜日の午前中、日にちが空いておりますが、これは並行して行っていますウォーキング大会に、国際会議の参加者も歩いていただいた、と。もちろん一般の方にもオープンなんですけども、会議を聞きたい方もおられれば、こういったイベントに参加されたい方もおられるので、並行して開催しています。全部で9コース、いろいろな市町で実施をしています。併せて海外限定ツアーコースという、ちょっとトライアルなものも1つ行ってみたいと思っています。

主な分担といたしましては、国際会議の準備は県が中心になってしておりました。このウォーキング大会の準備は、各市町村とNPO 法人未来さんが中心になってやっていたいていました。最終日には、この関係市町だけではなくて、ちょっと距離があるんですけど、大山や山陰海岸ジオパークに、海外の人にも参加してもらい、ツアーで見て

いただく、歩いていただくということも行っております。併催として、B級グルメバトルというイベントも開催しています。後は企画展示です。また、世界のトレイル紹介ということで、10トレイルの発表をしていただきました。最初は4トレイルだけの予定だったんですけど、できるだけたくさんの方が話したいということがありましたので、順番にいろいろなトレイルの方にお話をさせていただきました。スペインの有名な巡礼路のサンティアゴ・デ・コンポステーラからも来ていただいています。プレゼン資料も、本人たちの希望によって、全部ホームページにアップしておりますので、興味がおありになるものがあれば、ご覧いただければと思います。

分科会はいった形で、Iはまずウォーキングと健康についてパネル・ディスカッションを開催しました。それから引き続き、今回こちらのセンター長でいらっしゃる中村先生に、日本のトレイルの状況についてお話をいただきました。海外のトレイルの関係者は、とにかく自分のところに人が来て歩いてほしいということで、日本のトレイルがどんな状況にあって、日本人がどんなふうに関心を持っていて興味を持っているかということで、このお話に非常に興味を持って聞いておられました。

分科会Ⅲとしては、トレイルと文化と自然ということで、地域とどんなふうに関わり合っていくかというテーマで、ディスカッションさせていただきました。最後には、国際マーケティングということで、どうやって売り込みをかけていくかという議論をしていただきました。最後はクロージングということで、鳥取大会宣言を採択。次回のWTCを、2年に1回に変更になったんですけども、今度はスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラに決定いたしました。

これがいろいろなコースを並行して行いましたウォーキング大会です。海もあれば山もあり、コナンの町もありと、いろいろな種類を取りそろえています。ここに「らくらくわんぱくウォーク」と書いてございますが、お子さま向けの歩育と、それから障害者の方も車いすとかでご参加いただけるようなコースを一つ設定しております。

最後に鳥取大会宣言というものを採択したんですけども、とにかくトレイルに癒しがある、ということを共通認識として持って、さらに友好トレイルを大きくしていこう、と。これはトレイル団体同士の、都市同士の友好提携のようなものです。一緒に何かしましょうという協定を結んで、相互にPRをする。どれだけ何をするかは、各団体に任されています。ですから、お金をかけずにPRをしていく1つの方法ではないかな、というふうに思っています。そういった友好トレイルを進めていこう、と。

後は、このトレイルの活動をずっと続けていくためには、若者をリーダーに養成していかなければならない、と。結構、年齢層が高い人が多い傾向にあるので、若者を養成していくための取り組みをこれから進めていこう、という話で一致しました。併せて、鳥取県にあります山陰海岸ジオパークトレイルと、ギリシャのキティラ・ハイキング・プロジェクトという、キティラ島というギリシャにある島のトレイルが友好提携を交わして、お互いの紹介の看板を交わしたり、お互いのトレイルまで後何kmという、こう

いう標識を交わしたりして、それぞれPRをしていこうという話をしております。

今回の大会の総括なんですけれども、いろいろな効果があったかな、と思っています。まず1つが、基本的には鳥取県は歩かないから皆で歩こう、県民の健康づくりを頑張ろう、というところからスタートしております。基本的には健康づくりのイメージで、近所を自由に歩いていこう、ということからスタートしていますけれども、例えばそれが、歩くことで観光振興とか地域づくりに繋がっていくんだろかな、という意識を1つ持つことができました。鳥取県ではDMOが去年立ち上がっておりまして、この大会はDMOの1つのトライアルでもありました。ですので、このウォーキング・イベントに、中国、韓国、台湾から観光客を連れてこようというトライアルも併せて行っています。そういった意識を1つ、地域の関係者が持つことができたかな、というふうに思っています。

後は、世界への足掛かりということで、先ほどのようなネットワーク、海外のいろいろな関係者とのネットワークを築くことができたというのは、非常に大きな財産だったかな、というふうに思っています。こういったものを今後は活かして、ウォーキング・コースをもうちょっと定番の旅行商品にできないかな、と思っています。ウォーキング・イベントに旅行商品をぶつけるのは、なかなか旅行商品側の柔軟性が求められていまして、開始時間を遅らせてほしいとか、自分のツアー動線の時間に合わせてほしい、という意見などが結構ありますので、どれくらい対応できるかというのが1つの大きなポイントになってきます。

また、一般参加者から自分のツアーにはこんなプレミアムがほしいとか、そういったことも言っておられますので、そういったものにどういうふうに対応できるかということも、1つ大きな検討課題かな、と思っています。後は鳥取県のジオパークトレイルでありますけど、40~50kmで、今はまだ開発中でございます。大山の方の歩道を活かしたロングトレイルを作ろうという動きもありまして、今、準備中でございます。そういったことも考えて、鳥取県を横断できるようなロングトレイルができないかと、関係者と相談をしているところです。それに併せまして、次世代を育成したいということで、海外の人たちも若者のリーダーを養成したいというお話がございましたので、今年の実業としまして、海外から若者を呼んで来て、トレイルの関係者と、鳥取県のトレイルコース案を歩きながら、鳥取県の青少年との交流を進めてみるとか、アウトドアの意識をつくっていくとか、そういったイベントを、せつかくのネットワークができましたので、できたらどうかな、というふうに考えています。

そういった大会ではございましたけれども、実は大会は10月14日から17日までだったんですが、そのわずか4日後に開催地で地震がございました。マグニチュード6.6ということで、実は瞬間的な揺れはかなり大きかったんですけど、幸いにして被害者、死者はゼロでした。住宅被害も結構大きかったんですけども、すごく大きな倒壊というのは割と少なかった。これが地震のいろいろな被害の写真なんですけど、実はこの真ん中が、まさにWTCを行った会場です。天井が崩れてしまいました。世界の人たち

は何で見付けるのか分からないですけども、地震があったその晩には、お礼の英語のメールが届き、インターネットで「我々が先週参加していた会場がこんなになった」とか拡散されてしまいました。ちょっとそれはつらいな、と思いましたが、そういった状況がございました。

地震もだいぶ落ち着きまして、今、風評被害対策に重点が移っております。我々も元気になるよ、ということで、NPO 法人未来さんを中心に、いろいろなウォーキング大会を仕掛けてるところです。

これは WTC のときの写真なんですけれども、「友好の杖」ということで、参加団体が皆リボンを結んで、我々に記念にくださったものをいただいたところです。これは歓迎レセプションで、日本酒の鏡開きを、日本風の文化をちょっと見てもらいたいののでやってみました。この酒樽 8 樽は全部、各酒蔵が無償で提供してくださいました。皆さんが一生懸命参加していただいた、と。これはウォーキング・コースの途中の写真なんですけど、ここにずっと鯉のぼりがぶら下がっているんですが、これも我々がお願いしたわけではなくて、地元の方々が、海外の方が来られるなら日本の文化をと、10 月ですけどこのコースのためだけに、ずっと展示してくださいました。地元の方がおもてなしも含めて、いろいろと力を注いでくださっています。

また、企画展示の中にスポーツ・クライミングがあるんですけど、東京オリンピックで正式種目になりまして、実は鳥取県にナショナル・チームのヘッドコーチがおられまして、その方に監修していただいて、こういった体験コースを設けていました。と申しますのが、国際会議はかなり専門的なものになってくるんですけども、できるだけ多くの地域の方にこの大会に参加していただきたかったということで、いろいろなイベントも仕掛けながら、会議の内容についても、分かりやすいものから徐々に専門的になるような仕掛けをプログラムで組んでいます。この辺も、ウォーキング大会の出発式のように、お寺の住職さんがほら貝で合図して出発されたりとか、いろいろな方々、地元の方が協力してくださった大会になったのではないかな、と思っています。

皆さま方のトレイルはもうかなりでき上がって、今どうやって売り込もうかと、どうやってもっと活用していこうかという段階であると思うんですけども、我々は今あるものを、これからもっと作り上げていこうという立場にいる、と思っています。たぶん皆さん思っておられるのは、たくさんの人に来て歩いていただきたい、それにはどうしたらいいかということで、どう PR をするかというのも 1 つですし、我々のようなこれから作っていこうというところは、今日かなり多くお話が出てましたけど、テーマをしっかりと持つというのはもちろんなんですけれども、どんな人たちに一番歩いてほしいか、というターゲットをしっかりと考えていくことが必要なんではないかな、というふうに思っています。

今回、海外では、例えば台湾とか中国とか韓国にも売り込みをかけました。シンガポールとか香港とかにもかけようという声も県の中ではあったんです。けれども今日、安

藤様のお話にもありましたように、ウォーキングをする土壌というのは、その場所が安全であること。たぶんそれは1つ大きなポイントですし、私が勝手に思うには、気温がある程度安定していること。あまり暑過ぎると、歩こうという気にはなかなかならないかもしれません。寒過ぎてもならないかもしれません。もう1つは、経済的にある程度安定していること。この辺のところをターゲットとして狙っていくというのはありなのかな、というふうに思っています。

例えばシンガポールとか、暑くてなかなか歩く土壌がないかもしれませんが、逆にシンガポールの人が北海道とかに来て、自分のところでは無茶ができないから、レンタカーでビュンビュン飛ばすのが、ツアーとして非常にはやっているという話も聞きます。ですので、今はないかもしれませんが、将来的には暑い国の人が、日本のこの信州とかに来て歩いてみようと、そういうブームが起こる可能性もあるかな、と思っています。ですから、我々は先を見て、どんな人たちに来てもらいたいのか、だからどんなことを仕掛けていくのかというのを、地域の方と一緒に考えていければいいな、と思っています。

このように、今回、地域の方にたくさん協力していただきました。私は行政の立場で、この大会が決まってから後2年で勝負ということで開催に当たったんですけども、今日は仕掛人であるNPO法人未来の岸田理事長がここにも来ておられます。交流会にも参加されると思いますので、もっと裏話とかですね、酔っ払った勢いで聞いていただければな、と思っております。今日はどうもありがとうございました。

■ご挨拶

佐伯 雅視(日本ロングトレイル協会副代表理事、北根室ランチウェイ会長、酪農家)

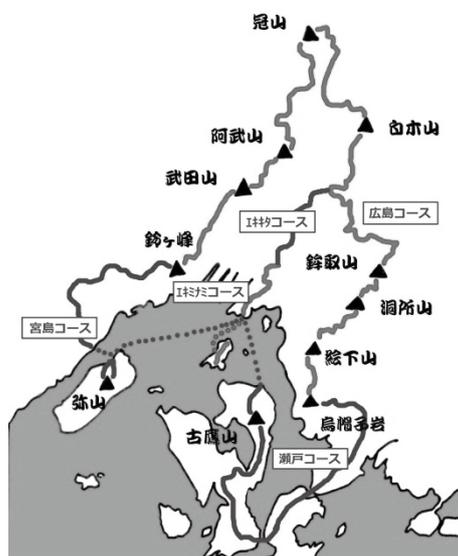
皆さん、長時間にわたってご苦労さまでした。本日は第4回ロングトレイルシンポジウムにたくさんの方にご参加いただき、誠にありがとうございました。また、壇上に上がられました講師の皆さま、ご苦労さまでした。日本ロングトレイル協会も、発足して間もないんですが、整備中のトレイルも含めて18のトレイルが参加しております。忘れ去られていた「歩く旅」という文化が見直される時代が、今そこまで来ているような気がします。二足歩行の人間が、脚を交互に動かすだけで前に進めるという、そういう意味で、歩くことが一番基本的な旅のスタイルだと僕は考えております。今後とも皆さま方とともに、ロングトレイル協会が一丸となって、歩く旅の普及と啓蒙に努めてまいりますので、ご指導のほど、よろしく願いいたします。簡単ですが、終わりの挨拶に代えさせていただきます。本日はどうもご苦労さまでした。



各地のトレイル紹介① 「広島湾岸トレイル」

田川 宏規（広島湾岸トレイル協議会会長）

広島湾岸の山を、川を、街を、海を、島を越えて、瀬戸内の絶景とともに歩く山旅！世界でも類を見ない都市隣接周回型の広島湾岸トレイルは、4市5町にまたがる陸路289.1km。市民が立ち上げ、開発し、市民が維持管理・運営するトレイルは、47山60峰14峠18河川3瀬戸4島を越えて歩き、その土地ならではの文化、歴史、人情を知る山旅でもある。トレイルは広島コース（129.5km）、宮島コース（41.3km）、瀬戸コース（77.1km）、エキミナミコース（22.5km）、エキキタコース（16.7km）の5コースで構成される。特筆すべきは、日本が誇る世界遺産の平和記念公園（原爆ドーム）はエキミナミコース、そして、宮島（厳島神社）は宮島コースにある。日本遺産の旧海軍の軍港の町・呉市と、旧海軍兵学校の町・江田島市は瀬戸コースにある。コース上のどこからでも波穏やかな広島湾と瀬戸の島々が望め、目指す山々が目の前に広がり、振り返れば歩いてきた山並みを見渡すことができる。その中核は、いつも平和都市&水の都の広島の街々……。それが広島湾岸トレイル（HWT）である。



HWT 広島湾岸トレイル®

広島湾岸トレイルコース概略図

2年3ヶ月の歳月に、82回の踏査&整備活動に延べ624人が参加して、平成28年7月に陸路289.1kmの広島湾岸トレイルは全通した。また、トレイルの維持管理を主目的とした広島湾岸トレイル協議会は24団体1,490人からなり、「市民の市民による市

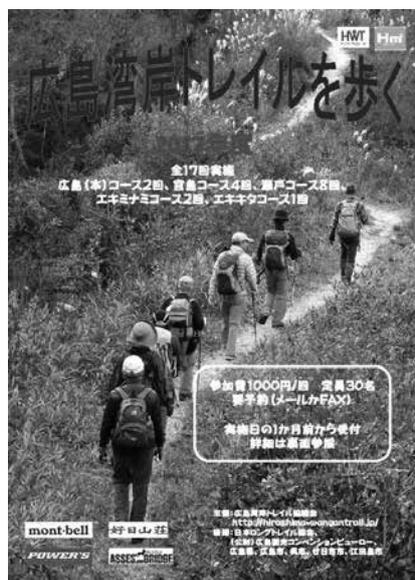
民のためのトレイル」を目指している。全コースを1年かけて巡回(2~3回/月)し、踏査&整備活動を実施することでトレイルの維持管理に努めている。平成28年7月に全通し、同月から始めた「巡回による踏査&整備活動」は、平成29年4月末現在20回にも及び、この活動に延べ249人が参加して、トレイルは良好に維持されている。また、この維持管理を持続可能にするために「1人100m草刈り運動」を多くの市民に呼びかけている。つまり、1人が1年に1回、鎌、鋏を持って山に入り、100mの草刈りをする事で、3,000人の市民が参加すれば300kmの維持管理が実現する。この市民運動は、時とともに賛同者の輪が広がりつつあることを実感している。この運動をさらに広げるため、「トレイルウォーク&クリーンアップ1000人大会(TC1000)」を実施する。コース上の山域に33会場を設定して、1,000人(会員+一般市民)が一斉に「歩いて健康に!」と「トレイル(故郷の里山)の大掃除」を掲げての「我が故郷の自然を守る」企画は、広島県が主催する「ひろしま さとやま未来博2017」に採択された事業でもある。その第1回の大会を平成29年6月4日(日)広島県「山の日」に開催する。次年度以降も開催することで、広島市、呉市、廿日市市、江田島市、府中町、海田町、北広島町、坂町、熊野町地域(4市5町)の山の一大イベントを目指す。



絵下山から宮島方面を望む

平成27年9月から、山岳団体および行政向けにトレイル体験会を開始した。エキキタ、ミナミコースを除く247.9kmに26回延べ592人が参加して、平成28年6月に終

了した。また、9月より一般市民対象の全29回で289.1km全踏破を目指したトレイル体験会を開始した。平成29年4月末現在13回開催し、延べ593人が参加して実施している。29回が終わる平成30年3月までは当初から広報期間としているが、その知名度は日々上昇しており、NHKをはじめTVやラジオ、新聞、経済誌、雑誌にたびたび採り上げられている。また、本年3月には、国内はもとより海外から3,000人のエントリーを目標とした「広島湾岸トレイル・ウルトラトレイルランニングレース国際大会〈平成31年5月開催〉」の新聞報道もあり、実現すれば世界的なトレイルになるのも夢ではない。さらに、行政と旅行社との提携も実現し、4月にはトレイルでのテストツアーが実施された。また、中部地域にある大学のワンダーフォーゲル部の春合宿にも使われるなど確実に幅広く利用され、将来性も無限大を予感させる動きが加速している。毎月1回の広島湾岸トレイル定例説明会や、地域住民と密接に繋がる公民館での安全登山推進講座などを開催して、地道な社会奉仕や広報活動で認知度アップと、協力者、支援者を増やす取り組みをしている。すべては「トレイル体験会、踏査&整備活動、登山講座や社会奉仕活動」などの成果かと思われる。CDmap（A4×146枚収録）をさらに充実させ、広島湾岸トレイルのブランド力を高めることで、オール広島を確立できれば、トレイルは地域の文化となる。また、それを目指したい。



鬼ヶ城山～鈴ヶ峯の山道

全長289.1kmのトレイルの維持管理のため、会員総数3,000人を目指す。その活動を支える活動資金確保のため、HWTトレイルのブランド力を高める。したがって、これまでどおりの①トレイル体験会、②安全登山推進講座、③HWT説明会、④踏査&整備活動をさらに充実させ、地域の理解と協力を得て、トレイルの全山域を舞台とした広島県主催の「ひろしま さとやま未来博2017」の採択事業である「TC1000」を平成29

年 6 月に開催する。また、国際的な知名度を誇るブランド「広島」、瀬戸の絶景を誇る広島湾の多島美、稀に見るハードな標高累積数と 289.1km の距離を有する都市隣接周回型のトレイルの特徴を活かした、国際的な規模の「広島湾岸トレイル・ウルトラトレイルランニングレース国際大会」を平成 31 年 5 月に開催し、定例化させることを次なる目標と課題にしたい。これらの実現により、盤石なトレイルが実現可能となる。この実現には、官民一体、地域連携のオール広島が必要であることは言うまでもなく、「広島にロングトレイルをつくろう」と始まった平成 25 年 7 月からの至上命題でもある。道が繋がることで地域が、人が繋がれば、それが我が HWT の目指す「ロングトレイル」である。



鬼ヶ城山～椿谷の竹林



鈴ヶ峯に向かう桜並木

各地のトレイル紹介② 山陰海岸ジオパークトレイル

山陰海岸ジオパークトレイルについて

山陰海岸ジオパークトレイルのコンセプトは「海岸わたり、街つなぐトレイル」。名前のとおり、海を外しては語れない。山陰海岸ジオパークは、鳥取県（岩美町・鳥取市）、兵庫県（豊岡市・香美町・新温泉町）、京都府（京丹後市）の東西 120km にわたる広大なエリアを有しており、日本海形成から現在に至る様々な地形や地質が存在し、それらを背景とした生き物や人々の暮らし、文化・歴史に触れることができる地域である。海と街、そして周囲の山々からの恵みから成り立っている地域、ここが私たちのフィールドだ。

山陰海岸ジオパークトレイルは、2015 年 7 月に官民からなる山陰海岸ジオパークトレイル協議会を設立し、鳥取県鳥取市および岩美町に全長 40.7km のコースを設けてスタートした。このコースでは 4 つの異なる表情を楽しむことができる。

1 つ目は海岸線で、多様な地質や地形が残っている海岸は、地質学的にも興味深いところだが、単純に綺麗な海岸である。荒々しい日本海の波により浸食された複雑な海岸線や洞門・地層は、自然にできた造形美を感じることができる。また、海の透明度も抜群で、海底も眼下に見ることができ、岩美町・浦富海岸の最高透明度 25m を誇る。歩いていて飽きることのない海岸美を楽しめるが、この海岸線でのお勧めスポットは、千貫松島、城原海岸、鴨ヶ磯だ。



2 つ目は鳥取砂丘。鳥取砂丘は東西 16km、南北 2.4km に広がっており、東から福部砂丘、浜坂砂丘、湖山砂丘、末恒砂丘の 4 つの砂丘で成り立っている。トレイルコースでは福部砂丘と浜坂砂丘エリアを歩く。砂丘の中でも特に名所となっている馬の背は、馬の背中を登っているように通り抜けることができる。砂丘のトレイルコースは秋と春は気持ちがいいが、夏は灼熱、冬は極寒のエリアと変貌する。これもコースのスパイスとなっている。



3つ目は山越え。砂丘の周辺に広がる、名産の二十世紀梨農園・らっきょう畑エリアを抜けると、摩尼山への山道が始まる。景色も植物も海岸線とは全く変わってくる。夏は意外と涼しく、森林浴も楽しめるほか、歴史ロマンが感じられるエリアだ。全体的に高低差があまりなく、初心者でも楽しめるコースだが、この高低差が260mと一番大きくなっている。摩尼山を越えて峰を進むと、鳥取城のあった久松山の山頂に出る。久松山の山頂からは、市街地と日本海が一望できる。



4つ目は街。コース内に、漁村・農村・都市部（大きくないが）が点在している。自然と人との暮らしが繋がっており、そこででき上がった空気感に触れることができる。「海わたり、街つなぐトレイル」というコンセプトはここから来ている。



コース上の迷いそうな場所には、オリジナルの案内プレートを設置している。10cm×10cmのプレートで、歩く方向を矢印で示している。協議会発足時は、東浜駅から鳥取駅までの40.7kmのコースだったが、平成29年2月に東浜駅から東方(浜坂駅まで)

へ23.2kmのルート延長が決まった。このことにより、総距離63.9kmのコースとなり、ロングトレイルを歩く方にもさらに楽しんでいただけるようになった。また、トレイルコースと主要駅が近くアクセスしやすいのも、このトレイルの魅力のひとつである。

平成28年度の「全国ロングトレイルフォーラム in 山陰海岸」の開催を契機に、一気に認知度が上がった。国内外のトレイル界の著名人からも、コースに対して高い評価をいただいたことが追い風となっている。また、この年より国内の旅行会社へのPR活動を積極的に行ったことも重なり、ツアー商品として計画していただけるようにもなった。トレイルを楽しむ方が増えることにより、地域の方の関心や理解も高まるものと期待している。

今後は、ますますのPRとルート整備を行うことで、山陰海岸ジオパークトレイルという言葉も多くの方に知っていただき、「海岸わたり、街つなぐトレイル」を体感していただきたいと考えている。

新たなステージを迎える浅間・八ヶ岳パノラマトレイル

浅間・八ヶ岳パノラマトレイル（旧：安藤百福センター・トレイル）は、安藤百福センター竣工の翌年、2011年に運用を開始した（ちなみに、特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会の前身、日本ロングトレイル協議会の発足も2011年）。

当初はセンター周辺のコースとして、布引観音コース（5.0km）、蓼科・八ヶ岳展望コース（4.5km）、浅間・森林浴コース（4.0km）、御牧ヶ原コース（9.3km）を整備しただけで、お世辞にもロングトレイルとは言えなかった。しかし、2015年から長距離コースの検討を始め、千曲川コース（約15km）を2017年春に正式オープンしたほか、現在、蓼科コース（大河原峠～センター：約40km）*、軽井沢コース（軽井沢駅～センター：約38km）、浅間コース（車坂峠～センター：約18km）の整備を進めている。
※蓼科コースは、浅間一八ヶ岳ジョイントトレイル（懐古園～春日温泉）を見直したものの。

トレイルの強みとは

本トレイルは、ほかのロングトレイルのように、自然豊かな稜線の道を歩くとか、古道を訪ねるといった、分かりやすいシンボルがあるわけではない。人々の生活が息づく里山を主な舞台にしているため、生活道や散策路などを繋ぎ合わせて設定しており、それゆえやや地味なのは否めない。しかし、逆に考えれば、道は良く整備されており、距離も1時間程度で歩けるものから数日かけて歩くコースまで様々。首都圏からのアクセスも良く、全国有数の晴天率を誇るエリアなので、ロングトレイルの入門にはふさわしいと言える。

また、トレイルの名称にも表れているが、少し歩くだけで浅間連峰や八ヶ岳連峰、北アルプスなどの山々を見渡すことができ、里山の景観と相まって、気軽に大パノラマを堪能することができる。周辺は、標高700m程度の里山から2000m超の山頂へと急峻な地形になっており、昼夜・年間の気温差がとても大きく、そのため里山に生息する動植物から、本来ならば3000m級の山岳地帯に見られる高山性の動植物までが、この狭い一帯に混在しているのも特徴だ。

歴史や文化の面でも、実は隠れた見所が多い。「牛に引かれて善光寺参り」伝説発祥の布引観音、江戸時代から続く貴重な氷風穴*、朝廷に献上する良馬を産出した望月牧（現在の御牧ヶ原）、甲賀三郎伝説の舞台となった真楽寺、浅科を米所に変えた五郎兵衛用水などなど……。歩くことで点から線へ、そして面へと広がり、この地域の歴史や文化を深く知ることができる。

このように、地名度こそ高くないものの、実際に歩いてみると「良かった」との評をいただくことが多い（研修プログラムの1つとして採り入れる利用団体も増えている）。

日本ロングトレイル協会の事務局がセンターに設置されたこともあり、マスコミ対応を含め、今後より一層の利用が期待される。

※2017年9月2～3日に、第4回全国風穴サミット in 信州小諸が開催。

新たなステージに入るトレイル

先に述べたように、本トレイルは整備延伸の真ただ中である。里山中心のトレイルゆえ、道が入り組み、道標を立てるにしても土地の権利関係が複雑で、地権者の了解を得るのは容易ではない。それでも地道に整備を続け、遅くとも2018年にはコースの延伸を完了させたいと考えている。

そうならば、次はいかに運用していくかが課題となる。せっかく整備しても、歩かれなければ意味がないからだ。トレイルの魅力を発信し、認知度を上げてハイカーを増やすにはどうすればよいか、模索していかなければならない。

そのためには、ホームページなどを通じた情報発信はもちろん、マーケティングを意識した戦略が重要になる。この辺りは日本のトレイルが弱いところなので、海外の事例などを参考にしながら進めていきたい（2017年度からは「ロングトレイルのつくり方講座」〈仮〉を開設する予定なので、そこからも視座を得たい）。

また、隣接する八ヶ岳山麓スーパートレイルや浅間ロングトレイルとも連携して、お互いの交流人口を増やしていければいい。幸い、八ヶ岳の方は不通区間のコース変更に目途がつき、浅間の方は稜線を通るコース（峰の茶屋～車坂峠～地蔵峠～鳥居峠）の検討を始めている。浅間の先にはぐんま県境稜線トレイル(仮)やスノーカントリートレイルが、八ヶ岳の先には霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイルや美ヶ原高原ロングトレイルが繋がっており、それぞれの相乗効果に期待したい。

ロングトレイルの知名度は上がっているとはいえ、登山と比べればまだまだだ。しかし、ロングトレイルには登山にはない魅力があり、コースにもよるが、誰でも楽しむことができる。このトレイルが発展し、ゆくゆくは日本における「歩く文化」の醸成に貢献できれば幸いである。



春日の森セラピーロード（蓼科コース）



離山から望む浅間山（軽井沢コース）

2016年度 ロングトレイルハイカー入門講座

ロングトレイルに興味がある人の最初の一步として、歩き方や楽しみ方などを体系的に学べる連続講座を実施した（安藤百福センター共催事業）。机上講習と実習を組み合わせ、ロングトレイルについてより深く理解してもらえよう、2日間の構成とした。

■各回共通

対 象：ロングトレイルに興味がある 20 歳以上の方

定 員：20 名

参加費：各 9,800 円（2 日間の講習代、保険料込み）

安藤百福センターに宿泊希望の方は 1,100 円。食事は各自。

※第 5 回は 14,800 円、特別編は 1 日 5,000 円。

主 催：NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構

共 催：安藤百福センター

後 援：小諸市、NPO 法人日本ロングトレイル協会、
NPO 法人浅間山麓国際自然学校

■講師

山口 章（やまぐち あきら） 公益社団法人日本山岳ガイド協会認定ガイド

京都府出身、東京都在住。『山と溪谷』編集長、山岳図書編集部長、山と溪谷社事業部参事などを歴任。NPO 法人アウトドアライフデザイン開発機構代表理事、NPO 法人浅間山麓国際自然学校顧問、クライミング・インストラクター。中学時代より登山を始め、ワンダーフォーゲル部、山岳部で国内の山々を登り、海外ではモン・ブラン、マッターホルンなどの登山、登攀経験が豊富。主な著書は『社会と環境教育』（東海大学出版会・共著）、『自然との共生をめざして』（ぎょうせい・共著）など。

第 1 回「ロングトレイルの楽しみ方と事前準備を学ぶ」

日程：6/25（土）～26（日）

1 日目（机上）：ロングトレイルの楽しみ方、コースの選び方、計画書、装備と持ち物

2 日目（実習）：浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「千曲川コース」（約 15 km）

参加人数：12 名



ロングトレイルの歩き方を学ぶ連続講座がスタートした。安全に楽しくトレイルを歩くためには、どんなことに気を付けて準備をすればよいのか。実際に装備を紹介しながら、初心者にも分かるよう、丁寧に解説を行った。



日本ロングトレイル協会の節田重節会長が駆けつけ、特別講義として日本と世界のトレイルを紹介した。



2日目は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「千曲川コース」を歩いた。千曲川流域を中心として、御牧ヶ原台地やいくつかの集落を繋いで歩く、アップダウンの多いトレイルだ。



この日は天気にも恵まれ、里山の自然や景観を楽しむことができた。地元の人はずっと歩かなくなった道だが、ハイカーの心をくすぐるには十分な体験だったようだ。

第2回「歩き方の基本を学ぶ」

日程：7/16（土）～17（日）

1日目（机上）：長距離コースの歩き方、ペース配分、ストックの使い方

2日目（実習）：軽井沢駅～離山～信濃追分駅（約14km）

参加人数：15名



第2回のテーマは「歩き方の基本を学ぶ」。まずは机上で、歩き方のコツやペース配分、ストックの使い方などを解説した。



続いて、実際にストックを使って歩き、効果的な歩き方を体感した。初めてストックを使う方もいて、その効果を実感することとなった。



2日目は、浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「軽井沢コース」(仮)の一部、軽井沢駅から信濃追分駅までを歩く。しばらくは平坦だが、離山の登りは徐々にきつくなり、ストックを使ってこなしていく。



昼食後、山頂からの下りはかなり急なところもあるが、昨日の練習を思い出しながら慎重に歩みを進めて無事クリア。その後は緩やかな道を歩き、皆完歩することができた。

第3回「天気と地図を学ぶ」

日程：8/20（土）～21（日）

1日目（机上）：気象、読図、コンパスワーク

2日目（実習）：車坂峠～高峰山～高峰温泉～水ノ塔山～籠ノ登山～池の平（約7km）

参加人数：10名



第3回は、天気と地図について学ぶ。初めに2万5000分の1地形図を使った地図の見方やコンパスの使用方法を学習し、実際に目標物を探してみる。慣れないとなかなか難しい作業だ。



後半は山岳気象の基礎を勉強する。気圧配置や観天望気、季節ごとの天気の特徴など、変わりやすい山の天気を把握することがいかに大切かを学ぶ、格好の機会となった。



実習では、真夏ということもあり、標高2000m近い車坂峠から高峰山、水ノ塔山、籠ノ登山を経て池の平まで縦走する。初心者にも人気の登山道だが、水ノ塔山付近には難所もあり、注意が必要だ。



残念ながら山頂付近にはガスがかかっており、前日の地図の見方を実践することはかなわなかったが、移り変わる天候の中、高度感のある山旅を楽しむことができた。

第4回「トラブル対処を学ぶ」

日程：9/17（土）～18（日）

1日目（机上）：救急法、セルフレスキュー

2日目（実習）：春日温泉～望月宿～安藤百福センター（約20km）

参加人数：7名



第4回は「トラブル対処法を学ぶ」。まず各自のヒヤリハット経験を共有した後、靴擦れ、虫刺され、熱中症、低体温症など、ありがちなトラブルの予防法と対処法を習得した。



後半は、ファーストエイドの基本を学習した。テーピングについても学んだが、やはり実際に行ってみないと難しいようであった。



2 日目はあいにくの雨となったが、予定どおり出発。里山のコースとはいえ、約 20km の長丁場となるので、体力の消耗を押さえながら歩く。途中からはまとまった雨となり、道が水没しかけている箇所もあったが、トラブルが発生しないよう気を付けながら歩を進めた。



終盤になってようやく雨が弱まってきたものの、道はかなり滑りやすくなっており、特に下りでは慎重に慎重を期して歩く。こうして、予定時間を少しオーバーしたものの、無事全員完歩することができた。

第 5 回「ロングトレイルを縦走しよう」

日程：10/15（土）～16（日）

1 日目（実習）：安藤百福センター～糠地（約 7km）

2 日目（実習）：糠地～深沢溪谷～ねんぼう岩～高峰温泉～車坂峠（約 11km）

参加人数：11 名



2日間の縦走にチャレンジ。安藤百福センターから布引大橋まで下り、快晴の浅間連峰を眺めた。また、これから歩くルートやゴールまでの距離も目測しながら、皆で気分を高揚させていた。初日は築150年の農家民宿「青雲館」に宿泊。地元の食材を使った料理と、五右衛門風呂を楽しんだ。



1日目は約3時間という短めの行程だったが、2日目は早朝から林道～登山道を歩き、高峰高原を目指す。標高900mから2000mまで上がるので、植生が変化していく様子も楽しめる。



途中、炭焼きで使用していた窯跡があった。かつてはシラカバやミズナラを木炭として利用するため山に入っていたのが分かる。歩きながら昔の生活文化に触れられるところも、トレイルの楽しみ方の一つだ。



「新日本歩く道紀行」の森の道100選に選ばれた深沢溪谷沿いを登っていく。始まったばかりの黄葉と、爽やかな空気のおかげで、足運びは快調に進んだ。



コースの目玉の一つ「ねんぼう岩」が現れた。直径約 9m、高さ約 30m もある奇岩の迫りに、一同驚きの声を上げた。

昼食後はカラマツ林の登山道を進み、標高約 2000m の高峰温泉に到着。晴れた空、眺望を楽しみながら、車坂峠までのトレイルを踏みしめた。

第 6 回「ロングトレイルを案内しよう」

日程：11/12（土）～13（日）

1 日目（実習）：浅間・八ヶ岳パノラマトレイル「布引観音コース」（約 5km）

2 日目（実習）：安藤百福センターの森の中

参加人数：11 名



連続講座の最終回は、「自分がリーダーとなったときの歩き方」が大きなテーマ。友達や家族と歩く際は、どんなことに気をつければいいのか？ 注意点や持ち物などについて、講師から手本を示してもらいながら歩いた。浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの中でも人気のある布引観音コースを歩いたが、この日は素晴らしい快晴で、紅葉とのコントラストが見事だった。



奇岩に挟まれた参道を登り、布引観音釈尊寺に到着。「牛に引かれて善光寺参り」伝説の舞台となった場所だ。清水の舞台を思わせる観音堂内の宮殿は、国の重要文化財に指定されている。色づいた森のトンネルを抜け、安藤百福センターへ戻った。



夜はアウトドア料理にチャレンジ。燻製料理からスタートし、ダッチオーブン料理、BBQ料理と、皆で協力しながら進めていった。肌寒かったので、ホットワインが好評だった。



2日目は「トレイルでキャンプをしてみよう」がテーマ。テントの張り方や、役立つロープの使い方を学んだ。最後にワンバーナー料理として、簡単トマトチーズリゾットを作り、連続講座はフィナーレを迎えた。



※この日は貴重な「パール浅間」が見られる日だったので、午後は全員で黒斑山へと向かった（P.86 参照）。

特別編「雪のトレイルを歩こう」

日程：2/18（土）～19（日）

1 日目（実習）：アサマ 2000～車坂峠～黒斑山表コース～槍ヶ鞘～中コース～車坂峠

2 日目（実習）：アサマ 2000～第 4 リフト～水ノ塔山～高峰温泉～アサマ 2000

参加人数：1 日目 18 名、2 日目 17 名



「雪の上を歩いてみたい！」というこれまでの参加者からの要望に応えるため、特別編としてスノーシュー講座を実施した。アサマ 2000 スキー場でスノーシューの装着方法や歩き方をレクチャーして出発。急斜面を滑り下りる体験や、北アルプスの眺望を楽しみながら、浅間山のビューポイントを目指して登っていく。



90分ほどで槍ヶ鞘に到着。雪化粧の浅間山に一同から感動の声が上がった。火口からは、もくもくと噴煙が上がっている。2017年に入り、火山活動が高まっているそうだ。樹林帯で昼食を済ませ、アサマ2000へ戻った。



2日目は、アサマ2000から水ノ塔山の山頂を目指す。強風が吹いており、登頂が心配だったが、稜線に出たからは風が静かになった。



水ノ塔山には、積雪時のみ歩けるルートがあるのも魅力の一つだ。長野側から群馬側へ樹林帯を抜けると、キャベツ畑で有名な嬬恋村から草津、菅平高原、谷川岳など、遠くまで見渡すことができた。



この日は、これ以上ないほどの快晴とパウダースノーを味わうことができ、参加者の気分も最高潮となった。



帰路はダウンヒル！
誰も踏んでいない雪の上を駆け下り、爽快感を満喫した。



転んでもダメージなし！
冷たい雪が気持ちいい！

これにて 2016 年度、7 回にわたったハイカー入門講座はすべて終了した。好評のため、引き続き 2017 年度も開催する。

小諸ツリーハウスプロジェクト

今西 彩夏（日清食品ホールディングス(株)デザインルーム）

普段自然に接する機会の少ない人に、「アート」をフックにして自然体験に興味を持ってほしいという願いから立ち上げた「小諸ツリーハウスプロジェクト」。プロジェクトの活動のシンボルとして「アートツリーハウス」という、国内外で活躍するクリエイターがデザインしたツリーハウスを制作しており、現在計7棟のツリーハウスが安藤百福センターの敷地内に展示されている。

ツリーハウスのコンセプトはアーティストにより様々で、チーズをモチーフにした「チーズハウス」や、太陽光パネルが設置されていて、蓄電した電力でお湯を沸かしたり光を灯したりできるツリーハウス「NEST」、手すりも壁もない板の間が、緑美しい森の中に突如として現れる「間」など、既存の枠にとらわれない自由な発想のツリーハウスが森の中に点在している。



また2014年より、アートツリーハウスを鑑賞しながらアートワークショップやアウトドア料理のワークショップ等の様々な体験ができるイベントを年に2回開催しており、第1回のイベント「Debut Party」（5月24日開催）を皮切りに、2016年度までに計6回のイベントを開催している。

春は主に「アート」、秋は「食」をテーマとしたコンテンツ内容となっており、安藤

百福センターの敷地内の森の中で、アート・自然と触れ合うワークショップや、地元の旬の食材を使用した地元飲食店ブースの出店、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを歩くトレイルイベントなど、気軽に自然に接することができるコンテンツを来場者に体験してもらい、そこから深く自然体験活動へ入ってもらうことを狙いとしている。さらに、イベント時のみアートツリーハウスに登ることができ、こちらも親子連れに大変好評を博している。



この「小諸ツリーハウスプロジェクト」では、自然体験活動の普及の目的とともに、地元の文化・資源を活かしたコンテンツ作りを意識し、地域の活性化および地域と都市との交流も大きなテーマとしている。本プロジェクトは、その地域に住む方をはじめ様々な方の関わりにより、今後も樹のように成長し続け、形を変え、枝葉を広げ続けていくプロジェクトである。これから1人でも多くの方が自発的に自然体験活動に触れ合い、また発展させようとする行動へ繋がることを願っている。



事業報告

2016年度 自然系ビジネス・コミュニケーションセミナー

全国の自然系組織（アウトドアでの教育活動などを行う団体等）に所属する新入職員を対象とした集合研修会を開催した。各地での開催を望む声が多く、今年度は3ヶ所（東京、沖縄、京都）で企画。コミュニケーション・スキル（伝える技術および対話の技術）の習得と、自然学校の職員として身に付けておきたい基礎教養の学習に取り組んだ。

対象：自然学校などの自然や地域を舞台とした教育活動に取り組む指導者

定員：各回 20名

講師：伝える技術（1） 文章の書き方

赤羽 博之 氏（伝わる文章の書き方・講師、合同会社耕文舎代表）

伝える技術（2） インタープリテーション

山田 俊行 氏（トヨタ白川郷自然学校 学校長）※東京

田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）※沖縄、京都

伝える技術（3） KP法

川嶋 直 氏（公益社団法人日本環境教育フォーラム 理事長）

対話の技術（1） 心をつかむ話し方

桂 三金 氏（落語家）

対話の技術（2） インタープリテーション

田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）

対話の技術（3） 聴く技術

山口 ひとみ 氏（NPO 法人育自の魔法 代表理事）

主催：安藤百福センター

共催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

宇多野ユースホステル（京都会場のみ）

■各回の概要

(1) 東京 2016年11月29日（火）～12月1日（木）

会場：オリンピックセンター 受講者数：18名

コーディネーター：辻 英之 氏

(NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事)

(2) 沖縄 2017年1月11日(水)～13日(金)

会場：天久ヒルトップ 受講者数：11名

コーディネーター：砂山 真一 氏

(一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール 代表理事)

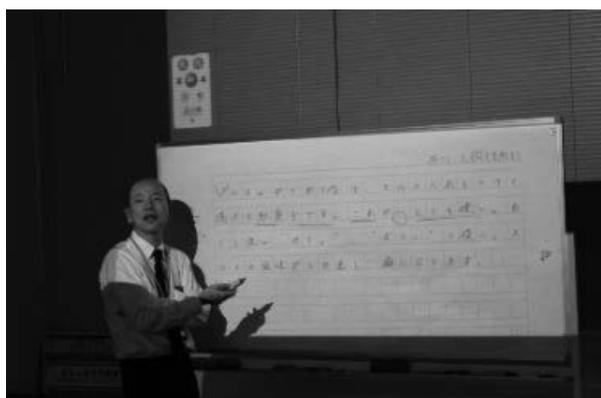
(3) 京都 2017年2月6日(月)～8日(水)

会場：宇多野ユースホステル 受講者数：19名

コーディネーター：砂山 真一 氏

(一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール 代表理事)

■セミナーの様子



伝える技術 (1) 「文章の書き方」



伝える技術 (2) 「インタープリテーション」



伝える技術 (2) 「インタープリテーション」



伝える技術 (3) 「KP法」



伝える技術（東京会場）



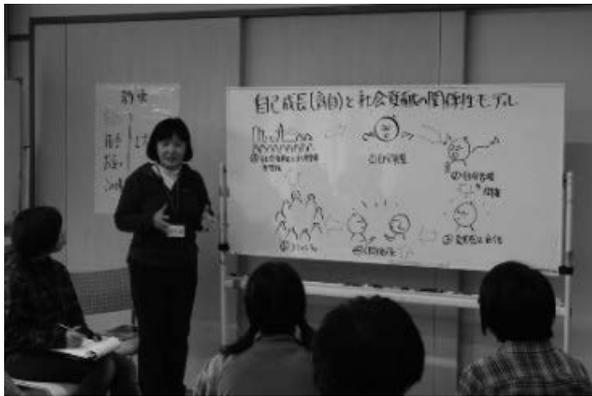
伝える技術（沖縄会場）



対話の技術（1）「心をつかむ話し方」



対話の技術（2）「インタープリテーション」



対話の技術（3）「聴く技術」



対話の技術（京都会場）

2016年度 自然系ビジネス・スタートアップセミナー

事業の企画担当者（概ね 3～10 年の中堅職員）を対象とした研修会を開催した。コンセプトは、「ビジネス・マインドを鍛える」。今回は事業の社会的評価を高めるための講座として、社会起業支援を得意とする講師陣にご協力いただき、実現できた。

■各テーマの概要

セミナー (1) 「ビジョンを実現するマーケティング戦略案を作るワークショップ」

日程：2016年11月17日（木）～18日（金）

講師：タジマ タケシ 氏（home 代表）

会場：安藤百福センター

参加者：12名

コーディネーター：田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）

セミナー (2) 「ファシリテーション・スキルを磨く！」

日程：2016年12月5日（月）～6日（火）

講師：中西 紹一 氏（有限会社プラス・サーキュレーション・ジャパン 代表）

会場：安藤百福センター

参加者：20名

コーディネーター：山田 俊行 氏（トヨタ白川郷自然学校 学校長）

セミナー (3) 「業務効率！劇的ビフォー・アフター！」

日程：2017年1月30日（月）～31日（火）

講師：小堀 悠 氏（NPO サポートセンター 事務局長）

会場：安藤百福センター

参加者：11名

コーディネーター：田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）

【各回共通】

対象：事業の企画担当者（概ね 3～10 年の中堅職員） 定員：20名

1日目 13時～2日目 15時まで

主催：安藤百福センター

共催：公益社団法人日本環境教育フォーラム

山の日制定記念 登山イベント

みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！

8月11日が「山の日」に制定されたのに伴い、地元の山に親しみ、山への感謝の機会を作ろうと、「ダイヤモンド浅間」を見に行くイベントを企画した。浅間山の山頂と朝日が重なり、ダイヤモンドのように輝く神秘的な現象を一目見ようと、地元を中心に多くの参加者が集まり、34名（さらにマスコミ関係者が5名）とともに歩いた。

期日：2016年8月11日（木・祝）3時～7時30分

行程：3:15 高峰高原ビジターセンター→【中コース】→トーマの頭 4:45/5:40→【表コース】→7:20 高峰高原ビジターセンター

参加者数：参加者34名、マスコミ関係者5名、ガイド1名（浅間山麓国際自然学校）、事務局3名

参加費：500円（保険代・コーヒー代込み）

■活動の様子



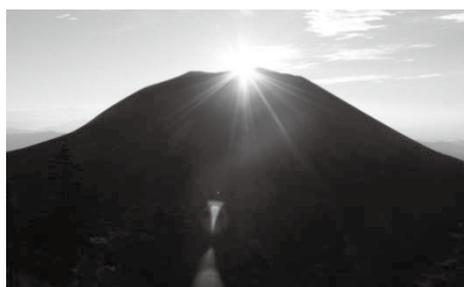
暗闇の中、トーマの頭を目指して登る

早朝3時に集合し、暗闇の中、小学生から70代まで、幅広い年齢層の方々が灯りを照らして歩く。神秘のダイヤモンド浅間を見ようと、標高差約350mの山道を登っていった。



槍ヶ鞘で無念の記念撮影

しかし、稜線に出ると一面霧に覆われており、展望は見出せない……。日の出の時間（5:26）まで待ってみたものの、霧は一向に晴れず、無念の下山となった。



ダイヤモンド浅間の絶景（9/1撮影）

今回は天候に恵まれず残念であったが、このイベントを通じて新たな浅間山の魅力を発見できたのではないと思う。企画はとても好評だったので、来年以降も引き続き開催していきたい。

※8月中旬から9月上旬が見ごろ（見る場所による）。

「ダイヤモンド浅間」に続くイベント第2弾

みんなでパール浅間を見に行こう！

浅間山の新たな魅力を発掘するとともに、地元の山に親しみ、山への感謝の機会を作ろうと、8月の「ダイヤモンド浅間」に続き「パール浅間」を見に行くイベントを企画した。浅間山の山頂部に満月前後の月が懸かり、パールのように淡く輝く神秘的な現象は、様々な条件が重ならないと見られず、天気が悪くても年に1~2日程度しかない。しかも今回は、夕焼けと同時に見られる極めて稀な機会（これを逃すと次は6年後）。この奇跡の絶景を一目見ようと、地元を中心に多くの参加者が集まり、30名（さらにマスコミ関係者が2名）とともに歩いた。

期 日：2016年11月13日（日）13時30分～19時

行 程：13:45 高峰高原ビジターセンター→【表コース】→トーミの頭 15:45/16:45
→【表コース】→18:30 高峰高原ビジターセンター

参加者数：参加者30名、マスコミ関係者2名、ガイド1名、事務局3名

参加費：500円（保険代込み）

■活動の様子



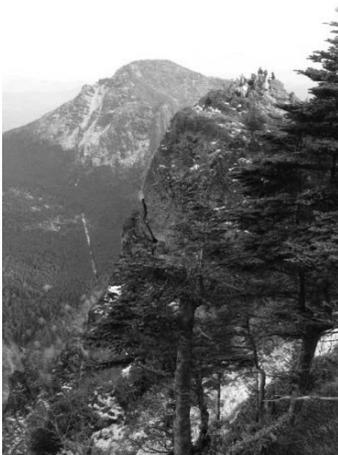
快晴の中、トーミの頭を目指して進む

快晴のもと、高峰高原を出発して稜線に沿って歩く。3日前の降雪で一部滑りやすい箇所があるため、ケガのないよう細心の注意を払いながら登っていった。



槍ヶ鞘から望む浅間山

途中、八ヶ岳や北アルプスなどの眺望に励まされながら槍ヶ鞘まで登ると、浅間山の雄姿が眼前に広がる。しかし、目的地はその先のトーミの頭。すでに撮影準備を進めている個人登山者を横目に、さらに上を目指して進んでいった。



トーミの頭で月の出を待つ

トーミの頭に到着するころから、徐々に西から雲が広がり始めた。やがて夕陽は隠れてしまったものの、浅間山はまだ持ちこたえている。本当に見られるのだろうか……期待と不安が交錯する中、いまや遅しと月の出を待った。



パール浅間現る

そして 16 時 30 分ごろ、山頂部から月が現れ、思わず歓声が上がった。スーパームーンの前日だけあって明るく、本当にパールのような輝きだ。幻想的な美しさにしばし見とれながらも、この奇跡の瞬間を逃すまいと、皆夢中でシャッターを切った。



紅浅間（前日撮影）

やがて月は浅間山から離れていき、神秘の天体ショーは 5 分ほどで終わりとなった。今回、残念ながら夕焼けと一緒に「パール紅浅間」とはならなかったものの、月の出はばっちり見ることができ、とても感動的なツアーとなった。前回に引き続きとても好評だったので、今後も開催していければと思っている。

橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではないトレッキングの魅力を伝える体験講座を開催した。講師として、幅広い世代に人気のある山岳ガイド・橋谷晃氏にご協力いただいた（主催：安藤百福センター、運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎）。

第7回「基礎から学ぶテント泊とアウトドア料理」

日程：2016年6月4日（土）11時～5日（日）17時

プログラム：

- 6月4日（土）
 - ・黒斑山トレッキング（※トーミの頭往復 標高2320m）
 - ・テント泊とアウトドア料理
- 6月5日（日）
 - ・湯ノ丸山トレッキング（2101m）
 - ・登山用品のメンテナンスについて

参加者数：参加者15名（男性5名、女性10名）、講師1名、事務局3名、サポートスタッフ1名（木風舎）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1日目）



翌日が悪天候となる予報を受け、急きょ目的地を黒斑山に変更。途中、遠くにアルプスの山々を望むことができ、トーミの頭から見る景色への期待が高まる。



頑張って登ったご褒美は、浅間山をはじめとした大パノラマ。「浅間山は絵に描いたように綺麗な山」とは参加者の声。



下山後、センターの森の中でテント泊の講習を行った。橋谷氏から基本的な張り方、幕営時の注意点や快適に過ごすコツなどを解説いただいた。その後、参加者各自で今夜の寝床を見つけてテントを張り、夜に備えた。



もう一つのテーマはアウトドア料理。ダッチオーブン、スキレット、スモーカーなど、名前の聞いたことがある調理器具でも、実際に手に取ってみるのは初めてという方が多かった。

■活動の様子（2日目）



開花を期待して訪れた湯の丸高原のレンゲツツジは、まだ咲き始めたばかりであった。足元に咲くイワカガミやシロバナヘビイチゴ、コケモモやミツバオウレンといった山の植物の解説を聞きながら、湯ノ丸山頂を目指す。



頂上付近では雲が懸かっており、遠くを見通すことはできなかったが、昼食後に天候がわずかながら回復。下山前に浅間山を望むことができた。



下山途中、登山道具の正しい調節方法やメンテナンスについて橋谷氏の解説が入る。質問タイムでは山岳テントの選び方についてアドバイスを求める方も。テント泊を通じてより自然に親しみ、山歩きを楽しんでいただきたいと思います。

第8回「アクシデント対処法と縦走」

日程：2016年8月27日（土）13時～28日（日）15時

プログラム：

- 8月27日（土） ・アクシデント対処法（室内での講義） ・アウトドア料理体験
- 8月28日（日） ・池の平湿原～東箆ノ登山トレッキング

参加者数：参加者14名（男性4名、女性10名）、講師1名、事務局3名、サポートスタッフ1名（木風舎）

参加費：19,500円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1日目）



アクシデント対処についての講義から始まった。ケガをしたらどうするか、クマやハチに遭遇してしまったらどうするか、様々なシチュエーションを想定し、どう対処するのがいいのかを学んだ。



夜は参加者と一緒にアウトドア料理。BBQでコミュニケーションを図り、ダッチオーブンやスキレットを使用した食事にもチャレンジした。

■活動の様子（2日目）



曇天のため予定を変更し、池の平湿原へ。秋の花を楽しみながら橋谷さんのインタープリテーション(解説の技術)で、自然の魅力を味わった。



朝からずっと懸かっていた雲が切れ、佐久の市街地が一望でき、思わず歓声が上がった。



東麓ノ登山にも登り、短い距離ながらも複数のピークをつなげて歩く体験をした。しっとりとした雲の中を涼しく歩くことができた。



残念ながら山頂からの眺望はなかったが、晴れていれば味わえる 360 度の大展望をイメージして楽しんだ。

第9回「冬だ！ 鍋だ！ 温泉だ！ よくばりスノーシューで雪遊び！」

日程：2017年1月14日（土）9時～15日（日）16時

プログラム：

1月14日（土） ・湯ノ丸山スノーシュー・トレッキング

1月15日（日） ・高峰山スノーシュー・トレッキング

人数：参加者14名（男性3名、女性11名）、講師1名、事務局2名、

サポートスタッフ1名（木風舎）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1日目）



まずはバスで車坂峠まで移動。天候が思わしくないため、少し早目の昼食を済ませてから湯ノ丸山に向けて出発する。参加者の半数近くが、スノーシューは今回初めてだという。白銀の世界は雪が吹き付けていて寒いですが、慣れてくるとテンポ良く足を運ぶことができる。

1m近くはあろうかというふかふかの雪。踏みしめて歩く音がさくさくと心地よい。橋谷さんに促されるまま道を外れると、ずぶずぶと股下まで雪にはまり、十分な積雪が感じられる。



ストックが示す先にはシャクナゲが葉を丸めて春を待っていた。「シャクナゲはこうして越冬します」。ところどころ、休憩も兼ねて橋谷さんの解説が入る。



出発から2時間足らずで湯ノ丸山の山頂に到着。晴れていれば見えたはずの大パノラマを想像しながら、温かい飲み物で一休みした。

帰りは足跡ひとつない斜面を駆け下りたり、ソリで滑ったりする機会も。童心に帰ってまっさらなパウダースノーを楽しんだ。

下山後はピエンロー、キムチ鍋、味噌きのこと鍋と、3種類の鍋を囲んで乾杯。橋谷さんの話を聞いたり、参加者同士語り合ったりと話題は尽きず、楽しい時間を過ごした。

■活動の様子（2日目）



強風のため、水ノ塔山の予定を変更して高峰山へ。アサマ 2000 のスキー場から高峰温泉までは、雪上車で移動する。ガタガタと大きく揺れる雪上車が銀世界を抜けていく様は、まるで南極観測隊だ。



高峰温泉で身支度を整えた後、高峰山へと出発。1 時間半ほどで到着した山頂には、高峰神社がある。初詣だという参加者もおり、それぞれお参りを済ませたら早々に下山。2 日目とあってソリ遊びにも慣れてきた参加者たちは、「ここなら滑れそう！」と自らポイントを見付けていた。



下山後は高峰温泉で昼食を取り、温泉でゆったりと冷えた体を温める。帰るころには風も弱まり、何人かは雪上車のオープンデッキに乗って、開けた視界の広大さや雪上車独特の揺れを存分に楽しんだ。

今回、2 日間ともパウダースノーに恵まれ、雪山の楽しみ方を学ぶ、いいきっかけとなった。今後も自然と大いに触れ合えるような企画を行っていきたい。

第6回浅間大学院生セミナー

環境教育や野外教育、自然体験活動など、広く「環境の分野」を研究している研究者たちが集まり、研究を通して研鑽と交流を図ることを目的に、第6回浅間大学院生セミナーを開催した。今回も分野を超えた交流を求めて大学院生が集まり、環境への関心を共有する3日間となった。

期日：2016年5月20日（金）～5月22日（日） 2泊3日

内容：1日目＝オリエンテーション、アウトドア体験

2日目＝講義、研究発表、アウトドア料理体験

3日目＝環境思想をテーマとした講義・ディスカッション

参加者数：大学院生8名、教員4名、事務局3名

参加費：6,000円（食費、宿泊費込）

主催：安藤百福センター

参加教員（順不同、敬称略）：

安藤昭一（千葉大学教授）

朝岡幸彦（東京農工大学教授）

岡島成行（安藤百福センター・センター長）

中村 達（安藤百福センター・副センター長）

■活動の様子（1日目）



今回は新緑の森でスタート。野外教育専攻の参加者がアイスブレイクをお披露目し、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルでロゲイニング（野外スポーツ）を行った。

■活動の様子（2日目）



それぞれ専門が異なる教員の講義。
初めて聞くテーマばかりで、興味が尽きない貴重な時間だった。



大学院生は、全員に対して研究発表。
終えた直後から活発な意見交換が行われる。この時間が視野を広げることに大きく役立つようだ。



最後は全員の前で、これからのアクションについて決意表明。どのような論文に仕上がるのか楽しみである。



初めて交流会を野外で実施。
皆で料理を作り、遅くまで話し込む時間となった。

■活動の様子（3日目）



環境思想の講義およびディスカッション。研究のベースとなる思想部分に触れられたことで、環境に対する意識が変わってきたという声もあった。
最後に教員の皆さまから講評をいただき、セミナーは幕を閉じた。少人数の開催だったが、その分活発な議論や深い関係性を築くことができた。多様な分野の研究者が集まり、化学反応を起こす浅間大学院生セミナー。次回もどのような出会いがあるのか、とても楽しみである。

平成 28 年度 自然ガイドステージⅠ 登山ガイドステージⅡ スキーガイドステージⅠ

安全管理技術研修 (2016 年 6 月 21～24 日/2016 年 12 月 1～4 日)

6 月 21～24 日

1. 実施報告と結果

開催場所 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
 参加者 2 名 (自然ガイドⅠ : 2 名)
 公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業
 参加費 42,000 円 担当講師 長内 覚 (全日程)
 結果 2 名とも合格

2. 講義および実技内容

プログラム

		研修時間
第 1 日目	開講式 オリエンテーション フィールドにおける安全管理 安全管理の基本認識 自然界における危険の認識と評価 リスクアセスメントの方法 リスクアセスメント実習	8 時間
第 2 日目	危急時対応技術講習会	3 時間
	危険を回避する基本的な方法 (実技) ロープを使って参加者の安全を守る方法 簡単な結び方、危険箇所にもロープを固定するアイデア	4 時間
	山の気象と地形 講義	2 時間
第 3 日目	フィールド実習 終日	8 時間
第 4 日目	自然ガイドが知っているのと得をするロープの使い方 (実技) 自然歩道、登山道におけるロープ利用の利点 ～大雨で道が荒れている時などに役立つ技術～ 具合が悪くなった参加者を安全に導く方法	4 時間
	事例検証とデータ分析	2 時間
	登山を例にした山岳事故の分析	
	まとめ 研修確認試験	1 時間
4 日間の 研修時間	机上講習	12 時間
	実技講習	19 時間
	試験	1 時間
	研修時間合計	32 時間

3. 担当講師所感

<講師担当者 長内 覚> 実技・机上とも

- ☆感想 今回は参加者が2名ということもあり、少し寂しい様子だったが、講習については人数が少ない分内容を濃く伝えることができた。参加者も満足していた様子である。
- ☆理解度・習得度 参加者の2名は山の経験が豊富であり、1名は山岳会で活動している方、もう1名は自然学校勤務者だった。そのためロープワーク等についてはスムーズに習得できていた
- ☆課題 とにかく参加者を増やすこと。
- ☆今後の要望 ウェブメディア・雑誌などで告知PRをする必要がある。

12月1～4日

1. 実施報告と結果

- 開催場所 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
- 参加者 19名（自然ガイドⅠ：14名、登山ガイドⅡ＋スキーガイドⅠ：5名）
公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業
- 参加費 42,000円
- 担当講師 平木 順（全日程）、畠山 浩一（全日程）
宮崎 孝（3、4日）、菅野 由紀子（3、4日）
- 結果 自然ガイドⅠ：14名とも合格
登山ガイドⅡ＋スキーガイドⅠ：5名とも合格

2. 講義および実技内容

- 12月1日（木）
- 9時30分 開講式 オリエンテーション
- 10時00分～10時30分
公益社団法人日本山岳ガイド協会の資格制度について 畠山
職能範囲、ガイドレシオ等
本研修会の位置付け
- 10時30分～12時00分
ガイドの装備、出発準備等 畠山
- 13時00分～14時30分
気象、山の天気 畠山
- 14時40分～17時15分

	安全管理	平木
	19時30分～21時00分	
	危急時対応技術① シュミレーション (3班に分かれて)	平木
○12月2日(金)		
	8時30分～12時00分	
	危急時対応技術②	平木
	13時00分～15時30分	
	読図、全体的な補足	畠山
	15時30分～17時15分	
	安全管理、ロープ技術基礎	平木
	19時00分～20時00分	
	救急法、手当等	平木
○12月3日(土)		
	8時30分～16時30分	
	フィールド実習 ルートガイディング、解説技術 (4班に分かれて)	
○12月4日(日)		
	9時00分～12時00分	
	実習 ロープ技術、ツエルト、搬送技術等①	
	13時00分～14時20分	
	実習 ロープ技術 ツエルト、搬送技術等②	
	15時00分～14時00分	
	研修確認試験	
	16時00分 閉講式 解散	

講師 試験を採点后、備品を事務局に発送したのち撤収

3. 担当講師所感

〈講師報告1〉 担当者 平木 順

☆講習内容 講義 (安全管理技術・危急時対応技術など)

1日目：(講義)安全管理、危急時の初期対応、(実技)ロールプレイ

2日目：(講義)危険の予知と認知、リスクアセスメント、KYT、心理学、運動生理学、法的責任、(実技)包帯、テーピング、ロープの結び方

3 日目：(実技)第 3 班担当、ルートガイディング、自然解説技術、ロープの縦方向の固定と通過のさせ方、ムンターヒッチを使った引き上げ引き降ろし

4 日目：(実技)第 3 班担当、ザック搬送、ツェルトの設営、固定ロープ復習

☆感想

自然ガイドについては活動中の方が多く、解説技術等については JMGA の体系との違いをすり合わせ、それを理解していただければそれなりに使える技術をお持ちの方が多くなったと感じた。一方、安全管理技術については、この講習で学んでいただいたことが多かったと感じた。スキーガイドの方は、自分なりの技術方法論をお持ちの方がいる反面、技術にばらつきがあり、学んでいただくことが多いと感じた。

☆理解度・習得度

自然解説技術については、今回の 4 日間の講習では時間の関係であまり触れることができなかったため、安全管理技術のみ述べる。ロープワークについては、毎回だが日ごろ触れる機会が少ない方が多いので、まだまだ練習が必要である。安全管理全般についても同様の傾向である。ただ、そのこと自体を参加者が自覚している。

☆課題

協会として会員向けの、ロープワークも含めた安全管理技術の再教育のカリキュラムを今後、用意する必要があると感じる。

☆改善策

普段ガイドとしてあまり活動していない会員や、ロープをほとんど使うことがない自然ガイドや登山ガイド向けに、資格更新研修を兼ねた技術プログラムを作る。

☆今後の要望

このところこの講習の参加者が減る傾向になっていたが、今回また増えた。このことはまだまだこの講習会の告知不足にあるように感じる。また、これで JMGA の資格を得た自然ガイドの活躍の機会を紹介する等、協会も努力する必要性を感じた。

〈講師報告 2〉 担当者 宮崎 孝

☆講習内容 12/3 (土) 天気：晴れ

08:30 蓼科・八ヶ岳展望コースの道程表作成

09:30 安藤百福センター発

蓼科・八ヶ岳展望コースにて自然観察、現在地確認等、
無積雪期ルートガイディング研修

- 11:50 824.2m ピークにて昼食
12:15 同 発
上記コースにて、無積雪期 RG 研修
13:40 安藤百福センター帰着
ロープの結び方の復習
16:10 終了

12/4 (日) 天気：曇り時々晴れ

- 09:00 安藤百福センターにて、
・ロープの固定
・ロープを使った顧客の登下降
・ツエルト設営
12:00 昼食
13:00 ザックによる背負い搬送
14:10 実技講習修了

〈講師報告 3〉 担当者 菅野 由起子

☆講習内容

- 12月3日(土)
08:30 研修室内にてナビゲーション表の作成、出発準備およびガイ
ディング中に実施すべき安全管理と危急時対応の確認。
10:00 蓼科・八ヶ岳展望コースにてルートガイディング研修を実施。
ガイド役を交代しながら、自然解説や現在地確認、危険箇所
での声掛けなどを実地で行う。
14:30 安藤百福センターの敷地内にて、ツエルトの設営、ザックを
使った背負い搬送の講習。
(16:00 終了)

12月4日(日)

- 09:00 安藤百福センターの敷地内にてロープ講習会。結びの方の復習、
横方向への固定ロープの設置、腕絡み下降を行う。
13:00 午前に引き続きロープ講習会。急傾斜におけるムンターヒッ
チを使つての登下降の練習。残り時間で、参加者よりリクエスト
の多かったショートロープの解説を行う。

(14:30 終了、15:00 から筆記試験)

☆感想

すでに自然ガイドとして活動している方向けの研修会とあって、ネイチャーゲームの要素を取り入れた自然解説術など知識豊富な人が多かった。その反面、地図やコンパスの使用方法やロープワーク、ツェルトの設営など、安全管理面の技術については学んだ経験が少ないように見受けられ、かつ本人たちもそれを大いに感じているようだった。ガイド資格を取得後も、積極的にガイド協会が主催する講習会に参加することを要望する。それと、装備表からツェルトが抜けていたので、今後の開催時には注意してほしい。

安藤百福センター事務局スタッフ紹介

■安藤 伸彌（あんどう のぶや） 東京都多摩市出身



主担当 研修会・委員会等の企画運営、トレイルコースの開発整備

趣味 一人旅、トレッキング、農的暮らし

資格等 自然ガイドステージⅠ、環境社会検定試験合格 等

初めは利用者側でセンターに来ていましたが、信州への移住を機に、ひよんなことからスタッフとして働くようになりました。半農半X的な生き方が理想ですが、実現は容易ではない……。

■小島 真一（こじま しんいち） 神奈川県横浜市出身



主担当 研修会やイベントの企画運営、広報、情報交換会

趣味 上達しない料理

資格等 登山ガイドステージⅠ、自然ガイドステージⅠ
バーベキュー・インストラクター（初級）等

安藤百福センターがオープンしたときから事務局として活動しています。アウトドア関係の人が集まる環境にいるので、自然とたくさんの指導者と知り合うことができました。「こんな人紹介してくれない？」という相談大歓迎です。

■横堀 咲紀（よこぼり さき） 長野県小諸市出身



主担当 研修団体の受け入れ、イベント企画運営、外国人対応

趣味 読書、短歌、散歩、旅行、歌

資格等 日本語教育能力検定試験合格、HSK（漢語水平
考試）6級

中国で2度の日本語教師を経験。帰国後、そろそろ腰を落ち着かせなければと地元での職を探してセンターにたどり着きました。植物の名前がなかなか覚えられません……。

【事務局コラム】 日本語教師からアウトドアの世界へ

横堀 咲紀

「じゃあ、散歩に行きましようか」

そう言われて、私は思わず真顔で聞き返した。「えっ、散歩？」。2014年4月上旬のことだった。青年海外協力隊の日本語教育隊員として派遣された中華人民共和国遼寧省鉄嶺市の鉄嶺市朝鮮族高級中学の食堂で、この会話は行われた。散歩に誘ってくれたのは日本語科の李主任。私の母より少し若く、勉強熱心で綺麗な先生だった。「ご飯を食べたら運動しなきゃ、でしょう」。なるほど。時刻は12時を少し回ったところ。ちょうど5時間目が終わり、学生たちがどっと食堂に流れ込んできた。授業がなかった私たちは混雑する前に昼食を終えていたので、波に逆らうようにして外に出た。「あの山に行きましよう」。李先生が指差す先、校門の外には山というには可愛らしい小高い丘のような場所があった。龍首山という名のその山は、最高でも標高156mほどらしい。学校はおおよそ60mのところにあっただので、私がこれまで持っていた山のイメージとはほど遠い。その山を、李先生と2人で歩いた。インドア派な私だが、歩くのは好きだ。「先生、あの花は何ですか」「迎春花といいます」などと話しながら、舗装された道を、多くの人と行き交った。中国人にとって散歩は当たり前の習慣だ。唐突に思い出したことがあった。「趣味は……散歩です」。どこか内気な印象を与えるその学生は、しばし悩んだ後そう答えた。2012年10月ごろだったろうか。当時、吉林省の吉林市にある北華大学で日本語教師をしていた私と学生とのやりとりである。散歩だなんて、つまらないなあ。そのときはそう思っただけだった。あれはつまらない趣味ではなかった。最高に贅沢な時間の使い方だった。



龍首山。左右に見えているのは校舎



初めて見たときはギョッとしたりスの指

中国人は思い思いに道を歩く。ポータブルオーディオプレーヤーを肩から下げ、大音量で音楽を聴きながら歩く人、後ろ向きに歩く人、ヒマワリの種を食べながら歩く人……。人馴れしたリスがすぐそこまで来て、誰かが置いていった種を食べている。へえ、リスの指って人間みたいだ。そんなことを散歩の中で知った。

龍首山を通ると 30 分ほどで街に出る。ときおりデパートへ歩いていった。歩いて帰ろうとして迷ったこともあった。冬は氷点下 20 度を下回る日もあったが、冴え冴えとした空気と、龍首山の上の広場で踊っている人たちを見るのが好きで、よく行った。舗装されているところとされていないところがあり、それぞれに趣がある。花の名前は分からなかったが、散歩するにはちょうどいい山だった。龍首山からは鉄嶺の平坦な街並みがよく見えた。私が生まれ育った小諸市とは、全く違う景色だった。



龍首山の上から見た鉄嶺。市街地は反対側

2 年間の任期を終え帰ってきたとき、父は南相木の山の中に小さな別荘（通称山小屋）を買い、妹は就職したもののすぐに転職、茅葺き屋根職人に弟子入りを果たしていた。山小屋で薪割りをし、薪ストーブを焚くという非日常が私の人生に現れた。茅葺き屋根職人見習いの妹といると、私がただの野山としか認識していなかったものに色が付いていく。植物の名前や生態を知ると景色が変わってくる。野生の中で生き抜く知識や力を、妹は身に着けていた。そういう生き方をしたいと思い始めたおり、当センターの求人を見付けた。ハローワークのソファに座り順番を待つ間、スマホの小さな画面でホームページを見た。「これだ！」と思った。登山もアウトドアも全くの初心者ではあったが、周りを自然に囲まれた職場は、毎日が楽しい。今のところ登山をしていて、もう無理だと思ったこともない。ひとつずつ新しいことを学ぶたびに、生活が鮮やかになるような気がしている。世界が広がれば広がるほど、自分の存在が輪郭を持ち始める。と同時に、幼いころ父に連れられてキャンプやスキーに行ったことを思い出す。ここ信州小諸で自然に囲まれ、恵まれた子ども時代を過ごしていたことに、改めて気付いた。



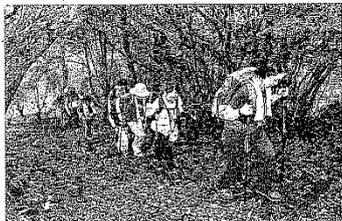
学校から龍首山へ上がる道



龍首山の上の広場。ときおり太極拳をしている団体がいる

卷末資料

ガレんとスコープ



ロングトレイル入門講座で群衆の難山を登る参加者

日本のロングトレイルの事例

名称	概算距離(km)
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	100
広大な畑や放牧風景を見て地元食材を味わいながらのんびり歩く	
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	200
登山道、自然歩道、歴史的な街道で山麓を周回。自然も文化も豊かな	
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	60
房総半島南部の海岸や花畑などを巡る。NPO法人・千葉自然学校が特定日に案内する	
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	80
中央分水嶺にあり、琵琶湖や若狭湾の絶景を眺めながら歩ける	
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	80
伏見稲荷、大文字山、鞍馬、嵐山など京都の外周を2泊3日程度で巡る	
【山岳】山岳縦走(山岳縦走)	130
修行僧が巡った古道がベース、道沿いに社寺や石仏が点在する	

ロングトレイルで野山へ

自然や歴史、文化に触れながら野山を歩く「ロングトレイル」が日本でも広がり始めた。登山ほどハードではなく、中高年や女性でも気軽に始められるのが人気の理由だ。

ロバート・レンドフオード
主演で30日に日本でも封切られ、米映画「ロング・トレイル」(米東部のアパラチ山脈にわたる14州約3600キロにわたる自然歩道「アパラチアン・トレイル」を題材とした)で登場した。主人公は、2人で歩く物語だ。

初心者も楽しめる
欧米発祥のロングトレイルは登山に近いものから里山や街道を歩くものまで様々。短く日帰りのコースは「ハイキング」や「トレッキング」と言じだが、一般的には数十〜数百キロ、米国では5000キロ近いものもあり、何回かに分けて歩く「バッチ」が多い。

6月末、NPO法人主催のロングトレイル入門講座で長野県小諸市のトレイル15キロを初めて歩いた東京府南東京市の会社員、斎藤陽一さん(32)は「登山だとずっと登りつづき下りつづきで景色がとまらない。今回は民家の軒先を借りたり景色眺めたり景色を楽しむ」と語る。

初心者でも楽しめるのが魅力だが、季節や天候で難易度は変わる。自分の技術に見合ったコースを選ぶ必要がある。日本初の本格ロングトレイルとされるのが、長野・新潟県境の関田山脈の稲根山だ。2008年全通した信越トレイル。NPO法人「信越トレイルクラブ(長野県飯山市)」が日本で初めてボランティアによる管理システムを導入して整備、運営している。小山邦武代表理事は「旧道・古道を重視せずにはロングトレイルの力で復元し、里山と人間の身近な関係を体験できる」と語る。約80キロのルートは4〜6日で踏破できる。

歩く旅、登山より気軽

「歩く旅」は、環境省が復興支援を目的に、青森県八戸市から福島県相馬市まで700キロ以上のルートを計画し、370キロが通った。来春に全通する予定。住民と話し合っでルートを決め、基本は既存の道をたどる。断崖絶壁や浜辺、旧街道も変化に富む。「歩く旅」で歌い自然とつきあってきた風土、暮らしを体感し、地域の人の交流にもつなげてほしい」と東北地方振興事務所の首原恵自然保護官。自然観察、アウトドア体験、健康づくり、巡礼など多様な利用を想定する。

山岳観光でこ入れ
トレイルが日本に普及してきた理由を、北海道大学の木村宏特任教授は「一たすら頂上を目指すという登山だけでなく、山の楽しみ方が中高年や女性に広がった。高齢化が進む山岳がロングトレイル開設に乗り出す例もある」と語る。

(長野支局長 宮内慎二)

CURRENT SCOPE

お遍路との類似性指摘
環境整備の遅れには不満

ツイッターではロングトレイルが各地に広がっている様子がうかがえる。「へんま(兵庫県)のトレイル、関内唯一の縦線100キロのロングトレイル(つばら山)」と、群馬県が6月22日に設置した検討委員会に関する記事や「信越トレイルの整備、機会があればつてみたい」という声があった。

「四国遍路は歴史も伝統も文化も秀逸で世界では屈指のトレイルではないのか」と、お遍路のロングトレイルの類似性も指摘されている。

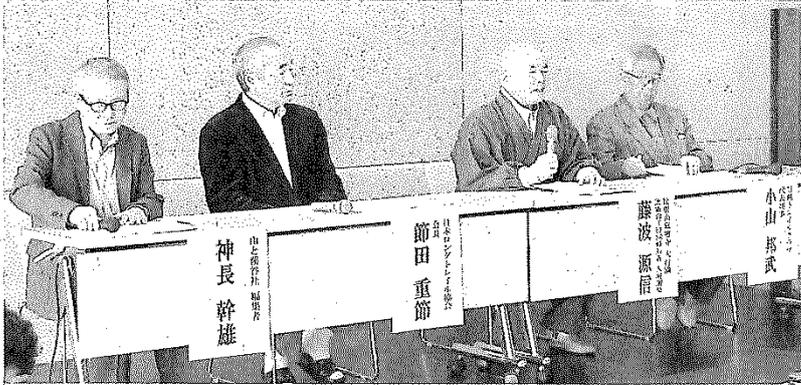
一方、「ルートにポイントサイトが欲しい」など、欧米と比べ環境整備が遅れていることに不満を示す意見も散見された。調査はNETコムオンラインの協力を得た。

スナも含め山岳観光は全体でみるより伸びている。日本生産性本部がまとめた16年のレジャー白書によると、登山の参加人口は09年の1億230万人から15年は730万人に減少。御嶽山の噴火遺難などで登山を控える人が増えたのが一因だ。また、09年ごろからの「山ガール」ブームで12年に11.6%に高まった20代女性の参加率は15年に6.4%に。山岳観光地を抱える自治体やアウトドア業界が、これに乗り込んで年間を通じて広域観光につながるロングトレイルに奮起した面もある。

前日本山岳会副会長で日本ロングトレイル協会会長の稲田重郎氏は「長野県で、四国のお遍路さんなど日本には昔から歩く文化があった」と指摘。「ロングトレイルは若者が山に目を向ける入り口になり、登山がきっかけになった層も受け入れ可能」とし、レジャーの多様化に期待をかける。

(長野支局長 宮内慎二)

ロングトレイル 魅力語り合う



ロングトレイルについて語り合う藤波源信住職
(右から2人目)ら=小諸市の安藤百福センター

千日行達成の住職ら小諸でシンポ

長距離を歩く旅を考える「ロングトレイルシンポジウム」がこのほど、小諸市で開かれた。比叡山長寿院住職の藤波源信さんらが、「信仰の道と現代のロングトレイルを語る」と題して語り合った。

信仰の道「農民の楽しみでもあった」

2月25日に開かれたシンポはNPO法人日本ロングトレイル協会主催。会場の安藤百福センターには、全国各地から約100人が集まった。藤波さんは比叡山の山中を1日数十キロ、約千日間歩く千日回降行を2003年に達成している。

藤波さんは、小山邦武信越トレイルクラブ代表理事、節田重節日本ロングトレイル協会会長の鼎談で、自身が達成した千日回降行について「修行という過酷とかつらいとかいうイメージがあるが、本人としては日々歩くのが楽しいので続けることができた」と話した。

四国の霊場を巡る遍路道や熊野古道などの信仰の道について、藤波さんは「巡礼や修行というだけでなく、農民が農閑期に楽しむ小旅行でもあった」と指摘。「車ではなく、2本の足で歩くことで心のあり方が変わってくる」と歩くことの大切さを強調した。

節田さんは「今、中山道の街道を歩く人の4分の1は外国人。歩くことによってその土地の歴史や文化を知ることが外国人にとっても魅力になっている」という。全国各地でロングトレイルを整備する動きが高まっていることについて、小山さんは「信越トレイルの整備では2千人近くのボランティアがかかわった。行政任せにするのではなく、みんなで一緒に汗を流してトレイルを整備していかないと長く続かない。トレイルを利用する人たちと、そこに暮らす人たちの交流を大事にしていきたい」と話した。

2017年3月9日 朝日新聞（長野版）

ロングトレイル

安全確保めざす

▽「創業者の安藤百福は食育とともに、歩くことの重要性を『歩育』という言葉で説いていた」と話すのは白濁食品ホールディングス社に携わっている安藤スポン・食文化振興財団理事長を務める安藤宏基氏。小諸市で開いた第4回ロングトレイルシンポジウムで講演した。

し財団の取り組みを紹介した。

▽「自然や歴史、文化に触れながら野山を歩く『ロングトレイル』コースは日本各地に広がり現在の総延長は約2000キロ。『将来5000キロ以上に伸ばしていきたい』と話す安藤氏も、安全確保に力を入れている。

2017年3月2日 日本経済新聞（長野版）

「歩く旅を楽しむ道」普及へ

安藤百福センター
小諸市内に2つのロングトレイル

小諸市大久保の安藤百福センターに事務局がある「日本ロングトレイル協会」(節田重節会長)は25日、同センターでシンポジウムを開き、全国から約140人が参加した。

ロングトレイルは、同協会によると「2歩の旅を楽しむために作られた道」のことを指す。小諸市では同センターが起点的な「浅間・ハク括ハノラマトレイル(全長63キロ)」と、浅間山麓を中心とした「浅間ロングトレイル(全長80キロ)」の2団体があり、協会にはこの2団体を含め、全国18の団体が加盟し、各地でロングトレイルの普及に努める。シンポジウムでは、同センターを運営し、協会の運営も財政面で支援する「安藤スポン・食文化振興財団」の安藤宏基理事長が「安藤財団がロングトレイルを支援する理由について」と題して記念講演。また、比叡山の千日回降行を達成した長寿院住職の藤波源信さん、信越トレイルクラブの小山邦武代表理事、日本ロングトレイル協会の節田会長による鼎談があった。

2017年3月10日 小諸新聞

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
安藤 昭一	千葉大学 シニアフェロー
荻原 健司	スキーノルディック複合五輪金メダリスト、北野建設株式会社スキー部 GM
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役副社長・COO
委員	飯田 稔	仙台大学 上級研究アドバイザー
	小泉 俊博	小諸市長
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 代表理事 安藤百福センター センター長
	水野 正人	ミズノ株式会社 相談役会長

諮問委員会

委員長	節田 重節	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 会長
委員	磯野 剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長 一般財団法人全国山の日協議会 理事長
	神長 幹雄	株式会社山と溪谷社 編集者
	木村 宏	北海道大学 特任教授 特定非営利活動法人信越トレイルクラブ 理事
	橋谷 晃	木風舎 代表
	山田 俊行	トヨタ白川郷自然学校 学校長

(50音順、2017年4月現在)

2016 年度 安藤百福センター実施事業

■主催	
5/20～22	第 6 回浅間大学院生セミナー
5/28	ツリーハウスイベント「自然で楽しむアートフェス！」
6/4～5	第 7 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
8/11	みんなでダイヤモンド浅間を見に行こう！（山の日制定記念イベント）
8/27～28	第 8 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
11/5	ツリーハウスイベント「信州の収穫祭」
11/13	みんなでパール浅間を見に行こう！
11/17～18	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（マーケティング）
11/29～12/1	自然系ビジネス・コミュニケーションセミナー（東京）
12/5～6	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（ファシリテーション）
1/11～13	自然系ビジネス・コミュニケーションセミナー（沖縄）
1/16～17	第 9 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
1/30～31	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（IT 活用）
2/6～8	自然系ビジネス・コミュニケーションセミナー（京都）
■共催	
	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構
6/26～27	第 1 回ロングトレイルハイカー入門講座
7/16～17	第 2 回ロングトレイルハイカー入門講座
8/20～21	第 3 回ロングトレイルハイカー入門講座
9/17～18	第 4 回ロングトレイルハイカー入門講座
10/15～16	第 5 回ロングトレイルハイカー入門講座
11/12～13	第 6 回ロングトレイルハイカー入門講座
2/18～19	ロングトレイルハイカー入門講座 特別編
2/25～26	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 第 3 回ロングトレイルシンポジウム
6/21～24	公益社団法人日本山岳ガイド協会
12/1～4	自然ガイドのための安全管理技術研修会
3/4～5	公益社団法人日本山岳会 第 5 回登山教室指導者養成講習会

2016 年度 研修利用状況表

月	日	団体名	事業名
3	31～1	特定非営利活動法人やまぼうし自然学校	マネジメント基礎研修
4	1～3	東京農工大学	環境教育ゼミ合宿
	12～13	公益社団法人日本山岳ガイド協会	検定員研修会
	16～17	ミズノ（株）	ミズノアウトドアスクール
	18～21	一般社団法人ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン	野外・災害救急法 Wafa アドバンスレベル
	23～24	人材マネジメント部会小諸支部	人材マネジメント部会長野支部研修会
5	8～12	日清食品ホールディングス（株）人事部	社員研修
	12	信州外あそびネットワーク	運営会議
	14～18	森環境教育事務所	自然体験活動指導者養成講座 （中国人対象 NEAL リーダー講座）
	20～22	安藤百福センター	第 6 回浅間大学院生セミナー
	25～26	一般社団法人婦恋軽井沢自然倶楽部	自然体験活動指導者養成講座 （NEAL リーダー研修）
	26～27	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会	理事会・総会
	27～29	安藤百福センター	ツリーハウスイベント 「自然で楽しむアートフェス！」
6	4～5	安藤百福センター	第 7 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	9～10	（株）丸山珈琲	社員研修
	11～12	BAPA 事務局（株式会社ベンチ）	旅する BAPA
	17～18	植村冒険館	植村冒険館アドベンチャー講座
	20	信州外あそびネットワーク	人材創出部会ミーティング
	21～24	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
	26～27	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第 1 回ロングトレイルハイカー入門講座
	26	上田市教育委員会	野外活動リーダー養成講座
7	1～2	インハウスデザイン協会	IDM 小諸会議

月	日	団体名	事業名
7	16~17	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第2回ロングトレイルハイカー入門講座
	16	日清食品(株)長野営業所	ツルヤおいしいしょくいくスクール & 親子ハイキング
	23~24	長野県レクリエーション協会	2016年夏学習会
8	4~5	日清食品ホールディングス(株)人事部	社員研修
	10~12	日本獣医生命科学大学	理科教育法(教員養成課程)
	17~19	清泉女学院短期大学	保育特別講座 (自然体験活動指導者養成)
	20~21	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第3回ロングトレイルハイカー入門講座
	23~24	株式会社バリューボックス	社員研修
	25~27	日清食品グループ	百福士事業「あやしいオヤジを正しいオヤジに変える」プロジェクト
	27~28	安藤百福センター	第8回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
9	2~4	日本獣医生命科学大学	理科教育法(教員養成課程)
	5~6	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	9	信州外あそびネットワーク	NEAL インストラクター更新講習会
	10~13	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	17~18	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第4回ロングトレイルハイカー入門講座
	19~22	明治学院大学	アグロツーリズムと環境教育
	24	小諸市役所	小諸アグリカルチャーミーティング
10	1~2	(株)ON-WIPPS	ASE研修
	7~10	日本ボーイスカウト長野県連盟	ウッドバッジ研修所 ビーバースカウト課程 長野第10期
	12~13	一般社団法人孀恋軽井沢自然倶楽部	自然体験活動指導者養成講習 (NEALリーダー研修)
	15~16	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第5回ロングトレイルハイカー入門講座
	24~26	日清食品ホールディングス(株)人事部	5days Internship work as a creator

月	日	団体名	事業名
10	29～30	小諸市役所	地域資源の利活用を考える研修
11	4～6	安藤百福センター	ツリーハウスイベント 「信州の収穫祭」
	7～8	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのためのロープアクティビティ
	10～11	小諸市役所	職員研修
	12～13	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	第6回ロングトレイルハイカー入門講座
	17～18	安藤百福センター	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（マーケティング）
	19～20	公益社団法人日本山岳会	図書委員会定例山行
	21～22	公益社団法人日本環境教育フォーラム	東京シニア自然大学「浅間山を学ぶ」
	23～24	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	28～29	信州外あそびネットワーク	NEAL リーダー養成会
12	1～4	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
	5～6	安藤百福センター	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（ファシリテーション）
	10～14	特定非営利活動法人国際自然大学校	スキートレーニング
1	16～17	安藤百福センター	第9回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	26～27	(株)丸山珈琲	社員研修
	30～31	安藤百福センター	自然系ビジネス・スタートアップセミナー（IT活用）
2	9～11	日清食品ホールディングス（株）人事部	5days Internship work as a creator
	18～19	特定非営利活動法人アウトドアライフデザイン開発機構	ロングトレイルハイカー入門講座特別編
	23～24	信州外あそびネットワーク	第4回信州外あそびミーティング
	24～26	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会	第4回ロングトレイルシンポジウム
	28～1	有限会社きたもっく	社員研修

月	日	団体名	事業名
3	2～4	富士通（株） 長野支社	クリエイティブ・信州ソン
	4～5	公益社団法人日本山岳会	第5回登山教室指導者養成講習会
	10～11	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	22～24	社会福祉法人みまき福社会	職員研修

編集後記

今回から編集担当となりました。これだけたくさんの文章とにらめっこするのは人生初。どんな内容にしたら読者に喜んでもらえるだろうかと妄想を膨らませつつ、執筆者・関係者のご協力により完成しました。ありがとうございました。◆特集はロングトレイルです。これまでの指導者養成事業だけでなく、アウトドア全般にウイングを広げた新しい枠組みを作っていく方針です。初のトレイルハイカー講座も好評で、首都圏からたくさんの参加がありました。◆自然系ビジネスセミナーでは、一般的な事業展開に必要なスキルをサポートするシステムが、業界としてまだまだ不足していると感じました。◆山の日にダイヤモンド浅間は現れませんでした。期待しながら登った30人の方々とは、不思議な一体感がありました。感動的だったパール浅間の企画とともに継続していきたいと思います。◆表紙は浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの千曲川コースです。暑い日は、終盤に通る天然の冷蔵庫「風穴」でクールダウンするのがオススメです。◆今さらですが、「スタッフ紹介」を掲載しました。新人のコラムも併せてご覧ください。(K)

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
2016年度 事業報告書

発行日：2017年8月10日

発行人：安藤 宏基

編集人：中村 達

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel：0267-24-0825

Fax：0267-24-0918

URL：<http://momofukucenter.jp/>

E-Mail：info@momofukucenter.jp

